雜誌『中座』臨時增刊

義士出陣

京都南座
才四輯

御贈答に

大丸商品券

便利で重寶

神戸・金澤
大阪・京都 各店共通

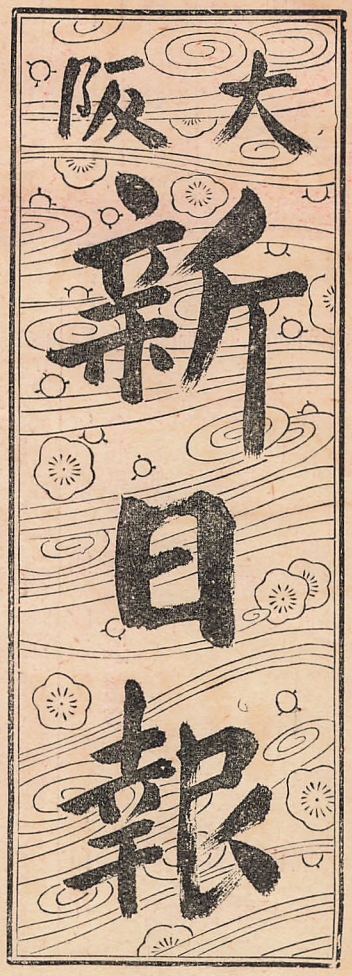
御贈答用品を始め防寒
保温の必需品正月用品
等豐富に陳列し本年最
後の奉仕を致します

歳末の
御買物は大丸へ

月曜休業
夜間營業

大阪 大丸呉服店 橋齋心

▲一番面白い▼



▲夕刊新聞▼

大正十五年十二月一日發行

雜誌「中座」臨時增刊

顔見世號

京南座第四輯

口繪 ◇錦繪に見入る白井松次郎氏（大阪松竹合名社々長）◇大谷竹次郎氏（東京松竹合名社々長）と南座「顔見世」氣分の竹矢來◇「あじろ舟」中村鴈治郎の網代屋津之助◇「冥橋」尾上梅幸の小百合姫◇「菅原傳授手習鑑」（車曳の場）市川中車の松王丸◇松本幸四郎の梅王丸◇中村鴈治郎の櫻丸◇（寺子屋）中村鴈治郎の武部源藏と中村魁車の女房戸浪◇「羽衣」中村福助の天女と松竹樂劇部女生徒◇昔の顔見世番附（初代國貞筆）

「顔見世」偶感　白井松次郎　二

◇顔見世の感想と考證◇

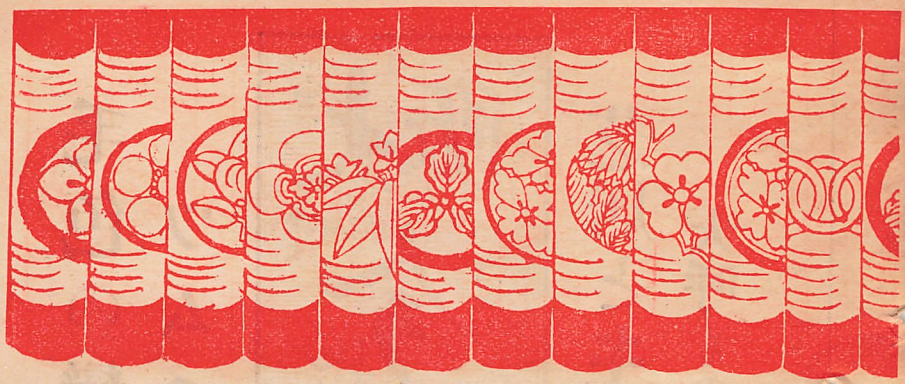
顔見世の句　藤井紫影　四
師走の芝居　成瀨無極　五
顔見世漫談　高安吸江　六
顔見世と嵐三右衛門　木谷蓬吟　一〇
顔見世改良案　山本修二　一二
明治時代の顔見世　堂本寒星　一四

中村鴈治郎
尾上梅幸
松本幸四郎
市川中車
各優の印象と感想　諸名家五十餘氏　一六

顔見世芝居の話　楠田敏郎　二九
かぶせ　食滿南北　三六
京の顔見世雜感　石割松太郎　三八
顔見世の幻想　富田泰彦　四〇
顔見世と芝居興行　落合浪雄　六四
大阪の顔見世　南木萍水　八四

◇狂言の研究と解說◇

顔見世とあじろ舟　高安月郊　八



顔見世と狂言雜感　竹内勝太郎　二
竹田出雲と「寺子屋」　並山拜石　五一
毛谷村について　高原慶三　六六
鴈治郎と新作品　山上貞一　七五
梅玉追善と「忠臣藏九段目」　姥谷愁　四三

◇歌舞伎の型に就て◇

歌舞伎の型と創造性　林久男　四四
顔見世とその型　川尻清潭　四七

◇歌舞伎詞華集◇

人魚の唄（短詩）　土屋みつる　三六
顔見世の頃（川柳）　岸本水府　三七
かほみせ（俳句）　川尻清潭　四一

新作　東山物語　二幕　大森痴雪　九二

◇上演狂言と讀物◇

□戾橋（上演台本）　油屋久二　三二
□「菅原」車曳の塲（上演台本）　五六
□菅原寺子屋漫話　六〇
□羽衣（上演台本）　六四
□彦山權現誓助劍（芝居物語）　黎夢生　六九
□あじろ舟（芝居小說）　朝生順三　七八
□山科の隱れ家（芝居見たまゝ）　蓼雨　八八
□「保名」と「春調娘七種」　鮭之助　九一

◇

劇壇往來　南座顔見世興行役割一覽
「中座」改題豫告　道頓堀各座師走興行　南座顔見世狂言一覽
讀者倶樂部

編輯後記　姥谷生
表紙・カット　大塚克三

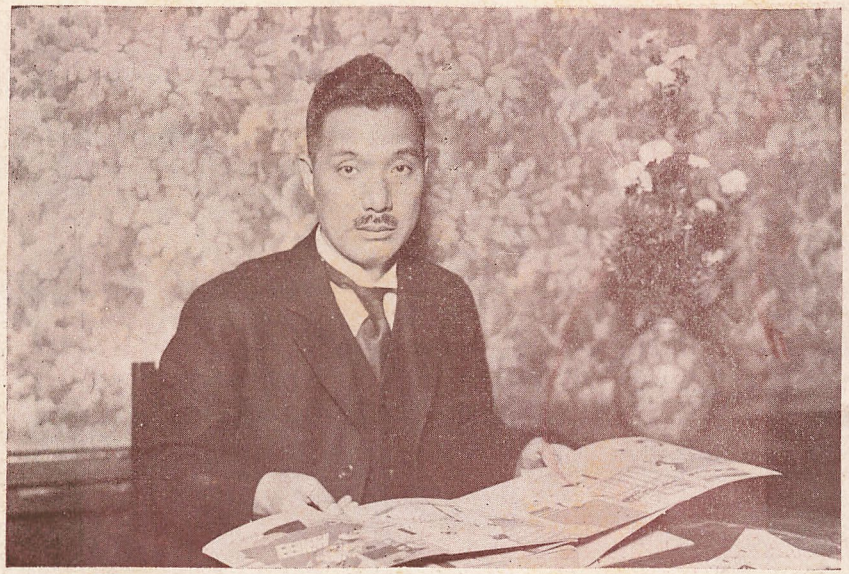
毛色の變つた
ツムヂ曲りの新聞

大阪今日新聞

芝居とキネマが
大呼もの〻面白い日曜附錄

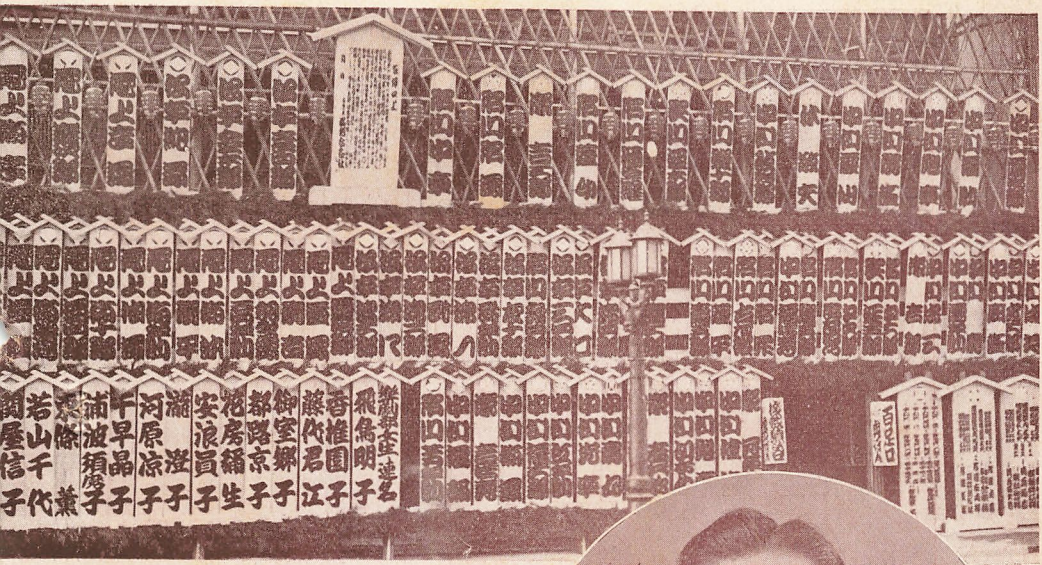
發行所　大阪市東區大川町四十七番地

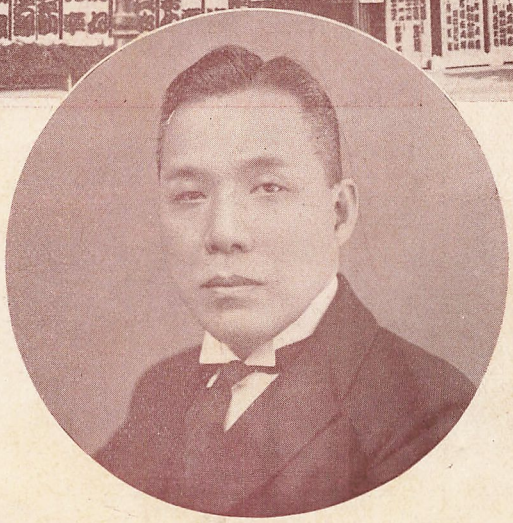
電話局本　四二三二・五〇七番
一〇二六・〇〇二六番



白井松次郎氏（大阪松竹合名社々長）

多忙な事務から離れて今「菅原」の錦絵を展ることとなり





大谷竹次郎氏（東京松竹合名社々長）

南座「顔見世」第分の竹矢來と招牌（初日前）

全國鐵道各驛掲出廣告取扱
京都市營電車々内廣告取扱
京津、京阪、嵐山電車
沿道及車内廣告
京都、大津全湯屋廣告
一手取扱
市内掲出廣告及諸看板製作
廣告ニ關スル裝飾建設請負

京都市三條寺町角
實業廣告商事株式會社
電話長中四三二〇番

るれか好ちつい

は品答贈御暮歳

松竹共通觀覽切手

この切手一枚で全國何處へ往つても松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

お手頃の種類

一圓・二圓・三圓・五圓
十圓・十五圓・廿圓・五十圓 の八種

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品、本家茶屋直營の案内所等一切の御支拂に通用致します

樣式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です。

お手近の發賣所

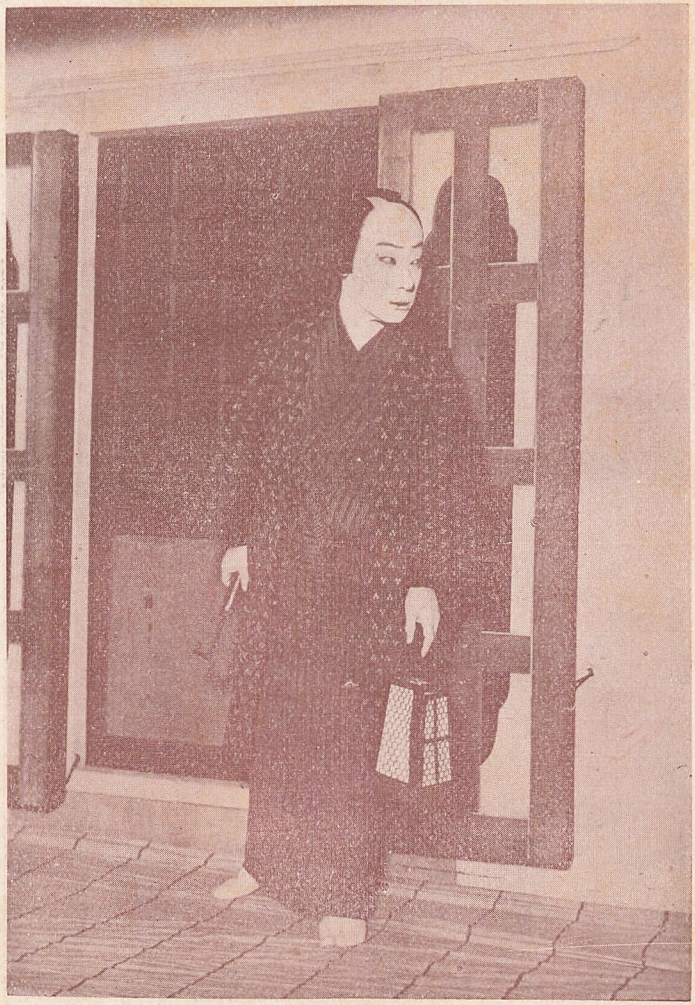
大阪南區久左衛門町八　松竹合名社（電南一二四〇・六六八五）

大阪道頓堀　角座（電南六九五六）

大阪東區高麗橋心齋橋筋　プレイガイド（電本三三〇九・三九九五）

京都市河原町蛸藥師上ル　松竹合名社（電中二三五二）

其他各座にては三日前より場席の取れる指定番號入前賣切符も發賣してゐます



中村鴈治郎の網代屋津之助

第二場　「あじろ舟」　高安月郊氏作

中連津盤常　橘　辰　事作所

尾上梅幸の小百合姫（鬼女）

幸四郎の渡邊綱を相手に腕を競ひまする

御觀劇御宴會の御胸花（マーク）
御贈與の花環花束

並に美しい娘さん舞妓さん達の摘花のかんざし

造花一輪差……は

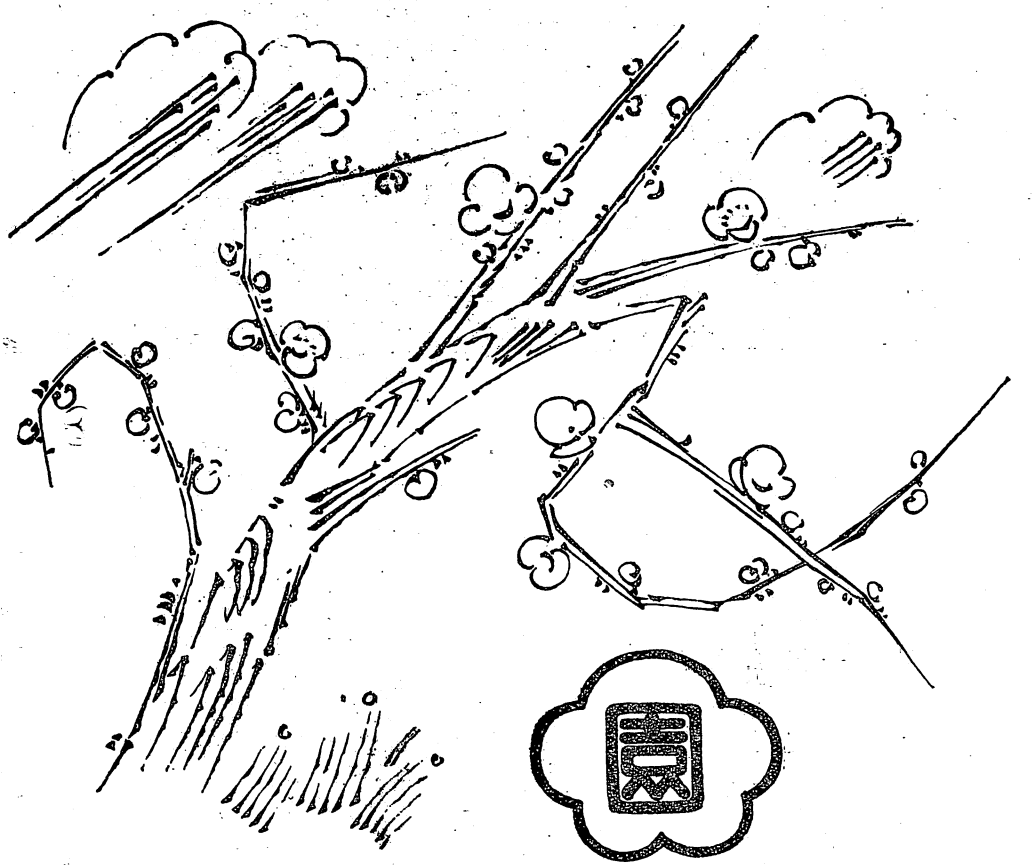
是非共弊店に御下命の程御願致します

造花花簪輸出商

上村商店內地部

大阪市東區南久寶寺町三丁目
電話長船場一〇七〇番
振替口座大阪二二〇七番

花環……一台　五圓以上
花束……一把　三圓以上
一輪差……一本　十錢以上
摘花簪……一本　三十錢以上
（花櫛、前差、玉簪、根掛、平打天止）



梅園

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

中座食堂

本店　太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

市川中車の松王丸

場の曳車「鑑習手授傳原菅」

松本幸四郎の梅王丸

塲の曳車「鑑習手授傳原菅」

石版・活版・印刷一式

京都市新烏丸夷川上ル

片岡印刷所

電話上一八五六番

御料理
仕出し
京都團栗橋詰
美の利
電中 三三七番
五八二九番

沖すき
御料理
京都末吉町縄手東入
梅吉支店
電中二〇六二番

御料理
仕出し
京都市新橋蠅手東入
梅吉本店
電中 二二七四・六七六八

中村鴈治郎の櫻丸

「菅原傳授手習鑑」車曳の塲

中村鴈治郎の武部源藏と中村魁車の女房戸浪

「菅原傳授手習鑑」寺子屋の場

お芝居の幕間に
中座三階に完備せる
電光寫眞……を
御利用下さい。

東京流
鰻蒲燒
まむし
天丼ニ
婦羅

京都市四條南座前
東京出張
江戸川
電話中一三〇九番

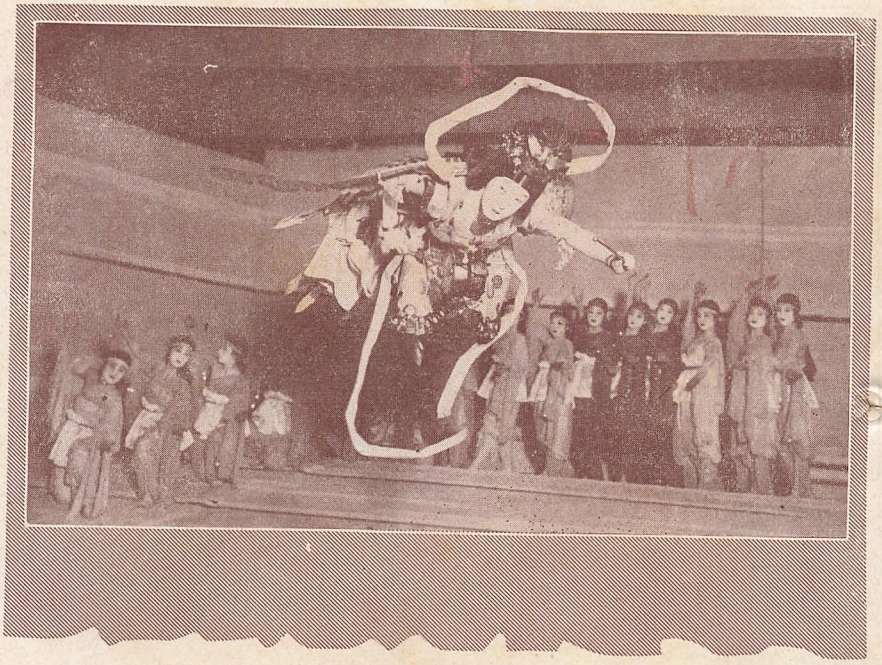
京みやげは
菊水に限ると
仰せられます

菓舗
菊水總本家
京都 四條芝居前
寺町夷川上
電 中四八八四番
上二四九二番

八瀬の
名菓 かまぶろ
大原め八ッ橋
八瀬の石

わしが
在所は
京の田舎の
片ほこり

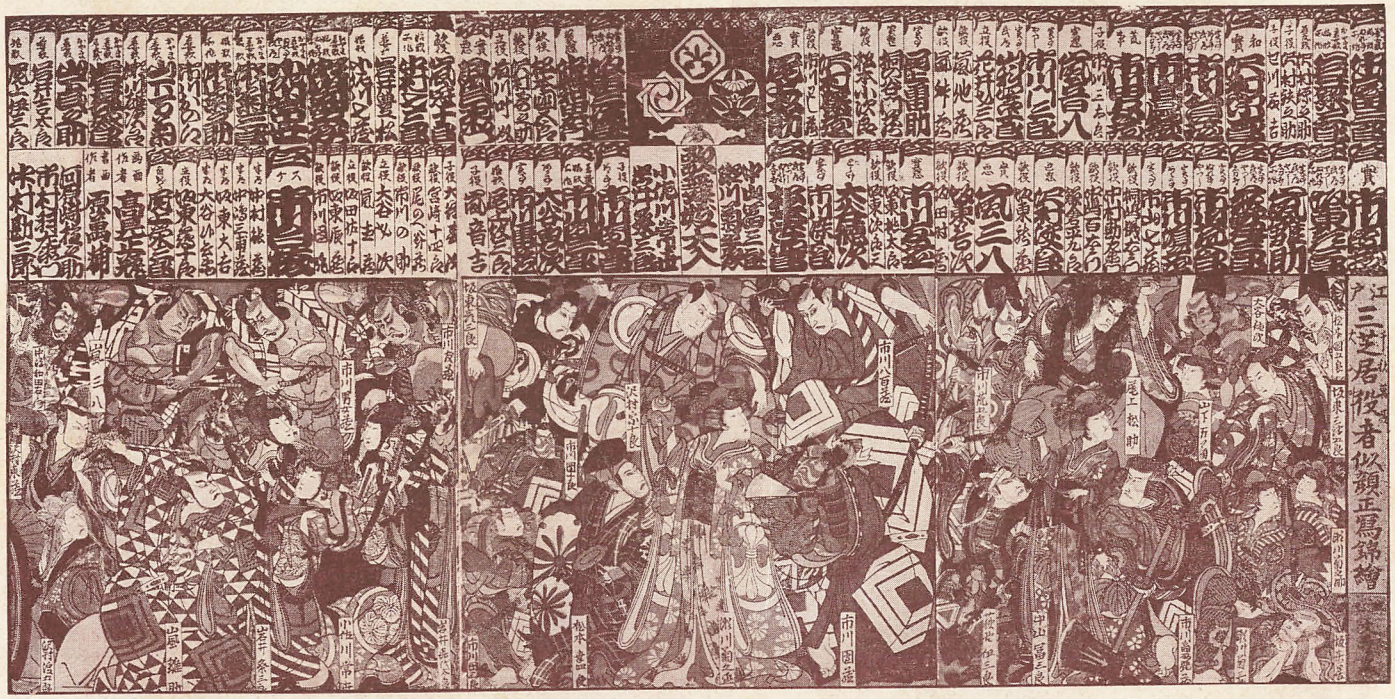
京都祇園町北側
大原女家本舗
電話中五五〇五番



所作事「羽衣」 謀茂部雄平氏振附

中村福助の天女

松竹樂劇部女生徒共演



昔の顔見世番附（版畫初代貞國筆）

蒐集家として有名な南木芋水氏所藏

◇諸印刷◇

京都木屋町松原南

明文堂印刷所

電下四八五番

京都電燈株式會社

電話中

長

一一九八七

一〇

番番番番番

雜誌『滑稽』臨時增刊
顏世界繪
輯定本
菅原傳授手習鑑

「顔見世」偶感

白井松次郎

大正十五年も漸く迫りました。そしてまた今年も吉例の顔見世がめぐつて參りました。私はこの古い歴史と色彩を持つた「顔見世」が參りますと、私の「心の故郷」へ歸つたやうな懐かしい氣持になります。只今、顔見世に就て御挨拶かたぐ〳〵フト感じた事を書いて見ませう。

×

几董の句だと思つてゐますが、顔見世や北斗にきさふ炭俵で。何と云つても顔見世は朝の早いといふ事が一番それらしい氣分で、私等が識つてからでも、四條の橋が板橋で、それにスッカリ霜が置かれてある、顔見世へ急ぐ客が足を宙に、この霜にすべつて、もう序幕のあく頃には、あの橋に破れた瓢や、お重のちらばつてゐるなどは珍らしくない事でした。其頃の漫畫にも頸を向かふの方へつき出して、もう眼だけは南の芝居へ這入つてゐるやうなのをよく描いてありました。

そうして其頃の幕合の長さは驚くべきものでした、三時間四時間は定の事でした、たしか小栗の芝居だつたと思ひます、序があいて二段目の大ぐるわで打出した事がありました。一旦かゝつて一幕やつた勘定です、今ならお客樣が恐らく承知して下さるまいと思ひます。

しかし其朝の早いことや、幕合の長いことや、又白襟の藝者客がゾラリッと兩樓敷に並んだ事や、お町方の着飾つて土間へ坐られたこいつたやうな事が顔見世らしい氣分だと今でも云はれる方があり

ますが、それは時代がさうさせませぬ。

×

いくら朝が早くつても四條の橋があの洋式になり、川端を電車で通り、藝者衆が支那服といふ事になつてはさうした氣分は、はしから〳〵こはされて行きます。

やはり時代に應じて朝も十時といふ事になつたのも止むを得ぬ事で、それに幕合も近頃では二十分もかゝるのはありません。殊に南座は道具が非常に迅速なものですから八分十分といつたのが多いのも一つは狂言も多いせいです。

しかし年に一度の顔見世です。ある時は一切を古風に古風に、顔見世復活といつたやうな事も一度はやつて見たいと思つて居ります。いつもの顔見世にも幾分はさうした氣分をのこさうと思つて、各優得意の物は必ず一幕乃至二幕をきつと出してゐるわけです。

そして櫓のさしむかひ、京の四季にまで唄はれてゐる南座の芝居は、京の爲めに、否日本のためにいつまでも〳〵この顔見世は保存して置きたいと思ひます。

つまり顔見世を保存して頂くのもやはり皆樣方の、かく申してはちと我田引水ですが、責任ではなからうかと思ひます。

×

あはたゞしく年はこのなつかしい顔見世を迎へてすぎて行きます。そしてまた新しい年が參りますそこには私の新しい劇界への抱負と希望の實現を期して、皆樣の　御厚情に報ひたいと存じて居ります、歳晩の辭を兼ねて、顔見世に就ての偶感を述べ、本年はこれで失禮いたします。

顔見世の句

藤井紫影

顔見世は昔の芝居國では重大な行事の一つで、前晩から見物が木戸口におしかけ、一番太鼓で翁渡しを始めるといふやうな光景は、書物によつて想像するばかりで、芝居は朝からお辨は宵からといふ語を耳にしたのも、もう何十年の昔であらう。

顔見世は世界の圖なり夜寢ぬ人　西鶴

顔みせや辨當提重人の鮓　西口

元祿の蕉門には顔見世の句は殆ごないが、流石に都會詩人の其角は

顔見世や曉いさむ下邸の橋

と張良黄石公が早曉の出會を取込んだ腕前はあざやかなものです。

顔見世や人に霜おく朝朗　蓼太

顔見世や霜にさかりの男郎花　也有

難波の春は夢なれや、橋々の霜を踏んで急ぐ下駄の音闇に冴ゆ、横堀を漕ぎ競ふ艪の音も勇ましい。

顔見世の難波のよるは夢なれや　太祇

顔見世や空炷ものゝ舟一片　召波

顔みせや難波わたりの春のけしき　惟中

おちつきすました京の人も、今日ばかりはおつこりこをさまつても居られない。

顔見世や蒲團をまくる東山　蕪村

顔見世や伏見鞍馬の夜の旅　召波

おはかたは月をもめでじ、是ぞこの積れば人の老ごなるもの

年々の顔見世には役者も見物も、それぞれさまざまの感慨もあつて、花やかな歡樂の中に何となく哀情の湧き起るを禁じ得ない。

顔見世や淺ましと泣く夜もあらむ　大江丸

顔見世に父の若衆ぞなつかしき　大江丸

顔見世も積れば老の寢覺かな　蓼太

積物や我つむ年を顔見世に　太祇

（一五、一一、二〇）

師走の芝居

成瀬無極

顔見世に就て筆を執る毎に、また一年が過ぎ去つたかと切に思はれる。若い時には寧ろ樂しいやうな氣分でそれを云つたが、四十歳を越すとそこに淋しさが交つて來る。慌しいやうな、忙しいやうな、心地で、あの顔見世の飾りを眺めるけれども、やつぱり何處ともなく改まつたやうな懷かしいやうな氣持もする。「古き人ごちあへるなりけり」と云つた感じである。年の内に春が來たといふ微妙な移り換はりの氣分に浸りながらも、忙がしい世間を外に、花かな、頽唐とした假象の世界に、しばらくは、恍惚として塵勞を忘れる、まことに結構な話である。遙かに東都を思ふとき、櫓太鼓の音が幽かに耳に響いてくるやうに、遠く去つて京を偲ぶときには、必ずや、先づ顔見世の景況が眼の前に浮び出るであらう。

ことしの狂言では、私の好みから云ふとやはり「寺子屋」が第一である、巧んである無理な筋だとは思ふが、部分的に光つたところがあり、形と色と聲との渾然たる交響樂を成してゐる。そしてそれぞれ役者にぴつたり嵌つてゐると思ふ。

顔見世漫談

高安吸江

顔見世や難波わたりの春けしき　惟中
顔見世や難波に三つの大芝居　如扶
顔見世の三つの芝居や雪月花　和行

これは延寶七年大阪板珍俳書、道頓堀花みちに出て居る顔見世百三十句中のものであるが、その難波名物も惜むべし、今は絶ねてしまつたので、いかにも霜月のもの淋しさを感ぜしめらるる。しかし

顔見世は世界の圖也夜寢ぬ人　西鶴
顔見世や夜は何時そはや入こ　双三
顔見世や衣かた敷芝居こり　宴流
顔見世は見物毛氈の數々也　友知
顔見世や辨當提重人の酢　西口
顔見世や老若男女きせるこ火　益乘

顔見世に是こそおここの尋る子よ　一禮

なごの情調が延寶から二百五十年後の今日も、優にやさしい京の善男善女により、猶繰りかへさるゝ年中行事の一こして殘されたのは、せめてもの慰めこでも云ふべきである。

本年顔見世の出しものゝ中で、珍らしいこ思はれるのは彦山權現こ忠九である。毛谷村は約四十年も以前、大阪中の芝居で鴈治郎のお園に、先々代の延二郎の六助を見たが、これはもう朧氣の記憶しか殘て居ない。明治三十二年九月に東京の歌舞伎座で見たこきは、六助が團十郎、お園が、五代目菊五郎であつた。六助が微塵彈正（當時の八百藏今の中車）に敗かれたのを憤る條で「庭の青石三尺計り、思はず踏込む金剛力」この床の文句を、三尺はあまりヒドイからこ云つて

「三寸ばかり」と語らせ、舞臺でも三寸許り踏石がへこむしかけであつたのは、九代目式の理屈で却て變に思はれた。ここは文樂でもやる樣に、白髮三千丈流で、本文通り「三尺ばかり」にして、石もウント踏込まれる方が古典的で面白い。菊の方だつて「六助を、うつかり眺め見これ居る」で傍の唐臼を無意識に引き寄せる程の怪力を出すのであるから、丁度いゝ取合せだつたのである。此五代目のおそのが、あの柄だけにあまり意氣過ぎ、夕飯の拵へなごの處では、吉岡一味齋の息女實は柳橋のお園だ、なごゝの評があつた位だつたが、今回もし梅幸が此役を演ることになれば恐らくお親父さんの型を用ゐるであらうが、此人も丁度その柄から、先代同樣柳橋式にならない樣、心ひそかに祈つておく。

明治三十三年十一月の歌舞伎座でやつた團菊顏合せの九段目は、私の見たうちで尤も深く印象されたものであつた。詳細は煩はしいから述べずにおくが、當時の役割は由良之助に戸無瀨が團十郎、本藏が菊五郎（五代目）、お石が秀調（先代）、力彌が家橘（今の羽左衛門）、小浪が榮三郎（今の梅幸）であつた。私は未だ今度の役割を知らないが、若戸無瀨を梅幸とすれば、さしづめ小浪は榮三郎といふ處だつたのに惜しい人を殺したものだ。昨年の蓮月や一ッ家を憶へば眞に夢のやうで、寺嶋氏の心中さ・こそ御察し申す。併しこの心持でやれば今年の戸無瀨は恐らく近來の傑作となるであらう

この九段目を梅玉追善とする話であるが、して見ると私の豫想は裏切られて、戸無瀨は高砂屋の役になるかも知れない先づ本藏の中車、由良之助の鴈治郎は動かぬ處であらうが、梅幸泰次郎を戸無瀨小浪とすれば、肝じん福助の役がお石か力彌になつてしまふ。いつそ思ひ切つて小浪力彌を福、魁兩優にふれば皆の顏は揃ふとしても追善の名目はふさはしからず、結局福の戸無瀨、魁のお石で落つくのであらうか。

梅玉と云へば思ひ起すは車曳で、丁度今から三十余年前、たしか角座だつたと思ふが、先代左團次の梅王に鴈治郎の松王で、當時、六十少し前の梅玉が櫻丸をやつた、その艶麗しさは實に眼のさむるやうであつた。この梅王を高麗屋に、時平を中車として高砂屋の櫻丸で追善とするも亦一法であらう

曰く戻り橋、曰く保名、其外寺子屋、あじろ舟と爐邊の愚談はいくらでもあるが、花みちの中の由平の句に

顏見世に長寢は花のならし哉

とある。長寢が花の嵐なら、長話は月にむら雲であらう。何れにしても長居は恐れなれば、先づ是位で幕にしておく。

顔見世とあじろ舟

高安月郊

昔の京の冬の花は龍安寺の鴛鴦であつた。今は寺の前に池はあつても一羽の影も無い。それより昔から今に絶えぬのは四條の顔見世である。東京では名ばかり、大阪より昔から盛であつた京の顔見世、役者の顔を並べる坐着、手打の式は無くなつたが、一年一度の大芝居、南北二座相對したのが、南一座になつた丈尚はなやかな京の冬の花見である。

今歳は菅原、忠臣藏、彦山權現、戻り橋こ典型になつた物に、私の「あじろ舟」を出す、これは此一月大阪の中座で始めて出したもので、去年の十月頃筆を執つた。時代を幕末にして革命の第一發、十津川事件を背景にしたが、それが主意でも無いそれに依つて目を覺しかけた大阪の町人の魂を表現しようこしたのである。

元來劇で町人を主人公こしたのは日本は西洋より早かつた。すなはち近松の世話物はヨーロッパで町人を取つた始のリロの「ロンドン商人」よりも四十年も早かつた、然し江戸第一期の頽爛に、見はてぬ夢を續けようこする戀の悲劇で、死後の生を賴んで心中するのは魂のあこがれこも云へるが、生きて魂を自覺するにはまだ〳〵早かつた。文化文政以後第二の頽爛期は極まつて維新になつたが、それは浪人から始まり、藩士におよび、町人に及んだので、彼等は外から黑船に醒まされたこはいへ、内にも三百年の束縛から解放されようこしてゐたにちがひ無い。京では平安朝の夢のなごり、細殿の情遊で生活の窮乏

を償はされてゐた公卿も、關ヶ原の遺恨が骨に徹してゐた西の大藩と握手した位、大阪では落城の恨はそれほど殘らずとも、豐臣氏に對する情誼は未に殘つてゐた。それよりも町人自身、江戸のほど德川氏に直接關係が無い丈、また全國の大名に對して多く金貸しをしてゐた丈、近づいて來た大阪に豫感が鋭くなければならぬ。十津川事件は年少氣鋭の公卿と浪人と文士が、折角大和から大阪へ御幸を機として、長州を中心とし、天下に討幕を號令しようとした大策が薩州との不一致に破れた爲、絶望的に一戰したのであるが、其軍用金の調達には大阪の町人に工面したらしい。大阪の町人は商賣から總て算盤から割出すが中には算盤に乘らぬ冒險をやる者が稀にある。一般に對する反動に利害を無視して思ひ切つた事をやる者がある。女に對しても急に燃え上らぬ代りに、徹底的に耽る者がある。天野屋利兵衛や、五人男、心中者が出たのもそれで、これ等は例外の樣でまた平民性の一端であらう。網代屋津之助は其類の人物で、冒險性も義氣も、色情も兼ね、紙治の情も持つてゐるが、個人的の情と義理に惱むのは、元祿頃より大波が迫る時代の兒、然も浪人ほど家を出、藩を脱するには町家の習慣や、養育に對する義理に縛られる弱味、天野屋式の義氣もあれば、一冒險を試みる商人形氣も潜む複雜、今に特色となる大阪の人を標準として空想の樣で現實に代表的に描いて見た。浪江も小春の遺傳もあるが、あれほど同性の對する義理より、張合を見せ、死後の生の賴みより、それも賴りにならぬはれを示した。お種もおさんより自我のある家つきの女房、敵に對しても負けぬ氣、夫に對しても柔順一圖で無い丈に危急に迫つて自他の爲に努力、それも無効となると、先がけて死んで二人の死を早める哀れ、いつも心中の跡に殘される女房役より、離れ〴〵の三人心中とも云へよう。

吉村寅太郎は革命の健兒、然しそれが主で無いから、町人に對する志士の標本として、其個人性の微には入らず、世話物の時代の背景をつけたのは、時代と世話の差別を徹して、歴史も人間の永久の眞相として見るのが藝術としてのあつかひ方とするからで、古寺の池の鴛鴦より濃い色が出たら幸である。

顔見世と嵐三右衛門

木谷蓬吟

「顔見世や一番大皷二番鶏」その往昔、顔見世芝居の一番大皷は午前二時に打つた。舞臺を清め、三寶に神酒その他を飾り二番鶏の鳴く午前四時から見物を呼び入れ、午前六時頃から翁渡し（式三番）が始つたものである。その後、以上の時間がいろ〳〵に變つて、習例儀式も漸次にこわされてきた。

昔の京の顔見世は殊に遊廓との關係が深かつた。遊里では年中行事の一つに數へてゐる程で、藝者たちは夜の十二時頃から入場して、四條橋西の矢尾政などから蠣雜炊や蠣飯を取寄せ、三味線彈いて大に騒いだものである。一番太皷で一旦退場、常着を改め、厚化粧裾模様の紋付晴れやかに、東山にほんのり茜さす頃、川風に雪の襟首なぶらせ、素足に橋板の霜を踏んで練り込んで來るこ、舞臺は萬燈のまたゝき、もう三段目が明いてゐるこいふ、場内はグッシリ詰つて蒸せるばかりの人の山。この風流行事も現代では其面影もなく習俗儀例も偲ぶべきよすがもない。「顔見世や雜炊狂言二部興行」では俳句にもならぬ。

たゞ名目ばかりの顔見世ではあるが、大阪にも東京にも廢つたものが、さすがにお國歌舞伎の根元、京都だけに殘つてゐるのは奥床しい。然し、顔見世芝居の吉例を、確定的に上方劇壇に創設したのは、大阪の地で、而かも名優嵐三右衛門の創意から生れた。

三右衛門は、元祿歌舞伎の隆盛時代に先立つて寛文延寶の大阪劇壇を背負つて立つた名人で、例の坂田藤十郎の師表として敬はれ、近松の戯曲にも其時代物の色立役に、多く扮本として使はれた名匠である。

父親は攝津西の宮に住む富裕な浪人で、西崎新平と云ふた。三右衛門は好きが嵩じて俳優の群に投じ、丸小三右衛門と名乗り、太夫元と仰がれるに至つた。ある時、「傾城小夜嵐」といふ狂言を上演して、非常な好評を博した。町を通ると、アレさよ嵐が行くとて群集し、舞臺に上ると、ヤレ嵐、嵐と褒め立てたところから、遂に嵐三右衛門と名乗ることゝなつた。これが嵐性俳優の濫觴である。

本來顔見世とは、その座所屬の役者が、十一月から翌年十月までを一期とし、新陳交替する慣例により、十一月は其新顔の初めての舞臺故に、顔見世と稱したので、これは三右衛門の劇場から創めた劇習慣である。そして、いつも同じ顔觸れの、倦怠がちな弊風を打破し、舞臺の上に新鮮な空氣を流通させた工夫の奇智は、太夫元としての三右衛門が、手腕の程も偲ばれて興味が深い。勿論、江戸顔見世から學んだのではあらうが……。

されば、顔世見芝居と云へば、最初は京よりも大阪が本場であつたらしい。嵐三右衛門の劇場が本家本元であつたことは前記の通り、江戸の其角も大阪に來て、嵐の顔見世を見物したか、五元集に「諸人や嵐芝居を冬ごもり」と讃辭を呈してゐる。現時の京都南座の顔見世が、滿都人氣の焦點となつて驚く可き盛況を見せる如く、嵐の芝居の顔見世は、當時他の各劇場を壓倒して大阪中の見物を悉く吸集した。大阪での觀ものは嵐の芝居と天王寺の塔と謳はれ、「吹くからに秋の草木のしをるれば、むべ山風を嵐といふらん」の歌意の如しと「役者大全」の作者さへ歎じてゐる。

三右衛門は又、江戸の六方の上方化を試み、華やかな一流を案出した。田夫か野人のやうな粗野な江戸六方を改めて、華麗な衣裳、寛濶な風姿、笛鼓太鼓三味線を新に加味して、風流な振事として六方を振つた。嵐の顔見世興行には、嘉例として必ず其切に上演された。

元祖嵐は元祿三年に法名山風壽昭居士となつて散つた。その子門三郎は、父の存命中はほうだらとして名高く、いつもワキ二番目に廻され、うつけ者の標本と笑はれてゐたが、父の嵐の死後、その暮の顔見世に、二代目嵐三右衛門を襲ひ、親の得意藝であつた嘉例の六方を上場した。不思議にも其所作巧妙に六方振り拍子よく親嵐に一歩も劣らぬこの兒物一齊の賞讃に、ほうだらの汚名をそゝぎ、藝境頓に進み、後には元祖まさりの高名を取るに至つた。例の其角、また稱美して「鶯の子は子な

けけり三右衛門」と詠んだ。隨分嵐ビイキであつたと見へる。

二代目三右衛門は元祿十四年十一月、源譽了信と戒名して京都の土に還つた。その實子、三代目嵐三右衛門を繼いで、寶永元年の顏見世に切狂言として、まだ八歳のいたいけな身で親讓りの六方を振つた。見物いづれも袖を濡らさぬ人とては無かつたと、役者綱目に書かれてゐる。

三右衛門は三代に亘つて大阪名物の名優として、その六方の至藝と、そして、代々家傳の顏見世芝居の興行と共に、上方歌舞伎史上の偉大な業蹟を遺してゐる。

京都の名優坂田藤十郎の名は、此頃ようやく知れ渡つて來たが、大阪の名優三右衛門の名は、今の俳優中にも知る人が殆ど無い。私は京の顏見世を見る毎に、嵐の爲に一掬同情の涙を注がざるを得ない。顏見世の盛況を見る毎に、この吉例を創めてくれた三右衛門の偉蹟を感謝せずには居られない。

仰ぎ願はくば、今日の佳き日に南座に群寄る顏見世物の善男善女よ、鴈治郎の和事に隨喜渇仰すると同時に、その色立役の總開山であり、且つは顏見世開基の祖師である嵐三右衛門の名號を、稱念合掌、狂言綺語の卽身成佛をこそ得給へと申す。

顏見世や浪華に嵐三右衛門　蓬吟

顏見世改良案

山本修二

「顏見世改良案」などと書出すと、何だか今の顏見世が、ひどく惡さうであるが、冗談いつちやいけねえ、一年にたつた

度でも、いゝ芝居が見せて貰へるのは、京都にゐるお蔭である。これが朝鮮か樺太なら只の一度だつて見られやしない。慾をいつては罰が當る。

そこで「顔見世」の起りなんだが、これも私なんかには解らないが、淺い知識のウロ覺えでは、何でも昔は「給金定め」とかいつて、ズラリと並んだ大一座が、來年はこれだけの顔觸れが、御當地で興行致しますから、何分よろしく、といふ顔つなぎ、だから「顔見世」といふのだといふ。ところが近年では、顔見世に來た連中が、翌年の顔見世まではトンと顔を見せないなぞと奮慨しても始まらない。

今年の狂言の並べ方なんか、まづ以て結構だ。「車曳」「彦山」「九段目」などは京都の大歌舞伎では近年見られなかつた代物だけに甚だ有難い。殊に「彦山」なんか誰の智惠だか知らないが、推賞してもいゝと思ふ。こんな芝居が一年に一度でも見られるのは、（もう一度いはしてくれ）京都に居るお蔭である。

ところで、いよ〳〵一年に一度ッきり、いゝ芝居が見られないとして、さう事が定まれば、ちよつとこちらに注文がある。それは顔見世をその一年の總決算として、その年に上演されたものゝ傑作を、陳列してほしいのだ。つまりその年の東京大阪で好評を博した出し物を列べて、顔見世さへ見れば、居ながらにして宇内の形勢に通ずる、といふ仕組にして貰ひたい。

こんなことを云ふと、顔見世ばかりに見物が集まつて、外の興行が不入になる、といふ仕打側の心配があるかも知れないが前にもいふとほり京都の大芝居は一年に一度だから、その心配は御無用だ。まさか東京や大阪の見物が、顔見世を見ればいゝからといつて、平生の觀劇を差控へることもあるまい。或は逆に、あの芝居はよかつたからもう一度見たい、といつて東京や大阪の見物が、顔見世に流れ込むことになるかも知れない。

ごうです、名案でせう。つまり僕の案は、顔見世を、芝居の「帝展」にしようといふのだ。或はその中で特に優れたものには金牌、銀牌を出してもいゝ、すると忽ち翌年の地方興行には、「昨年度金牌狂言」なんかといへば、又見物が寄つて來る。が、何よりもいゝことは、京都の見物が、一度だけで「芝居のエキス」が見せて貰へることだ。しかし、もしも僕のいふことが不服なれば、一年に一度なぞゝ、ケチなことは云はないで顔見世以外にもいゝ芝居を持つて來て欲しい。

明治時代の顔見世

堂本寒星

明治初期の京都の大劇場といふと、四條南側の芝居（都萬太夫、布袋屋梅之丞）、四條北側の芝居（龜谷粂之丞、早雲長太夫）、四條道場の芝居（宇治嘉太夫）の三つが其の代表的なもので、京阪の俳優では中村宗十郎、實川延若（今の延若の父）が最も著名な時代である。

この三つの大劇場では年々歳々吉例に依り、十一月になると顔見世興行を行つて來たのであつて、愈顔見世が始まると、俳優の顔觸や新狂言の選定などに各座得意の趣巧を凝らし、鎬を削つて觀衆の爭奪をしたものであるが、座頭は一方の劇場へ宗十郎が現はれると、一方の劇場には延若が現れるといつた調子で座頭以下では市川右團治（齋入）中村翫雀（鴈治郎の父）中村福助（梅玉）、嵐橘三郎、嵐璃寛（四世）、尾上多見藏（先代）、中村雀右衛門（雀右衛門の養父）、嵐吉三郎（先代）實川延三郎、市川荒五郎（先代）、坂東壽三郎（先代）、嵐雛助（三五郎）、嵐みんし、姉川仲藏などが綺羅星の如く光つてゐたのである。

この時代の顔見世狂言は、古くからの傳統に依つて「けいせいもの」が依然として流行の中心となり「けいせい英双紙」「契情染分總」「契情兒雷也」「傾城廓松諷」などが前狂言として据ゑられ、宗十郎の演しものとしての「近江源氏先陣館」「生寫朝顔話」「廓文章」、延若の演しものとしては「鐘鳴今朝尊」「積薄雲乳貫」などがある。

今の中村鴈治郎が未だ實川鴈治郎を名乘つてゐたのは明治十年前後のことで、鴈治郎は多く若女形として起ち、これは顔見

世の狂言ではないけれど、明治十七年の春の南座の「新模樣御誂綱島」では、福助の紙屋治兵衛に對して、紀の國屋小春に扮してゐる、これなどは今日から見ると一寸奇異の感に打たれる譯である。嵐巖笑、市川荒太郎（荒五郎）、市川福太郎（眼玉）、嵐璃笑（雀右衛門の實父）、尾上卯三郎、中村政治郎（福助）、中村雀三郎（吉三郎）、嵐和三郎（璃寛）、淺尾關十郎（大吉）、伊藤右之助（右團治）、尾上多見之助（多見藏）、中村成太郎（魁車）、嵐笑太郎（雀右衛門）、實川延二郎（延若）及び片岡我童（先代仁左衛門）片岡我當（仁左衛門）などの次の大正劇壇に於ける著名な俳優の名が漸く見い出して來たのは多く明治十年頃から廿年前後のことで、これらの俳優は何れも未だ少青年の時代である。然し時代は推移して、顔見世の狂言選定にも可なり新しい方法を取入れ明治十四年の南座の顔見世には東京いろは新聞所載の「指紋鮮血染野晒」を上演し、新聞小説ものゝ戯曲化を始めて、今日の流行の基を開いてゐる。

顔見世の開幕は午前七時が普通で、晝夜二部制とし、新狂言は概ね四本立てゞ、俳優は例年關西のものゝみを網羅してゐるやうであるが、時に東西合同や東京俳優のみで組立てる場合もある。南座の顔見世に例を取ると明治十四年が市川右團治、尾上多見藏、嵐團之助、嵐巖笑、實川正朝、實川八百藏、中村駒之助、市川蝦十郎などの一座へ東京から市川小團治が加はり、お目見得として「兄弟士碁盤白石」に右團治の宮城野多見藏の惣六に、小團治はしのぶに扮し、東西合同劇を見せ、又明治廿六年同座の顔見世には、尾上菊五郎（五世）市村家橘（羽左衛門）尾上菊三郎、尾上榮三郎（梅幸）坂東秀調、尾上松助、尾上丑之助（菊五郎）を迎へ、「鞍馬山」「鹽原多助一代記」「實錄先代萩」「菊綉俠客御所染」「操三番叟」を上演し、純東京歌舞伎で蓋を開けてゐる。

かうして明治廿七年に北側の芝居が廢止となり、其後四條道場が歌舞伎と改稱されると、南座は京都唯一の大劇場といふことになり明治晩年松竹の手へ經營が移つて以來、例年顔見世には先づ座表に竹矢來を組み、これに招き看版を掲げ、評判振れなど總て古風の行事を行ひ、中村鴈治郎一座に東京の著名な俳優を加へて華々しく開場し、明暦の昔村山又兵衛が始めて大正の今日まで、日本の劇場中此座のみは連綿として、この歌舞伎の花の顔見世を打つゞけてゐるのである。

◆中村鴈治郎◆尾上梅幸◆松本幸四郎◆市川中車

各優の印象と感想

順序不同

長田幹彦

役者よりも演ものよりも、顔見世の氣分が懐かしく候。今は昔、朝明けの四條大橋、霧たちこむろあのいほり看板、さては霧かくれにつゞひゆく祇園新地の美しき舞妓の姿、いづれも最早みわ世の夢と消え失せ申候、さてもあつけなき浮世かな。顔見の名のみわが胸に果敢なく殘るのが悲しく候

英太郎

私は自分の芝居の許す限り鴈治郎丈の芝居を見逃したことはありません。一人でも中座の正面の椅子席で私は双眼鏡をもつて見るのです。さうして何時も鴈治郎丈に見惚れてゐるのです。

鴈治郎丈といふ程の役者だつたら只その役の人物に成り濟ませて居ても好い筈です。誰しも研究されない人はないでせうが、鴈治郎丈はあの歳で、あれだけの大立物であつて、新作はもとより何十回となく演じた物でも見る度に何處かを變へて演じてゐるその心掛けが實に敬服されるのです。且つて私は東京で鴈治郎丈が「紙治」を演じた時に見物して居りました。丁度「河庄」で治兵衛の出となつて揚幕から現はれて、あの紙治が花道の中程まで來た時、實にとても云へないほど胸がせまつて、立錐の餘地ない觀衆が水を打つたやうに靜かになつて見惚れてゐました。どうだいと云ふ氣になつて、それから後も芝居よりも見物ばかりを見てゐたことがあります。それから餘程の年月も經ちますが、今鴈治郎丈を見てもその時と少しの變りがないのです。歳は確かに六十七八だと思ひますが、あの若さはどうでせう、あれ程の歳の役者には何處か年寄りだとか、老ひたなとか、現はれるものですが、鴈治郎丈にはそれが見えないのです。たまたま散歩中の鴈治郎丈を見掛けた時實に老人だと思ひますが、それを舞臺で見出すことが出來ません。私は鴈治郎丈の重次郎が若いとか勝頼が若いと云ふのではありません。盛綱を見、梶原を見、政右衛門を見て實にあの若さ壯年だと思はさるのです。あんな若い役者は恐らくなからうと思ひます。何時見ても明るくなるやうな氣持する名優だと思ひます。只私は鴈治郎丈が好きなのです。いつまでも若いのが嬉しいのです。

上司小剣

梅幸の表現する江戸末期の或る種の女性の情趣。あれはもう梅幸だけに見らるゝもので、今のうちに見ておかなければ、永久に見られますまい。

白石實三

松本幸四郎——帝劇專屬の大幹部、歌舞伎

十八番「勸進帳」の辨慶で堂々たる天下の名優として、謂ゆる巷間に知られてゐる松本幸四郎丈を、私は肯定します。が、つまり舞臺藝術家としての彼を見ると、頭の惡い、鈍重な、救はれものではないかとかも案ぜられます。

廣瀬哲士

もう二十年以上の昔のことですが夏の中座で安宅の關で辨慶に扮した中車を見たことがありました。暑いのと一生懸命なので優が汗の玉を流してゐるのが樓敷が近いのでよく見えました、さうしてあのイササカギゴチナイその表情の上にかすかなユーモラスな趣のあつたことを記憶してゐます。古いことですが僞はらぬ印象をそのまゝ。

生方敏郎

鴈治郎と中車——なりこま屋が古い時分（明治四十年頃）歌舞伎座で「引窓」の南方十字兵衛を演じた時、私は初めて彼を見て感心しました、その後紙治を敷回と大晏寺堤を見ました、紙治は天下一品と思ひます殊に大阪なには座で大正九年の正月見たのを今も忘れません、

市川中車は口せきが良いので昔から好きです。

藤森成吉

もうかなり昔の事ですが、新富座だつたかで、中車氏の松王を見て、大へんよかつた印象が殘つてゐます。

秋元柳風

尾上梅幸——あの美くしい色氣のある眼を見る時、餘り玄治店のお富を思ひ出されてなりません又あの細く長く瘠せた姿を見る時、われともなく累や豐志賀の凄い姿を思ひ出されてなりません企まずして肩のほとりに浮ぶ一味のあの凄味は「土蜘」の僧智籌の花道の出に深く印せられてあるを思ひ出します、殊に變化物が家藝とはいひ乍ら斯うした特點を備へてゐるのは正に修練の技以上に天稟の体軀の賜といへませう、それ丈け同人獨特の妙が持たれる譯です、此半面に仇つぽさを持つは一寸他人の眞似得ぬ長所があります

そして彼の美點は一手一投足の末にまで注意を拂はれてゐる事で又五代目の教へを今に役立たせてゐる心がけが床しくも嬉しく感じます

今東光

鴈治郎は小生が關ゝに住んでゐたので子供の時から見て居ります。いつまで經つても年を取らない此の役者に、一種の敬愛を感じます。

石割松太郎

市川中車——打てば響く、あの筋鐵入のやうな堅い中車、この人の藝を私は好みます然しこの人を「名調子」などといふ世間の評には私は反對です。何が名調子です、私のいふ名調子とは、何にでも向く人こそ名調子だと思ふ、中車のせりふは手堅い凜と響く調子ですが、一本調子です、あれを名調子などいふのは名實添はぬ褒め詞、當人はくすぐつたく思ふでせう。實に添ふてこその褒め詞だ、名實相反するのは當人を侮辱する事です、外にこの人を褒める詞があると思ひます。

伊藤悌二

頭の惡い人とか咆哮幸四郎と云ふ惡口をよくききますが孝四郎には他の優に見出す事の出來ない麗しい人格の閃きを發見するのであります、俳優の私生活が其の舞臺に反映するものとすればあの優は徹底的な惡黨にはなりきれぬ人と存じます、先達帝劇の樂屋で私の知己横山氏に向つて斯う云はれたさうです「後進の人の爲めに道を拓いてやると云ふ事は我々老輩の是非とも斷行しなければならぬことで老体を無理してまでも進路を邪間してはならぬと同時に將來身込みある若き人々には家柄の有無を論ぜず

ミッシリ藝を仕こんでやらねばならぬ」と……京都の顔見世で何年か前に水平社の人と共にあの優の「大森彦七」と「釣女」の大名とを見た事があります、前者に於ては優の堂壯な姿と威風堂々たる藝風とに感心しました、そして優の平常の人柄をしのんだのであります、後者に於てはコンドの中座の九藏なぞの企圖能はざる氣品をみせつけられ、實に恍れ〳〵しました、然し京都邊でみると旅興行の感がして可哀相でありました。

新城和一

中村鴈治郎氏には纖細なる技巧と柔かい人情味をとるべく、只情熱のなきを缺點とする。尾上梅幸氏は「累」の如き凄味に於いてすぐれてゐるが、女形としては餘りに不自然たるを免れない。松本幸四郎氏は大きい點では左團治氏と共に最もまさつてゐる人ではあるが深みが足りないのを遺憾とする。市川中車氏は其の古風の藝を尊重すべく、最も堅實な藝風の人であるが、松助氏の如き情熱と深みのないことを惜しむ。然し是等の人々はいづれも亡びゆく江戸趣味の名殘りとして、其の代表者として尊重すべき人々であるのは言ふまでもない。

高澤初風

幸四郎氏が今度の顔見世興行に梅幸氏と共に得意の戻り橋を出す事になつたのは、最も當を得た出し物として私は喜びます、元來私はあの堂々とした押出しの幸四郎氏の柄と顔の拵への旨いのとにはいつも感服してゐる一人でありますが、一般劇評家の間に定評のある臺詞廻しの活歴風に禍ひされた活殺には、考へて欲しいと思ふ者であります、併しながらそれが却て役柄に極めて嵌る事がある場合が屢々發見されるので徒らに附和雷同するのではありません、此戻橋の綱の如きは實に其柄と云ひ調子と云ひ現代の日本俳優を代表する一人として推賞するに足るものと思つて居ります

小林愛雄

上方には柄の立派な優が多いが、東京にはそれが乏しい。乏しい中で、松本幸四郎丈は上方の誰と伍しても遜色のないだけの柄を持つてゐる。押出しの立派さがたしかに錦繪に這入る資格を備へてゐる外に、優の特色は大局の味であらう。小さな技巧に囚はれずに、大づかみに運んで行くところに優の持味がある。辨慶、大森彦七、柴田勝家などは現代の寶物であらう。それでゐて新劇によくはまる場合もあるのは、優の藝の廣さを語るものである。

木蘇穀

鴈治郎は何と云つても、當代隨一の名優と存じます。あの柄、押し出し、科白等、近松物や、一般世話物にはかけがいのない役者です、恐らくは鴈治郎以前に鴈治郎なく鴈治郎以後に鴈治郎なしと云ふも、過言ではありますまい。取り分けて紙治、梅忠等に於ける彼は神器でせう。だから小生はひとへに彼の健在を祈つて止まないものである。

須藤鐘一

松本幸四郎——第一にその堂々たる鉢格が斯界では異とするに足ります。その押し出しの立派な點も買つてゐます。あまり神經の纖細でないもの、お能的の芝居に此の優の特色を十分發揮させ度いものです。勸進帳など此の人の右に出るもの、當今他にないのを見ても分ります。私は此の人の見るからに朗らかな屈托なさうな外貌と樣子が好きです。

江澤春霞

中村鴈治郎丈は當代の和事役者で、上方の「やつし」では一の指に屈られる大役者の癖にナゼ舞臺をいやに考へるのでしやう。これは、今に始まつた事ではありませんが、追々それが募るやうに見受けられるのを、丈の爲に密に遺憾に思つてゐます。例へば「戀飛脚」の忠兵衛で、封印を吾と我手で切らずに、自然と切れるやうに演て見たり

花道の梶原源太を省いて見たりするのは、傳統的藝術たる歌舞伎狂言に生きて、後進を指導誘掖しつゝある大役者にしては、聊か考へ過ぎると思ひます。然し、派手に立派な顔が第一の武器で、「大晏寺堤」の春藤の如き、手拭に、包まれてゐる顔を正面から見ると、實に千兩だと思ひます。其の親しみのある樣子は、當代得難い名優だと思ひます。

齋藤龍太郎

中車は私のひそかに嘆賞して措かない俳優です。小手先や外面的なケレンではなく、腹の中から性根を据えてしつかりと芝居をしてゐるところは、いかにも藝術の本道だといふ感じを與へます。中車のやうに、歌舞伎の純粹な精神を具へてゐるやうな俳優は、恐らくは、今後もう出ないだらうと思つてゐます。

津川尚三

感歎詞を並べたてゝ褒めたい俳優は可成りあつても眞固に愕かされる俳優はすくないやうです。梅幸は私を愕かせた俳優です。あの「紅葉狩」「茨木」「戻橋」「土蜘蛛」などで隨分美しい舞臺を觀せる俳優は他にありますが、松羽目、雛壇の舞臺であれほどの味と魅力とを吐き出す俳優はほかにないやうに思ひます。愕かされました。更に女形としての容姿——についての條件の點で恐ろしく損に出來てゐるこの優が、一度所作事で妖怪を演ると、あの不細工な軀が反つて天下一品の彫刻美に變るところ、恐らくこんな俳優は今後は出ないだらうと二度愕かされました。

國枝史郎

梅幸丈の芝居は隨分と從來見たものです。私一個の趣味としましては坪内博士の御作「お夏狂亂」のお夏が何よりも好もしく思はれました。今も眼を閉ぢると梅幸丈のお夏がマザ〳〵と浮かんで來ます。ずつと昔帝劇で「戻橋」を見ました。その時の綱は幸四郎丈でしたが南座顔見世の「戻橋」でも梅幸丈の早百合、幸四郎丈の綱で演ることゝ思はれます。行つて見たいものだなーと思つたりしてゐます。

相川小榮子

尾上梅幸——お富さんよりも、かさねよりも、妾は茨木に見るアノ上品なおばさんとうでをつかんでからの形相怖ろしい鬼女とがこの人のために天下一品の國寶的藝術だと思ひます

Toki-Zenmaro.

Onoe-Baiko

Yonin no nakadewa Baiko wa sonkeisi

masu,

Konohito wa Kokoro to Sugata, Utai to So o ga yoku hitotu ni natte iru to omoimasu,

Koiu Hito ga Tosi wo totte yoku ko to ga mottomo nasak nai koto dasu.

五月信子

私は成駒やさんの芝居は大低みのがさぬほど好きです。理屈では言へませんが。唯好きです。

新谷誠水

松本幸四郎氏　好いお爺さん

中車氏　律氣な伯父さん

梅幸氏　粹な伯母さん

鴈治郎氏　お店の旦那

足立忠

十一月の帝劇の「白縫譚」は、芝居としては、ありがたくないものですが、梅幸の秋篠の演出のうまさには、ほとほと感じ入りました。品のある寂しさ——。それにしても池田大伍氏の「根岸の一夜」をこの人で見たいと思つております。

小牧近江

市川中車——

老人らしい氣品と藝術肌

和田星流

松本幸四郎――ドッシリと大地を踏みしめる樣な此優の太い力强い藝術はいはれなくして私を惹つけて行きます。

山崎紫江

鴈治郎、梅幸、幸四郎、中車といふ顏ぶれは東京にても見られぬ結構な顏見世興行だと存じます、何か出しものでも分かれば、それに依つていゝたい事も出ませうが、この人達を云々するのは外國人のやうな氣がしますから……ね。

小寺融吉

鴈治郎一座に東京俳優を加へる事は、私はつまらぬ事だと思ひます、仁左衛門なら別問題ですが。

然し東京俳優がどんな風に鴈治郎と調和してゆくか、その努力は興味がなくはありません、その興味を幸四郎より中車に多く中車より更に梅幸に多い。恐らく鴈治郎自身もさうでせう

顯考與一

市川中車――この人の松王や松永大膳を見てゐると、ほんとの敵役といふ感がしますにらみと重味とそして型の立派な點に於てこの人の右に出る敵役は先づ當代にはありますまい。しかしうまい割合には影の薄い人氣の湧立だない人です。それは恐らく輕妙さに乏しく生世話ものに不向で、モダーンボーイ達には好かれない部類の人だからでせう……。段々忘れられて行く人として……私は或る親し味を感じます。

小島德彌

尾上梅幸――この人の舞臺を見たのは、仁左の柿右衛門に姉娘、それから鰻谷のお妻二十四孝の濡衣、雪女、土蜘蛛などですが柿右衛門の姉娘や鰻谷のお妻などは忘れられません、あの寂しさの中に漂ふしッとりと落着いた味ひを。羽左の女房役になつた江戸前の仇ッぽいところも見たいと思ひますが。

高木善治

市川中車と云ふ優は好き、あの臺詞の調子はたまらなく好き、この前大阪へ來た時の松王の臺詞なんかは今だに頭に殘つてゐる眞實の殘れる歌舞伎俳優の一人だと思ふ。（蹠蕭な意味でなく）

まつすぐに突進んで行くこの人の藝は見た人なら誰でも好きになれると思ふ。

松本要次郎

中村鴈治郎氏は東西を通じての和事師一人者と存申候。

尾上梅幸氏は東錦繪にある樣な感じのする當代得難い俳優と存申候

市川中車氏は若い時も調子の好い方であつた、老年の同氏は益々サビが付て一層氣持ち好い役者と存申候

松本幸四郎氏は顏及体格の立派な人で調子の明瞭さへあれば日本一の役者と存申候。

豐岡佐一郎

いつか帝劇で見た氏の浦里、これ程濁りのない情緒を感じたものはありません。

恐らく梅幸氏は江戸情緒の最後の表現者でせう。女形として。名人です。

中村長作

「愈俳優として起つと決まつた福三郎を此の際誰が預るか」と言ふ事が問題になつた日、私は社命をうけて築地の成駒屋を訪れた。田村將軍、森老人、成駒屋夫婦、それに私と五人卓を取卷いて話してゐると、其處へ突然大阪の成駒屋が現れた、「兄貴急に思立つて成田へ參詣に來たところだ、是が夢枕に立たれたんや」と懷中から守袋を取出してポンと卓上に置いたものだ、一座悉く息がつまるやうな心持であつた、幾日の後、福三郎は大阪で鴈治郎が世話する事になつたと報ぜられた、成田參詣とは成田屋未亡人の意を得に來たといふ解けよかしの謎であつたのだ、併しその時は流石の田

村將軍も東京の成駒屋も左樣は取らなかつた、其處に鷹治郎その人に對する皆の批判があつた、――「たましひぬけてとぼ〳〵と」の出の時のあの勿体ない位うれしい場合にも、すまない事だが、私の頭にあの時の「成田參詣」が今も浮んで來る。

戸川貞雄

忠兵衛、治兵衛等々に於ける鷹治郎丈は天下一品の定評があるらしいが、小生は餘り好まないのです。伊井蓉峰君の川島武男が天下一品だといふのと同樣、好きな人には堪らないらしいが、小生はむしろ御免です「襤褸錦」の春藤、「青江下阪二ツ胴、切れ味は……」の臺辭と、あの刹那の緊張味にこそ鷹治郎丈の澁い味があつたと思つてゐます。

大槻憲二

市川中車は私の最も好きな俳優の一人ですその線の太い男性的なリズム、一本調子ではあるがこせつかない、澁い藝風、あの錆のある、歌舞伎そのものを象徴するやうな聲、恬淡らしい人柄、すべてうれしいものです。殊によかつたのは安宅關の辨慶でせう。市川左團次の富樫と共に實にしつくり調子が合つて忘れられぬ芝居でした。これは中車の當り藝と云はれてゐます。近頃は暫く見ませんが、二三年前に見た「爲朝」では惜しむべし好漢も年齢には勝てず、聲の張りが弱しく弱りましたね。

本山荻舟

松本幸四郎――堂々たる風格、面貌、朗々たる音聲、そして舞踊は藤間の家元といふのだから、俳優としての素質において、これほど完備してゐる人は、滅多にないといッていゝ。それでゐて白のおぼえが悪く、白尻がぼやける爲、よく頭の悪い人の元締の如くいはれるが、その實新しい物に對する理解もあり、後進を引立てる上からいッても、座談など聞いても、決して頭の悪い人ではなささうだ。たゞ生れついて人がいゝのだ。その人のよさがキリ〳〵と締ることを妨げるのだと思ふ。

森川舟三

幸四郎の舞踊には手をたゝくものが多いが芝居になると出物の如何によつては感心しないのがあります。三津五郎などもさうですが、「篤實」とか「朴訥」とかいふやうな味ひが出てきて、それが役柄にぴつたり嵌ればよいが、悪く祟る場合が多いやうです。すつきりした默阿彌ものなどどうもこの人の領分ではないやうです。しかし重味と大きさと豪壯さに掛けては先づ當代隨一でせう。故に「幡隨院」でも鈴ヶ森は申分ないとして「極付」の長兵衛うちの場の世話がゝつたところになると例のぶつきらぼうが祟つて藝の方は損です。但し貫目は充分にありますが――。この意味で舞踊劇か然らずんば時代劇、世話狂言では特に精選したものゝみを演らせたいと思ひます。「戻橋」や「茨木」の綱なんか正に天下一品です。

野島辰次

(一)梅幸のことを考へる時、私は若い女形の歌舞伎役者の將來が思はれます、梅幸の前に梅幸はあつたかも知れません、しかし梅幸の後に梅幸がはたしてあるでせうか――梅幸は本來の歌舞伎女形として最後の人ではないでせうか。

(二)なるほど歌右衛門の持つ品格はないでせう、があの立派さ、貫錄はとても今の若い女形がどんなに成長したところで望めないところではないでせうか。

(三)舞臺を離れても梅幸は劇壇稀に見るの紳士だとか――聞いたゞけでも愉快な話です。

家門櫻谿

ことしの京の顔見世には、菅原の「車曳」で東西の三巨頭が顔合せをするが、此の場面は今春中座の合同歌舞伎の舞臺に展開せられたもので、其の時私は幸四郎の梅王が若々しく生き〳〵とした人物の線を出す大

車輪の熱演を凝視した。今度の南座でも幸四郎は此の役に、出色の妙味を湛へることであらう。

津村京村

梅幸といふ優の事を思ふ度に、あの一種言ひ様の無い濃艶な姿と聲を想起させられる女優は本當の女性であり乍ら、而もあれだけの色氣が出ない。そこに藝の力がある事は今更いふまでもないが、梅幸といふ優はその中でも更に〳〵その感を強くさせられる優である。

富田泰彦

——坂田藤十郎を思はする中村鴈治郎の聰明な寫實派である彼の藝の耀躍——

——梅壽菊五郎の藝を繼承せるやの尾上梅幸のグロテスクな役々——

——鼻高幸四郎の風丰に隨市川の流を引く松本幸四郎の荒事の骨法と藝格——

——九世團十郎の魂だけは何處かに拾つてるやうな市川中車の舞臺の堅實さ、——

是れは私の幻影的な四優に對する感覺です決して總花を振り蒔く意味ではありません

畑耕一

市川中車——いつまでもヒンとした鯛の味をもつた役者。——なんでも、世間の所謂劇評家の評は一切讀んだことがないといふそこがたまらなく好きだ。

高橋義信

小生先般帝都歌舞伎座にて先輩成駒屋氏の「戀飛脚」を觀劇いたし候。こぼるゝ色氣、愛嬌。かゝる優こそ嘗みてもはや不世出と思はれ候。

鈴木善太郎

歌舞伎劇の傳統を完全に傳へてゐる一人として、私は中車の藝術を尊敬します。あの力强い線、あのガツシリしたポーズ。あのリズミカルなテクニツク、……

阪本清雄

市川中車といふ人は實に役者らしい役者、素顏だけでは如何にも橋場のガヂサンといつた風の親しみがあるが、さて舞臺へ出ると、嚴格な、苟もしない顏の、そして一生懸命の、恐ろしい力の籠つた芝居をする人だと思ふ。私は東京俳優の中で、若手の人は別としてこの優が健在であることを、そして團菊時代からの人としての寶物としていつまでも殘して置きたい氣がする。殊に安宅關の辨慶など、新作ものではあつても……。

楠田敏郎

幸四郎と云ふ人だが、演るものによつてはあのせりふのくせが、ひどをくぎごちない感じさせたり、つきまとふ黑ん坊に感興を殺がれたりするが、「戻り橋」なら、有難〳〵頂戴出來る。あの舞臺は、島渡幸四郎氏の他からは求めがたい、——しかも相手の鬼女が梅幸氏と來ては、まさに絶品だ。

中山生

私は梅幸を尊重する一人であります、それは梅幸がもつ技藝はもう今日乃至今後に於て二番目物の無理解のものと思ひます、今日の東京はもう江戸ではありません、謂はゆる東京です、たゞ梅幸が近頃セリフをいふ時ツライ顏をするのは色氣がなさ過ぎます。現に三千歲でもその點で割引する感じがあるのを惜しみます。

白岡道太郎

梅幸の感味——細い美しい線の日本畫。一筆をも惜むと云つた風な格調——その後に藏されてゐる、俳味茶味、私はこの人の舞臺を、そんな風に懷しんでゐる。

狹い私の見聞でも、既に、この人の藝は、漸次枯淡の中へ入つてゆくやうです。例へば、あの「累」の絶品であることを認め乍らも、それよりは、茨木の童子に、僧の智鬱に、より以上の喜びを私は感じる。何故なら、若し、累から延壽を除いて、あれだけの濃艶さが見られやうか、と危むからである。

しかし、物の怪に憑かれた後の凄艶は、茨木の童子に僧の智鬱に一味通ずるものがありこれこそは、今やこの人を除いては到底、味ふことの出來ぬものであろうと思ふ。

鴈治郎、梅幸、幸四郎、中車――殘念ら、正直に申せば、四人共もうあまりおくれの老優達です。いまこれ十年ほど前には四人それ〴〵を讃美した時代がありましたが、殆ど興味を喪ってしまった今、格別の感想もありません。骨董品として棚にでも置いて置きませう。

八

奥川夢郎

辨慶などをかつぎ出すまでもなく、今度の帝劇「河内山と直侍」「金子市之亟は」柄にはまってさほどの苦情あるまいが、河内山にはあんまり感心出來ず、分別がつきすぎてゐる。云ひ換へればふけすぎて、きびきびした惡黨らしさが足りない、玄關の所も、高島屋六代目の味と代ってゐるのが寂しい、流石に大きくはあるが、なんとなく物足りない。幸四郎の印象

◇編輯餘言◇

啓。御多忙中にも係らず、毎號ながら御叮重に御回答を下さいまして、誠に有難く御禮申上げます。

諸先生の各優に對する印象と感想が愛讀者にすぐ執筆者その人を知ることの出來得る興味を湧せますので、大好評をうけてゐます。尙今後共これを毎號つゞけて行きたいと思ひます。何卒宜しく御執筆の程を偏にお希申上げて置きます。（姥谷生）

◇南座顔見世興行役割一覽◇

舍人櫻丸、武部源藏、杣斧右衛門、網代屋津之助、大星由良之助（鴈治郎）法純、天津乙女、女房お種、妻戸無瀨（福助）島民部、妻戸浪、漁師伯了、藝者浪江（魁車）遊女八千代、杉王丸、娘小浪（扇雀）花澤三四郎、涎くり與太郎、前田鷺馬、見習お花（霞仙）梅小路主水、杣仁作（成笑）百姓十兵衛、杣左八（成三郎）百姓九郎兵衛、若徒幸内（高雀）遊女梅乃藝者小しほ（雀）別木裝左衛門、酒井傳次郎（扇）新造千代野、藝者市松（鴈之助）松王一子小太郎（章昇）漁師三保藏、店の者梅吉、大星力彌、朝比奈義秀（政治郎）扇屋三郎兵衛、杣笹藏、池田内藏太（鰕十郎）新造琴浦、喜瀨川龜鶴（延太郎）遊客藝者まつ代（市郎）遊女明石、藝者さもん（福万壽）吉田初右衛門、百姓鋤作、明石曾平太（市昇）金井半兵衛、百姓音右衛門、讀賣兵助（右左治）和田茂馬、百姓麥藏、大垣仙藏、（莚平）警固の侍、百姓吾作、杣福造（齋五郎）神谷七郎右衛門、金棒引、杣松兵衛、那須直吾、下女おりん（箱登羅）御台園生の前、一味齋室（莚女）露の五郎兵衛、藤原時平、京極内匠（吉三郎）井伊直滋、春藤玄蕃、手代庄八（市藏）松王丸、隱居久齋、加古川本藏（中車）渡邊綱、梅王丸毛谷村六助、吉村寅太郎保名（幸四郎）從者左源太、曾我五郎時致（金太郎）梶原平次景高（純藏）仲居おいよ（富三郎）百姓畔作、奴（升藏）青木主計、奴（錦四郎）遊客、奴（大七）新造歌川、藝者ひなち（三四郎）忍び軍太（梅十郎）百姓太郎兵衛、奴（菊四郎）仲居おきみ、藝者初代（梅之亟）新造八ッ橋、仲居おかつ（鐘造）仲居おたか藝者さきの（梅三郎）從者右源太、曾我十郎祐成（泰治郎）下男三助、杣谷作（幸藏）扇折小百合實は愛宕山の鬼女、女房千代、娘お園、妻お石（梅幸）

顔見世狂言雜感

竹内勝太郎

歌舞伎の世界は云ふまでもなく傳統と形式美の世界であるそこに殘されてある幾つかの傳統的な色彩は成る可く保存され得る限りは保存しておきたいと思ふ。何故なら傳統の尊重は或る意味に於いて形式美の完成に役立つからである。

京の南の芝居の顔見世も此の意味に於いて願はくば何時までも殘しておきたい歌舞伎の傳統の一つである。今は既に東京にも大阪にも此の風は絶にてなくなつてしまつて、三都のうち僅に京都のみに獨り保存されてゐるものであることを思へば尚更その感が强い。元より顔見世と云ふことの意味内容は昔とはすつかり變つて、唯形式だけが舊態をとゞめてゐるのであることは改めて云ふまでもない。

蓋しそれは當然のことであらうと思ふ。時代の推移と共に歌舞伎そのものに對する我々の氣持からして變つてゆくのであるから、況して傳統を作つた時代と傳統と考へる時代とには自からその傳統に對する態度に相違が生ずる。顔見世の如きはも早その本來の目的をさへ失つてゐるのであるが、然し今の場合そんなことは問題とするに足りない。唯その傳統の保存が歌舞伎と云ふものゝ形式美を完成する上に効果がありさへすればいゝ。歌舞伎が綜合藝術である以上それが持つてゐるあらゆる音樂や立体的平面的裝飾美の一つも缺くことの出來ぬのは勿論であるが、尚その上に劇場建築そのもの、劇場自体に對する裝飾、並に劇場を取卷く雰圍氣すら、歌舞伎に對しては藝術的價値がある。例へば顔見世に於ける竹矢來を組んで俳優名の招牌をあげたり、積み物をしたりする小屋

表の作りが所謂歌舞伎氣分と云ふものを濃厚に湧き出させるそれは現實の世界に對して歌舞伎と云ふ特異の藝術的世界を明確に對立させて存在を示すことに役立つからである。そこに藝術の獨自性の現はれを見ることが出來る。

今年の南座の顔見世狂言には第一に「菅原傳授手習鑑」の車曳と寺子屋、所作事に「戻橋」と「保名」、それから梅玉追善狂言として「假名手本忠臣藏」の九段目等が選ばれてゐるさうである。私はこれ等の狂言に就いて些か愚感を述べて見たいと思ふが、例に依つて偏痴氣論に終ることは豫め御免を蒙つておきたい。

◇

大阪の操芝居竹本座に上演された十一段續の人形淨瑠璃「假名手本忠臣藏」は淨瑠璃界を風靡したばかりでなく、時代の民衆のまつただなかに素晴らしい勢ひで汎濫して、忽ち藝術王國たる歌舞伎の世界を征服してしまつた。之は實に老大家に對する新時代の興隆、大近松に對する竹田出雲の華々しい勝利であつた。寛延元年八月のことである。

伊原青々園氏の「日本演劇史」に依ると此の「假名手本忠臣藏」は翌年直ちに歌舞伎の方へ輸入されて、京大阪江戸の三都で競つて興行され、爾來その寛延二年から天明五年に至る三十七年間の上演度數をかぞへると、京大阪で各十回、江戸で二十一回、都合四十一回に達してゐると云ふ事である。即ち約十箇月目毎に一度は必ず三都のうちのどこかで舞臺に上場してゐたと云ふことになる。「忠臣藏」の流行想ふべしである。

然も此の忠臣藏を舞臺にかけたのは歌舞伎の方が遙かに先きである。即ち元祿十五年十二月に所謂義士の討入りがあり翌十六年二月四日には事件落着を告げて四十七人の義士は切腹したのであるが、するとそれから僅かに十二日を經た同月十六日に江戸の中村座で「曙曾我夜討」と云ふ名題で少長の十郎傳吉の五郎が吉良家討入を演じて見せた處、時の幕府に睨まれて四五日で中止したと云ふのがそれである。所がそれから三年後の寶永三年五月及び六月には既に大阪竹本座で近松が「兼好法師物見車」並にその後追狂言「碁盤太平記」と云ふ名題で堂々と此の事件を舞臺に取扱つてゐる。越へて寶永七年に大阪篠塚庄松座で吾妻三八作の忠臣藏狂言を上演した時初めて大岸宮内と云ふ役名が出來、ついで三十六年後の延享四年六月に京都の中村粂太郎座で九段續歌舞伎「大矢數四十七本」を演じたが、この時の澤村宗十郎が扮した大岸宮内は非常な評判を博した。これが後に操に取入れられて

「假名手本忠臣藏」の七段目所謂茶屋場のモデルとなつたのである。

斯く忠臣藏を舞臺に表現したものは歌舞伎と淨瑠璃とを合すると出雲の作が生れて前、既に十扁以上に上つてゐる。その中にも出雲の「假名手本忠臣藏」は矢張り先輩近松巢林子の「兼好法師物見車」と「碁盤太平記」とから一番深い影響を受けてゐる。結局出雲の淨瑠璃はそれ等先後の各作を大成して完璧の名品としたものであると云ふことが出來やう。

茲で私が特に考へて見たいことは「忠臣藏」狂言が「曾我」狂言と殆ど對立してわが歌舞伎狂言の大宗となり、百扁に近い作を生み出してゐると云ふことである。アリストテレスがその「詩學」のなかで論じてゐる劇作法則のうちに、劇は成る可く人口に膾炙した問題から題材を求めた方がよい。例へば「イリヤッド」とか「オディッセエ」とか云ふものに取材すれば何人にも事柄の骨子を理解されてゐるから、演出される悲劇も容易に觀衆に感動を與へることが出來て甚だ効果的である、と云やうな意味を述べてゐる。悲劇がほんとうに民衆のものであつた希臘に於いては當然の理論であると信じられるが、同じく眞に民衆が芝居を享樂してゐた歌舞伎興隆時代には矢張りアリストテレスが論じたやうに世人周知の殊に一般に興味をそゝる事件を材料にすることの賢明さを當時の劇作家が無自覺に理解してゐたのであらう。從つて顏見世狂言の出し物は必ずや曾我の世界と定まり、又藝題につまれば忠臣藏と云はれて、双方無數の狂言を製作されたのも、歌舞伎作者の考へがこの希臘悲劇の法則に暗合して、冥々の裡にこれを實現した結果だと見ることも出來る譯である。

そこで「假名手本忠臣藏」の劇的構造であるが、これは細部に渉つて解剖してかゝると長くもなるし興味も薄いから唯大体に於ける比較にとゞめておく。竹田出雲の對照に持つて來るのはなんと云つても彼の先輩近松巢林子並に紀海音でなければならぬ。所で此の近松及海音と出雲との作品を並べて見ると、そこに可なり著しい相違が目立つ。それは嘗て私が小篇「竹田出雲の仕事に就て」で述べたやうに、近松や海音の作品が非常に文學的要素に富んでゐるに對して、出雲の作品は遙かに劇的要素に勝れてゐると云ふ點である。それを更に云ひかへれば前者は音樂的効果の助けを借りることが多く、後者は舞臺演出的効果の助けを借りることが多いと云ふことになる。されば前者は細部的には文章の結構に勞力を拂ひ、後者は事件發展の趣向に苦心を凝らす結果を生む。實際近松や海音の名聲はその名文の力に依り、出雲が成功は劇的

趣向の手腕に依るのである。試みに解剖して見るがいゝ、その不朽の傑作として尊重されてゐる近松や海音の心中物の名篇もなんと劇的構造の單純素朴なことであらう。

この意味からして出雲の最も圓熟した作「假名手本忠臣藏」は淨瑠璃歌舞伎を通じて日本演劇史の上に一時期を劃したものと云ふことが出來ると思ふ。

◇

同じ出雲の傑作でも「菅原傳授手習鑑」は「假名手本忠臣藏」に先立つ二年前の延享三年八月に出來たもので、この次ぎの延享五年十一月には「義經千本櫻」が完成してゐる。

一年毎に斯程の秀れた大作を創作しつゞけた出雲の創造力の偉大さ、藝術活動の旺盛さは驚く外はないが、私から見れば圓熟し切つた「假名手本忠臣藏」よりも（何故なら餘りの圓熟は既に病氣を持つてゐるから）その少し手前の若く健全な「菅原傳授手習鑑」の方が藝術的に興味が深いと思はれる。

「菅原」の先驅としてはそれより三十三年前の正德三年二月に近松作「天神記」が大阪竹本座で上演されてゐる。出雲の「菅原」は矢張り此の淨瑠璃から尠からぬ影響を受けたのである。然し「菅原傳授手習鑑」は古典の作品として實に立派な劇的構造を持つてゐる。寂しく沈んだ「道明寺」の次ぎには華やか明るい「車曳」があり、華やかなるうちに寂しさを包んだ「賀の祝」のあとには寂しさのうちに澄んだ明るみを堪へた「寺子屋」を据へ、變化の妙と對照の巧をつくし、之をつなぐに不斷に相對する劇的意志の葛藤を以てし、之を貫くに潑剌たる悲劇的精神を以てしてゐる。そして「忠臣藏」よりは簡潔にして緊張した纏まりを持ち全篇を通じて藝術的力感に富んでゐる點から云つても、私は「忠臣藏」よりも「菅原」の方をより深く愛する。殊に一段一幕を獨立させて見てもその「寺子屋」によく匹適し得るものが「忠臣藏」にあるかどうか。

「菅原傳授手習鑑」は新しい演劇の時代の黎明をつげる美しい曙光であつた。

◇

最後に所作事「戻橋」と「保名」に就いて全くの愚見を述べておきたい。

戻橋は古く寛政十二年江戸河原崎座の顔見世狂言に「戻橋綱顔鏡」として演じたのが初めだとあるが、梅幸の新古演劇十種に入れられてゐる戻橋は「戻橋戀の角文字」と云ふので最初常磐津の素淨瑠璃として默阿彌が書いたのを菊五郎が懇望で明治二十三年十月歌舞伎座の舞臺に上すことになつたも

のだそうだ。「保名」は云ふまでもなく竹田出雲の「蘆屋道滿大内鑑」の内の保名物狂の條を清元の所作として獨立させたもので、文政元年三月江戸都座で三代目菊五郎が「深山櫻及兼樹振」と云ふ七變化のうちの一つとして舞臺に上したのが初演だと云ふ。

處で此の二つの物語はいづれも日本の古傳說として有名なもので、戾橋の鬼女のことは「劍の卷」にもあり、白狐報恩の事は大和、河内、和泉その他各地方に古くから傳はる俗說である。鬼女傳說は「日本紀略」にある一人の狂女が洛中に現れて死人の頭を取つて喰つたと云ふ話を渡邊綱の武勇物語に結びつけたものだと解釋する意見もあるさうだ。成る程一通りは受取れる常識的の解釋である。然しそれでは此の洛中に現れた鬼だけには通用するけれども、それ以外の諸國に散在する鬼一般を說明することは出來ない。葛の葉狐の解釋に就いては寡聞な私は未だ耳にしない。

洋々として海のやうに廣い歌舞伎の流れが形作られるまでには、幾十百となき細流が茲に落合つて來たのであらう。その無數の原流を溯つて、石をくぐり木の葉の下を傳うて走る源をさぐり當てるのには、私は單なる文獻の上の研究だけではとても足りないと思ふ。そこには必ず人類學的考古學的土俗學的な研究が必要になつて來る。そして各地方に殘つてゐる原始的な古傳說古歌謠古舞踊等に就いて科學的系統的な研究を要求されるのである。

此の意味から私は先年土俗研究の雜誌「鄉土趣味」に「日本の鬼」と題して我が古傳上の各種の鬼を論じたなかに此の戾橋の鬼と葛の葉狐とに對する考察を述べておいた。卽ち私の考へる所では、彼の鬼なるものは大江山の酒顚童子にしろ戾隱山の鬼女にしろ凡て天孫人種に同化し切らなかつた所の先住民族であると信じたい。古事紀に於ける土蜘族や隼人族等の如き天孫人種渡來以前から日本國土に繁殖してゐた民族の殘存者であると思ふ。例へば今でも尙殘つてゐる山窩の如きがそれである。それが洛外の深山に屯して居り時々洛陽の地を襲うて財物子女を掠め去つたものに違ひないと想像される。葛の葉狐に就いては「葛」の音が「國栖」に通ふので矢張り先住民族と云ふことにもならない譯はないが、然し私は葛の葉狐が保名等の普通人より遙かに優れた神通力を持ち、その子の童子は母の敎へにより鳥獸の言葉を理解したと云ふやうな點から推察すれば、葛の葉狐族は天孫人種より數等進んだ文明を持つた所の智識的民族であると推定することが出來る。そうとすれば飛鳥寧樂の頃河內平野を中心に或は播磨、

山城和泉大和等の各地方に渡來して來た朝鮮乃至支那民族の移住民の一團が所謂葛の葉狐族であつたのではないかと考へられるのである。

「戻橋」は先住民族が同化し切れぬ大和民族への反抗を戲曲化した民族闘爭の劇詩であり。「保名」は後來の文明民族が大和民族へ同化の途中に於ける融和し得ぬ民族間の風習信仰の表れ、個人の感情と民族の意志との衝突、更に云ひ代へれば人間的な自由なる戀愛と種族の嚴格なる差別觀的律法との葛藤を描き出した悲劇の一齣である。

私は斯う云ふ風に此の二つの所作事の源流を解釋したいのである。

（十一月二十日）

顔見世芝居の話

楠田敏郎

◇

十六七と云ふ時代を、私は京都で過した。だから、南座の顔見世芝居と云ふと、今でも四條橋から祇園へかけて漂ふあの艶めかしい町の裝ひを目に見るやうである。

千兩役者の名の染出された提灯と大幟、冬が來ると云ふ寒い京の町の、こゝばかりには春が返つたのではないかと云ふ氣がした。

が、その頃、靜間小次郎、喜多村緑郎、熊谷武雄、―さう云つた新派劇あたりで、芝居の一年生をやりかけてゐた私には殘念だが、十五六年前の南座顔見世月の思ひ出がないのである。

◇

顔見世興行と云ふのを、十月東京の歌舞伎座でもやつた。大阪から成駒屋を迎へて、歌右衛門、中車、左團次、我童、それに東西の福助と猿之助と云ふ顔ぶれで、いかさま、顔見世芝居と云ふ物々しさだつた。

然し、この顔見世と云ふことが、芝居道に今日も殘つてゐて、現に、南座が今月それをやる。これは吉例で昔からのもの、京都南座の十二月と云へば顔見世芝居と決つたやうに見物も承知してゐるのだが、本當を云ふと、これは傳統的な型が保存されてゐるだけであつて、事實その意味は、もう無くなつてゐるのである。

◇

ごこの劇場でも、今日は、俳優の座組みが毎月變る。東京で云へば、歌舞伎座は歌右衛門、羽左衛門、帝劇は梅幸、幸四郎、宗十郎、市村座は菊五郎、友右衛門、大阪の中座ならば鴈治郎一座と、さう、たいていは極つてゐても、それは、そこに屬してゐると云ふだけで、同じ顔ぶれでばかりで蓋を開けない。今日の客は、もつとめづらしもの好きで、せつかちである。それに、興行師の方でも、昔より大資本主義で自由が利くために、いつでも俳優を取替へつこをする。

然し、昔は、俳優も今日の如く多くはなかつたらうし、見物の、肩の入れ方も違つたであらう、そんな關係で、毎月のやうに替へることをしなかつた。

◇

卽ち、一年決めの制度だ。

そして、それが、十一月と決つてゐたのである。だから、その月の芝居は、小屋にとつても、俳優にとつても、懸命のものであり、また見物にしても、待ちかねたところの、素晴らしい出來事だつたに違ひない。

俳優から云へば初お目見得、卽ち顔見世である、出來るだけ華々しく、そして、藝題も十八番中の十八番物を並べ立てたのだ。

南座の今月、本極りで何うなつたかは知らぬが、鴈治郎一座に、帝劇から梅幸、幸四郎、歌舞伎座から中車が馳せ加はつてゐる。これなら、日本國中、ごこへ出しても好劇家を醉はせることの出來る顔ぶれだ。

◇

出しものもちよつと東京から出かけて行きたくなるのが揃つてゐる。「戻り橋」は梅幸の鬼女に、幸四郎の綱であらうが。踊りなら京都の見物は梅幸で納得するだらう。

あの「車曳」は暫く見ないが、大歌舞伎らしい味があつて

顔の揃つた舞臺なら申分のない出しものである。それに、鴈治郎の源藏に、中車の松王丸の「寺子屋」は見たい。

今年の四月、歌舞伎で「寺子屋」を出したときは、成駒屋が歌舞伎座への初舞臺、たしか震災後はじめての東京入りだつたと思ふが、その大切な舞臺で源藏を演つたのだから、十二分に自信のあるものだと云へる。

その時、松王丸は羽左衛門、魁車の戸浪、片市が春藤ヶ番でつき合つてゐる。羽左衛門は有名な舞臺度胸の持主、喧しい批評をびくともせずに辨慶を演らうと云ふ人物だが、松王丸は自信のあるものらしく、さう、見てゐて、ちぐはぐなところはなかつたが、何しろ、いかに松王丸でもあゝ神經質ではと考へる、そこへゆくと中車の、あの柄、あのせりふ、しかも十分に柄にはまつてゐるのだから、大きな舞臺になるだらう。

◇

東京では久しく「彦山權現誓助劍」を見ないから、何も云へないが、「歌舞伎年代記」を見ると寛政十一年の正月十五日から、森田座で初めてやつて、評判が好かつたとある。

その時の毛谷村六助は團藏、娘おそのは中村のしほがやつてゐる。單に「彦山權現」の名題ではそれよりもつと早く寛政八年秋、河原崎座で上演、六助には簑助、京極内匠にはこま藏が扮して居る。參考までに——。

◇

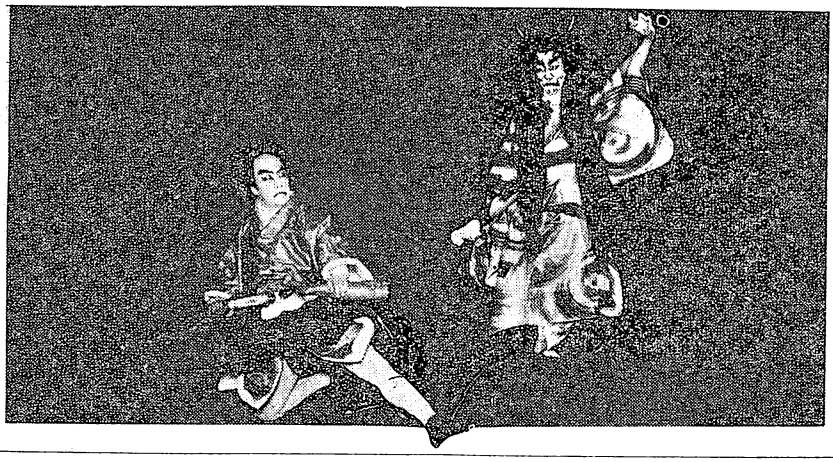
追善劇と銘打たれた「忠臣藏九段目」は、これも昨年の十一月に歌舞伎座で中車の出しものになつた。

大阪には隨分居たくせに、梅玉のそれを見なかつたのを、今になつて殘念におもつてゐるのだが、今度は誰の本藏であらう。中車のそれは、表に尺八を吹いてゐる形から、「本藏が首參上申す」の、あの、重いせりふ、實に、いまも目の前にあり耳に殘る。

力彌は福助だつた。こゝで云ふ場合ではないが、東京の福助が男になると、私は、どうしても舞臺が見てゐられない。で、折角の、好きでたまらない中車の加古川本藏も充分見られなかつたと云つて好い。だから、もし中車がやるなら見たいものである。

◇

こんなことをかき續けて居ると限りがないから筆を擱く。が、四條橋の南詰に、對ひ合つて建てられた二つの大劇場の一つだけが殘つて、昔乍らの顔見世興行をやる、しかも土地は昔めかしい京都だ。おもふだけで情趣豐かなものである。



河竹默阿彌翁作

新古演劇十種の内

戻橋

南座顔見世興行上演臺本

登場役割

渡邊源次綱　幸四郎

小百合姫　梅幸

〔愛宕山鬼女〕

右源太　泰次郎

左源太　金太郎

常盤津連中

本舞臺、上寄りに戻り橋を畫心に銜り眞中柳の大立木上下樹木の張物で見切り、うしろ北山を見たる夜の遠見、すべて一條戻り橋の体、下手の上るり臺に常盤津連中居並び、時の鐘、水の音にて、幕明く。

〈それ普天の下卒土の濱、王土にあらぬ處なきに何處に妖魔の住みけるか、睦月の頃より洛中へ悪鬼あらはれ人を取り、夜行きゝの人もなし。

〈されば内裏の警衛に都にのぼりし源の頼光朝臣はいとまなく去る頃深くかたらひし維仲卿の姫君へ便りもなさでおはせしが、けふしも渡邊源次綱、君の内命蒙りて

（此の内向ふより渡邊の綱烏帽子直垂の附太刀の拵へ良黨二人侍烏帽子半素袍大小草履にて弓矢を持ち、附き添ひ出で來り）

〈使ひに立ちし一條の大宮よりの歸り道、卯の花咲いて白々と月照り渡る堀川の早瀬の流れ落合うて水音すごき戻り橋、綱は良黨引き連れて、橘の表へあゆみ來て

綱。戀せずば人は心の分らまじ、武威たくましき、我君も、戀には立るたてもなく日頃ちぎらせ給ひつる維仲卿の姫君へ密々の仰せ承り御使に參りしが路次のさわりと御秘藏の髪切りの太刀賜りしは武門の譽、身の面目片時も早く立歸り彼の御方の、御かへしを我君へ申しあげん。

右源太。昨日までも降りつゞきし卯の花くだきしもけふは晴れ、此頃になき月夜、

左源太。闇にあられば妖怪も今宵はいづる氣違なし、心やすく存じまする。

綱。空行く月の模樣では三更とおぼゆるぞ、良等、道を急ぐべし。

兩人。かしこまつてムりまする。

〈夜更ぬ内にと主從が行かんとなせしうしろより、一ト吹き落ろす青らんに、岸の柳のさわがしく心なられば振りかへり、元來し道を打見やり、

綱。ハテ心得ぬ、かつぎま深に打かづき向ふへ見ゆるは正しく女妖怪變化の取沙汰、昏れ先より表をとさし行きかう者もあらざるに、女子の來るはいぶかしゝ

〈さては我らをおどさんと姿をかへて妖怪が爰へ來ると覺ゐたり、幸ひなるかな打取つて

君の途さんに參らせん、

〈二人のものに打さゝやき、秘密をさずけしりぞけて

おのれ妖怪ごさんなれ。

〈と太刀引そばめほのぐらき木の下かげへぞ入りにける。

（綱、思ひ入れあつて上手へは入る）

〈又むら立ちし雨雲のかげもる月をよすがにて

（本釣がねを打込み、合方になり向ふより、小百合が下げ髪、そぎ袖模樣ものゝ、小袖かつぎを冠り、草履をはき出來り花道へ留まり）

〈たどる王路に人影も灯かげも見ゐずわがかげをもしや人かと驚きてかつぎに身をば忍ぶ摺けふの細布のならざして女子心に胸あわず思ひなやみて來りける、

小。卯月の空の定めなく、又雲だちし雨もよう、降らぬ内にと思へども爰は一條戻り橋、見れば行きかふ人もなく、

〈たよりもなやとたゝずみて暫しやすらひ居たりける。

〈綱は木かげを立出でゝ

綱。女性は何れへ參らるゝぞ。

小。妾は一條の大宮より五條のわたりへ參りまする。

綱。此頃專ら洛中へ妖怪のいづる噂あり夜陰を行來の者なきに何とて連れの

おわさずや、

小。供の者を召し連れましたが用事ありて跡へ歸り只一人故夜道がこわく連れをもとめん先程よりこゝにたゝずみ居りました。

綱。こわいと云ふは尤も乍ら、五條のわたりへ參るとあらば、某し送りて參らせん、

小。お情ふかきお詞にしたがひますれば妾をばお連れなされて下さりませ。

綱。三更すぐれば夜明けぬ内、お身の家へ送り得ません。

へおりから雲の吹きはれて、月の光に見合はす顔、

ハテあでやかな、

へ水にうつりし影を見て

今水中に寫りし影は、

小。あれ——、

綱。夜更ぬ内に、いざとく〳〵、

へ西へ廻りし月の輪に遠くのぞめば

愛宕山・北野は近く清瀧の森を越

へくる時鳥、初音ゆかしくふりかへり、見上る顔にはら〳〵と木ぎのしづくも雲はこぶ雨かとしばし立ち休らひなれぬ道になれやすく

今はへだても中空におほろも春のなごりかな、

綱。最前より見受る所、都の人とは言ひ乍ら優にやさしきなり形ち、定めてよしある人ならん。

小。父は五條に年久しく住居なせし扇折り、妾は幼き頃よりして好みて舞を習し故、それを枝折に此ほど迄院の御所にお宮仕へを致しましたが、年頃なれば暇たまはり下りまして厶りまする。

綱。なに、舞をたしなみ玉ふとや、定めて見事な事ならん、某未だ都の舞を見し事なし途上で望むは異な事なれど一トさし舞ふてはくれまいか、

小。お送り下さるそのお禮に是にて御らんに入れませう。

へ女性は扇借り受けて

へ空もかすみて八重一重、櫻がりするもろ人が、むれつゝ爰へ清水や初瀬の山に雪と見し花も散り行く嵐山惜しむ馴の春すぎて、夏の始めにおくれにし、花も春葉に衣替

綱。イヤ面白き事なりし姿のみかは手振りさへかくもやさしき女性なれば妻に持ちなればよき樂しみ、

小。定めてあなたは奥樣をお持ちなされてゞ厶りませうなア。

綱。いまだ妻はめとらぬが、見らるゝ通り不骨者、いかで相手のあるべきぞ

小。何ない事が厶りませふ、

へお情深きお心に、今宵まみへし妾さへ緣にしを結ぶ露もがな、思ふ戀路初螢、

へ云ひ出で兼れて胸こがし若葉の闇に迷ふもの

へ都女は取わけて、

へ姿やさしき花あやめ、引きつ引かれつ澤水に袖もぬれにし事ならめ

綱。それはお身の思ひ違ひ、かゝる名もなき田舍武士、誰れが思ひを掛け

ようぞ。

小。イエ〳〵名もなき武士とはのたまへど禁裡仙洞はじめ參らせ知らぬものなき立派なお方。

綱。何、某を立派とは、

小。當時内裡の警衛に都へ登りし源頼光朝臣の御内にて渡邊源氏綱どの故

綱。や、如何いたしてその名をば、

小。戀しと思ふ殿御じや者、お名を知らいでなんとせう、不束か乍ら妾が願ひお叶へなされて下さりませ。

綱。世にも嬉しき事なれど、左樣の道にはうとき某し、

小。イエ〳〵、うときと仰あれど今宵は戀のお使ひにお越しなされたでムりませう。

綱。フム能くも夫までも存ぜしぞ。

小。戀をする身はよそ外の事迄存じて居りまする。

小。戀をする身と申せども御身がそれを知りたるは

小。エヽ

綱。妖魔のせいであらうがな、

〈星をさゝれて打おどろき、

小。何故妖魔のせいとは

綱。おろかや變化、みめよき女に粧へどその本體は惡鬼ならん。

小。サアそれは、

綱。心得ざりしが水の面にうつりたる影は正しく鬼形なりしぞ。

小。サアそれは、

綱。サア、

二人。サア〳〵〳〵

綱。早く性體あらはしおらう。

〈言ふに妖女は忽ちに憤怒の相を現はせば

綱。さてこそ變化。

〈うしろに向ふ良黨がくわんれんせよと組つくを、事ともせずにふり拂ひ、かたちは消にて失せにけり。

〈我れは愛宕の山奥に幾年住みて天然と業通得たる惡鬼なり、

〈車輪の如く目開き炎をはきし有樣は身の毛もよだつ斗りなり。

綱。扨は惡鬼でありしよな、

小。いかにも汝が推量の如く、我は愛宕の山に幾年住て天然に業通得たる惡鬼なり、いで此上は汝をば、我住家へつれ行かん

綱。何をこしやくな

〈引立行かんと立掛れば綱は生捕くれんと勇力ふるふ時しもあれ

〈一天俄にかきくもり震動はして四方より黑雲おほひ見へわかず、ためらふひまに電光の目を射る光に飛びかゝる綱が襟髮むんずと摑み

〈砂石を飛ばす暴風に、連れて虛空引上るれば

〈綱はすかさず髮切りの太刀抜き放しとらへたる鬼の腕を切り拂へばどうと落ちたる北野の廻廊

（綱太刀を抜き鬼の腕を切る、是にて廻廊の家根の上手に落ちる。）

〈惡鬼はむらがる雲がくれ、光を放ちて失せにけり。

——幕——

かほ見世

食満南北

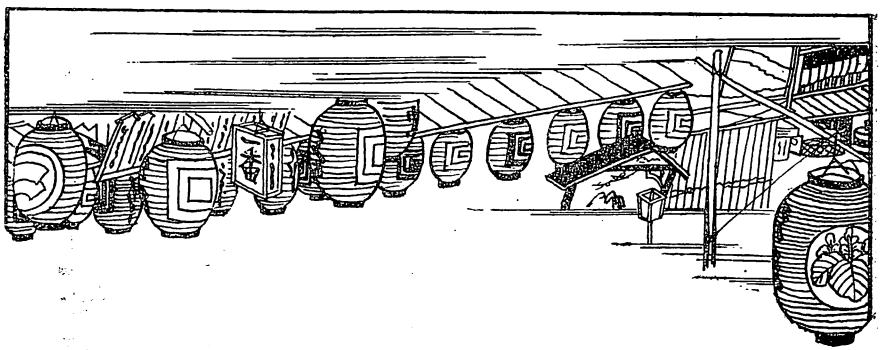
△顔見世の川柳を描かうと思ふた、それは岸本水府が描くといふ、ではやめる。
△顔見世の笑話を描いてくれといふ、これは去年の顔見世號に描いたからやめる。
△顔見世の氣分を描いてくれといふ、寒いといふより外の事を感じた事がない、僕は詩人ではない
△顔見世の思ひ出を描いてくれといふ、五分切といふ鰻まむしのうまかつた事より外に何の思ひ出もない、僕は喰ひしんぼうだ。
△顔見世と鴈治郎何といつてもピッタリと合つてゐる、顔見世と澤正、顔見世と築地小劇場ごうも工合が悪い。
△北斗ときそふたり、二番鶏になるころに顔見世の價値がある。
△モダンボーイやモダンガールの横行する時、一面にやはりこんな低徊趣味の存在を喜ぶ。
△夏目さんに云はせれば顔見世も非人情の一つかもしれない

人魚の唄

——成駒屋禮讃——

土屋みつる

花のパリーに八十のサラ・ベルナール
オフイリヤのいとしい小娘すがた。
しかし、それはもう見ぬのに——
水の都なにはにさく
成駒屋の元氣のこもつた姿。
人魚をたべた永遠のわかさよ
つやのこもつたあの眼、あのいろけ。
公西園寺にみごりの噂
人魚　人魚　永遠のわかさよ！



顔見世の頃

岸本水府

南座の櫓下から明けかゝり
顔見世の手板に朝の音がする
顔見世に吉井勇も來た昔
大橋に子役の寒い十二月
遊びもつらし顔見世こ島原
音羽家も年寄らはつた京の宿
顔見世の二階冷い火鉢來る
顔見世のバレ案の定雪を踏み
箱登羅も冬の四條の人通り
顔見世の大部屋汽車で起きたやう
手鏡で見る顔見世の朝の顔

京の顔見世雜談

石割松太郎

◇……霜月の顔見世は、昔は一つの年中行事ではあるが、實際上の必要から起つてゐる。その一年中の俳優の顔が定まるのであるが、今日の京の顔見世は、全くの年中行事、一つの興行の形式だけで、内容が伴はない。然し形式だけでも「顔見世」の殘つてゐることは、歌舞伎のために、なつかしいものゝ一つである。

◇……これが道頓堀で行はれるこして、さほどの情趣もないかも知れないが、南座こいふ、「京」こいふ背景を持つて顔見世が全く生きて來る。

◇……「顔見世」を思ふこ、千切れるやうな北風こ底冷ゐのする京の寒さこを思ひ出すのである、從つて、水菜雜炊こ蕪の千枚漬が聯想される、幕内關係者は水菜の雜炊にあたゝまつて、夜の引あけから座へ出かけたのは、單にもう昔の語り草に止まるだらうか、それでも水菜の雜炊の形式だけは殘つてゐるのであらう――こ思ふ……のは、この數ヶ年來、私は顔見世見物を夕方から夜の部を見て、翌日の晝の部へこ逆轉の見方をしてゐるから實際を知らない。

◇……今一つ顔見世の付物は、京は名物の北時雨である。いつであつたか大分前の事である、――そうだ私がまだ酒に親しんでゐた頃であるから、もう五年の前にならうか、幸四郎の「娘道成寺」を見て、表へ出るこ、皎々こ照りわたる月影が、ま近かに手にする如き墨繪の東山の上にぬつこ出てゐる、のにバラ〳〵こ微醉の頰に北時雨。こんな情趣は京でなくば味へぬ。

◇……その頰をかすめて時雨こ、何こはなくに幸四郎の「道成寺」こが、いつまでも聯想されて、花やかな今まで見てゐた舞臺が忘れられぬものこなつた。

◇……幸四郎こいへば、顔見世には度々の人である、幸四郎梅幸は京の顔世見に來るが、殆んご年中行事だ。今年の「保名」は幸四郎だらう、「保名」を見て表へ出るこ、北時雨が降るだらうか、降るかも知れぬ。が、私の頰にはもう、私の一生を通じて酒の香はすまい、多少の感なくもない。

◇……幸四郎こ云へば、ついこの程さるお座敷で「松島」

を踊つたさうだが、控への座敷へ入つて來て、「大層結構でした」こさる人がいふこ、頭を掻き〳〵笑ひながら、「始めからしまひまで出鱈目ですよ、全つきり忘れてしまつた」こ云つてゐたさうだ、これはいつはらざる幸四郎の地聲だ。

◇……それでも流石にたゝき込んたる腕は偉いもので、隨所にいゝ形を見せたこいふ事だが、廿五日の芝居を打通して黑衣をつけたのは俺だこ威張つてゐるんだからね、無理はない。この黑衣のご厄介になるここの多いそこに、幸四郎のせりふは、あの聞くが如くに考へ〳〵いつてゐる癖がいつの間にかついてしまつた。ごこやらであのせりふ廻しを含蓄のあるせりふだこの意味をいつてゐる劇評家があつた、世の中は廣いものだ。

◇……幸四郎ここもに梅幸も顔見世には度々來る人だ。この人の「土蜘蛛」「茨木」こなるこ、又かこ思ひながら見るこ流石だ、幾度見てもうまいものだ、「戻り橋」もその一つだが、これは松尾太夫の常磐津が大きな力をもつてゐる、その松尾が今年は來ないさうだ、半減こまではないかも知れぬが、「戻り橋」に多くの期待を持てぬ、あの松尾の美音で、「西へまわりし月の輪」の一くさり、舞臺を忘れて山臺に心が引かるゝ、「ほここンす」こ結んだあたりは溜らない。

◇……この「戻り橋」の「ほここンす」のやうに、ほんの一字のかへ方で唄がイキになつたり野暮になつたりする、同じ「なむあみだぶつ」でも常磐津、清元、義太夫こおの〳〵に違つた南無阿彌陀佛がある、藝の味は實にこんな處にあるこつく〴〵こ思ふ。

◇梅幸こいへば、丸の内に帝國劇場が出來た眞先きに、委員長格でその樂屋へ陣取つた、その自分の樂屋を下見に梅幸が行つた時に、ごうした事か、今は忘れてしまつたが、私が丁度帝劇の樂屋へ行合はしたが、その時に、梅幸が自分の部屋の戸に "Baiko, Onoe" こローヤ字で書かしながら指揮してゐたが「帝劇へ來たのですから、外國の貴顯方がお越しになる時の要意です」こ眞じめに話してゐた、あの愛すべき稚氣のあつた梅幸も去年の三千歳の頃に年の數がよまれる。

◇……こりこめもない話はもうよさう、夜がふけた。好きで植た狹い庭の大明竹の末葉に、北時雨は注がないが、冬の風がさら〳〵こ音をたてゝゐる。

（一五・十一・二一）

顔見世の幻想

富田泰彦

「顔見世の始まり」――さうしたことを史的に研究しても今更私達には、單にヂレッタントとしての興味しか喚び起さない。

――それほどに漠然としてゐる處に、歌舞伎道の古典味が何んとなく懐かしまれもするのだらう。

×

「顔見世」は萬治年間に江戸では中村勘三郎によつて始まる。それよりも曩に京阪の劇場の創始者である村山又兵衛が制定したと云ふことになつてゐる。立川焉馬の「歌舞伎年代記」には元祿十五年、森田座「天地人筒守」いづみの小治郎に市川團十郎「暫」の大あたり也――とあつて始めて顔見世の文字が出てゐる。「顔見世」と「暫」とが因緣的に、斯うした根元をなしたものと云へる。それからの江戸京洛の霜月興行には「顔見世」或は「顔見勢」と云ふ文字が、必ず冠せてある。

×

「顔見世」の儀式などは、「戯場樂屋圖會」などの古書を繰れば判るにはわかるが、それよりも「歌舞伎研究」第六輯即ち十一月發刊のものに木村錦花氏の執筆された「芝居年中行事」は顔見世に關する記錄としては、そのアレンジメントの行屆いた點から見ても、貴重なものだと云へる。

×

斯うした傳統を貴ぶ筈の東京では、早くから顔見世の名殘りさへとどめて居なかつた。これを何がな景氣附けにと、明治四十三年の市村座の十一月興行で、昔の顔見世氣分を偲ばうと云ふのだつた。俳優は無論座附の菊五郎、吉右衛門一座で、今日の如くに一人も脱出者のなかつた頃だつた。それに故人歌六まで加はつてゐる。狂言は「忠臣藏」の毎日替りに中幕は顔見世には離すことの出來ない「暫」を吉右衛門が買つて出た。ウケは勘彌で、菊五郎は後見に一座ヅラリと顔を揃へた、表飾りから劇場内、配り物萬端古式に則つた。繪看板も顔見世番附風に描かれたと、

×

道頓堀の顔見世の盛觀は――

「おちこちの人はおしあいみよし野や一夜千金おつる顔見世」と云ふ狂歌にも盡きてゐる。川竹の兩側には炭、薪、傘酒その他の進物を積み飾る、大手、笹瀬、藤石、花王などの手打連の箱提灯をかけ連ね、雜喉場の大提灯は萬燈の如く天を焦すとある。

――始まりは暮六つ時、一番大鼓、二番、三番と太鼓の打ちきりに式三番叟、棧敷の置炬燵、蠣雜炊、漬菜、最肩容の暫くの聲、手打のさんざめき――今は返すよしもがなの歌舞伎の夢の一つだつた。

でも道頓堀では明治十九年の十二月に久々振で顔見世が復活され、大手、笹瀬などの手打もやつたが、眞の手打連中は一人も生存してゐなかつたさうな。

×

さうなると京都ばかりは惠まれて、今に顔見世の俤だけはとゞめられてゐる譯だ。さうして私には年々に逝つた想出がそれからそれへと手繰り寄せらるゝ。――

×

南座、北座――そして櫓の差し向ひと唄はれた四條の昔は知らないが、明治三十八年の顔見世には未だ南座は松竹の有ではなかつた。「大敵こて恐るゝ勿れ、小敵こて侮る勿れ」の長旒を櫓に飜へしたのは、實に今も拗ね者の仁左の我當であつた。狂言は坪内博士の「桐一葉」と高安月郊氏の「櫻時雨」の新作を揃ゑた陣容――而も書卸しだつたと思ふ――しかし戰利あらず遂ひに仁左は手打同樣に引受けて莫大な借錢を背負はされたと云ふ。

×

それに反して、新京極の歌舞伎座に據つた鴈治郎は福助（故梅玉）右團治（故齋入）、政治郎（今の福助）などで畫の部は「二葉の松」夜の部は「一の谷」と「八百屋の献立」などで、鴈治郎は殿の重信と惡役の小柴又市の二役で氣を替へたのが非常に當つた。鴈も今のやうに善人ばかりに扮せずに、實惡、端敵と云つた役でも十二分の腕を揮つた。夜の部では勿論熊谷と半兵衛だつた。この興行は非常な大當りであり白井社長も初陣の顔見世と云ふだけに恐らく兩氏に取つては感慨の深いものがあらう。

×

斯うした松竹の大磐石の如き礎となつた鴈治郎――而して京の顔見世こそ、年々歳々全力を注いで、その座組みに、その狂言の選擇に萬全を期して居ることは、好劇家に取つて

は、何よりの機縁と云つて可い。

×

「顔見世や四條五條の橋の霜」――と云ふ誰やらの句を、いつも思い浮かべながら、彼の南座の顔見世情調のなかに陶醉し得る私は、全く歌舞伎の昔の夢のなかに、放たれたやうな安佚な心を持つて芝居が見らるゝ――もう其處には舞臺の氣分以外には、一切の理智的な批判をさへ避けたいと思ふ。

×

――たゞもう年々歲々、山眠るてふ京の冬の花と眺むる、顔見世――から、晨の霜や夕時雨の俳趣豐かな平和な環境にあつて、當代の名優達の無事な姿を舞臺上に、見出だすけでも何位の幸福かも知れない。實際、今に、この幸福すら夢と奪つて行く時代が來た時――そも「顔見世」の幻影は何によつて、私達は求めようとするか――

（一五、一〇、二二）

晝の部狂言（十時開幕）			
第一	東山物語	大森痴雪氏作	二幕
第二	戻橋	河竹默阿彌翁作 新古演劇十種の内	常盤津連中
第三	菅原傳授手習鑑		二幕
第四	羽衣	楳茂都陸平氏撰附 松竹樂劇女生共演	常盤津連中 長唄連中
夜の部狂言（五時開幕）			
第一	彦山權現誓助劍	高安月郊氏作	毛谷村の塲
第二	あじろ舟	（大阪日日新聞所載）	二幕
第三	假名手本忠臣藏		山科の塲
第四	上の卷 保名	伊阪梅雪氏補作	清元連中
	下の卷 春調娘七種		長唄音樂師社中

梅玉追善と忠臣藏九段目

姥谷愁生

今年の十月に故梅玉追善興行として中座で推薦になる『實錄先代萩』が上場され、遺子中村福助の淺岡、政次郎の松前鐵之助で鴈治郎の至藝たる片倉小十郎で、狂言中の白で追善披露をして觀客に新な涙をながさせた。次いで今度の顏見世興行に故梅玉追善として『忠臣藏九段目』が上場されることになつた。中村鴈治郎の大星由良之助、市川中車の加古川本藏、中村扇雀の娘小浪で、中村福助の戸無瀨、政治郎の力彌で勤めることになつてゐる。

故梅玉翁にとつて京都はお馴染の土地であつて、明治二十年、京都祇園館の柿葺落しに九代目團十郎や鴈治郎と一座して乘込んだことがある。狂言は『一の谷』と『高時』、『吃又』に『六歌仙』で丈の出し物としては『鳥目の上使』で義經とおとく勤めて大好評であつた。その時は大變な人氣で未だに京都では一つ話に殘つてゐる位である。

この『忠臣藏九段目』の狂言は關西では珍らしく五十年振りに上演されるものであつて、故梅玉翁が福助時代に由良之助、或は戸無瀨で勤めたことがある。

故梅玉翁と云へば、あの豐饒な頰と輪廓、つぶらな瞳を秀でた眉……と茲顏の印象をうかべたゞけでも情味のあつた人で、舞臺のそれも『河庄』の孫右衛門の骨柄を聯想されるのである。

近世名優の一人として二代目中村梅玉の名は日本演劇史の一頁を飾るものであつて、その一生涯は舞臺で活き、舞臺で死んで行つた人である。

忠臣藏九段目
中車の加古川本藏

歌舞伎の型と創造性

林　久男

又しても、吉例の「顔見世」狂言の季節が來て、四條河原には時ならぬ花や錦が織り出されることになつた。

自分がいつも言つて居る通り、總ての藝術は時代の要求に應じて變へられてゆくべき運命をもつてゐる。又さうなくてはならない。

併し、歌舞伎傳統の古い歴史をもつてゐる「顔見世」などに於ては、徒らに新時代の惡趣味にかぶれた不純なものよりも、寧ろ其の出し物に於ても、其の藝に於ても、飽く迄も歌舞伎劇の純正なる傳統の流れを見せて貰ふことが願はしい。

この度の出し物にも、竹田出雲が延享の末期から寛延の初めへかけた成熟期に、並木千柳や三好松洛等と筆を揃へて書きおろした「菅原傳授手習鑑」や、「假名手本忠臣藏」などの重なる場面が、それ〴〵の顔揃ひ役揃ひで演ぜられるこいふことは、「陳腐だ」とか「又か」とか言ひ捨てるよりも、先づ以て色々な意味に於て寧ろ興味のあることを思はなくてはならない。

殊に「忠臣藏」は中座の五月狂言に鴈治郎福助の大一座によつて演ぜられては居るが、その時は大序から七段目、大詰の稲村ヶ崎や柴小居まで出されて居り乍ら、九段目だけは拔かれてゐたので、此度の九段目によつて此一座の「忠臣藏」が、云はゞ點睛されるわけである。又、中車の本藏や、梅幸のお石などを加へた此場面に對しては、自分は色々な意味に於て期待して居る。仁左衛門の本藏や、歌右衛門の戸無瀬などがよく目にもつき出すのも面白い。

一體、大阪の福助の近來の藝には、何とも言へない味の出て來たことが、自分には特に興味ある問題になつてゐる。現に今年になつてから見たうちでも、「實錄千代萩」の淺岡とか、「忠臣藏」三段目及び四段目の塩谷判官とかいふやうな歌右衛門と同じ役柄を、かれこれ比較して見ても、此優の行くべき道が年毎にはつきりして來て、其の特長が段々にじみ出でつゝあることを感じさせるのである。が、其の委しい比較論は他の機會に讓りたい。

「菅原傳授」では。欲を云へば「佐太村」まで見たいのであるが、「車曳」では、古式ごほりに松梅櫻の錦繪が現出されることであらう。形澤山の「寺小屋」では色々な問題が提供されるであらうが、要するに、出雲の作爲がこれ程までに仕活かされるかといふ處に興味がかゝつて居る。

「彦山權現」は作全體としては自分の趣味には遠いものであるが、それでもあの毛谷村の場では、吉右衛門の六助や、もこの菊次郎のお園によつて含蓄あるシーンを現出されたことを忘れられない。

更に、痴雪氏の新作や、月郊氏の「あじろ舟」などによつて、從來の型から離れた新味が添へられることは大に注目に値するのである。

せめて此の「顔見世」のやうな機會に於て、眞に純正な、毀されない、傳統的な歌舞伎本來の型によれる演出が望ましいといふことは前にも述べたが、併しそれは決して、舊來の型を其儘墨守模擬して、欲しいといふ意味でないことを繰り返しておきたい。

本來「型」といふものは、俳優が其それ〴〵の個性によりそれ〴〵の見解により、それ〴〵の表現をなして築きあげた演技上の結晶的樣式であつて、そこには常に演出者の工夫とか、創意乃至創造性といふものか根抵をなして居ることは云ふ迄もない。

然らば、古人の演出的樣式に依りつゝも尙ほ新なる演出者の創意乃至創造性が活らき得べき充分の餘地がそこに無くてはならない。如何に古人の「型」に依る場合と雖も、それは單にその舊來の型の上に動く傀儡であつてはならない。型の爲に型を演ずるのではなくて、それを通じて、常に演出者の創意が活らき、生命が躍動しなくてはならない。卽ち、それぞれの役の性根は常に一度は演出者の心の中に融かされなくてはならないといふことになる。

俳優は如何なる場合にあつても、單なる傀儡ではなくて。

常に個性ある藝術家でなくてはならない。併し又、個性や。獨自的工夫の眞意を穿ち違へて、奇怪な新工夫や、見當違ひの新案などに沒頭して、純正なる藝術的表現をぶち毀すに至つては、もう鑑賞に値すべきものでないことは言ふまでもない。

この度の芝居に於ても、鴈治郎や、幸四郎や、中車や、梅幸などが、それ〴〵の役に於て、古來の名優の型に依ることも妨げない。併し、それは唯だ型の爲めの型の墨守ではならない。そこには彼等が獨自の藝術家としての創造性が活らいて居なくてはならない。

一方彼等は獨自の藝術家として、それ〴〵の創意による新なる演出法を敢てすることは大に宜しい。併しそれは決して純正なる藝術的表現をぶちこはすやうな、奇怪なる見當違ひや駄工夫であつてはならないことも言ふ迄もない。

願はくは、寧ろ吾々が成心として抱いて居る成型的樣式を驚かし慴服せしめるやうな意表に立派な演出的新工夫を見せて頂きたい。さうしたら、地下の出雲や松洛なども、嘸かしどんなにか快ぶことであらう。

かほみせ

川尻清潭

顔見世や袴正しき若太夫
顔見世や淺漬添へし繪番附
霜曇けふ顔見世の初日哉
顔見世の曉寒き鏡かな
顔見世の三番濟ませて寢たりけり
顔見世や歌舞伎の春の鴨雜煮
顔見世や三本太刀は親讓り
顔見世やよしある人の蒔繪重
顔見世やその錦繪の繪そら事

顔見世の出し物と其型

川尻清潭

拜復。京都の顔見世狂言のそれ〳〵に就て何か書けよとの御仰せ委細承知いたし候へ共、折柄當地歌舞伎座次興行の準備にて、何かと多忙を極め居り候事に付、只々思ひ浮み候儘の昔の型を順序もなく相配し、御返事申上候事にいたし候

南座の吉例顔見世狂言のうち、「戻り橋」は、明治廿三年十月興行の歌舞伎座にて、先代菊五郎が初めて舞臺に登せ候物、その折は「戻り橋戀の角文字」と申す名題のやうに存ぢ居り候、振附は先代花柳壽輔が致し候ものにて、其初演當時只今の梅幸は揚幕より、その踊の手振りを畫がき寫し、恰活動寫眞のフィルムの如く、順を追つて書列らねて覺ゑ候事有之候、尚又二回目の上演には、梅幸が鬼女の吹替へを勤め候なごの手心より、梅幸の出し物中にて最も亡父の型を其儘に傳へ候物に御座候、只梅幸の代となりて改められ候は、小百合の立枠模様の衣裳を露芝と菊の花に取替へ候事と、舞の掛りの「空も霞て八重一重」を自身に申し候と、白木の堂を朱塗致し候位が際立ちたる事と存候、相手役の渡邊の綱は、五代目菊五郎の鬼女に對し、先代左團次、同芝翫、同右團次、松助、訥子なごの中にて、五代目の評は、左團次は眞に武勇の人らしく、芝翫は淨瑠璃のワキ師として申分なく、左團次は宙乘りに於て、鬼に引上げられし形ちを崩さず、松助は小百合の手傳ひに見ゑ、訥子は鬼の方が釣上げられ候やうに思はれしと申候は、おもしろき事と存候

次に「菅原傳授手習鑑」の車曳は、およそ誰が勤め候ても梅王松王櫻丸の中、松王だけが離れて年嵩に見ゑ候事通例な

るを、先代芝翫のみは、正に三人兄弟と見ゐる若さを現ばし居り候事を名優と存候、又梅玉役は申す迄もなく荒事にて、すべてを童の心にて勤め候が申傳へ乍ら、「櫻丸サア、ブルウ、、、來い〳〵〳〵」の飛六法にて體をほうり出して花道へ入り候事、「二つ、三つ」と飛んで大きく箱に落ち、「五六百、ク、、ク、、ク、、、、、」と申す所、其外表と裏の元祿兒得等本家本元の團十郎が致し候ても、痔を踏出す程の難義なる大役にて、此頃は中途を高合引に掛け候へ共、是は本格にては無き事に候、又梅王の帶は黑八丈の丸括を締め候呼吸に秘傳ありて、只堅く結び候時は、身體宙に浮きて聲の出ぬやうになる事有之候ものに候、梅王が二度目の出に三本太刀を用ふるは、市川家の古例乍ら、近頃は松王も市川家より出づれば、三本太刀を差し候は破格なる事に御座候、櫻丸に就ては大和屋と助高屋の型最も多く行はれ候へ共、大阪にては「御沈落」にて下に居るやり方なぞ、東京の目にては珍らしく見ゐ申候、時平の筏見得は鶴屋の工夫にて、筏の船頭が棹さす形ちを應用仕り候事に御座候

次ぎに寺子屋の松王の拵へに、黑繻子地へ雪持ち松と大鷲を總縫ひに致し候上下對ひの好みは、七代目團十郎の創意に候が、九代目團郎は黑木綿へ右の模樣を縫はせて使用致し、五代目菊五郎は鼠地へ同じ模樣を縫取り、雪を芝居の三角紙の形ちに散らせて用ゐ候事も御座候、又昔は青祿山水の着附けと對の羽織の背中へ月を出し、是を紋に見立てたる物も有之候やう承わり及び居り候、松王の首實驗には種々なる型殘り居り候事乍ら、八代目團十郎の致せしと云ふ、刀を拔きて源藏に差付け候なぞ變りたる物と存候、尙此塲の松王の病い鉢卷は左で結び切りにするが當り前に候へ共、成駒屋の家にては輪を出して結び下げに致し候、それと同時に病體の心にて座蒲團を敷く型を見たる事有之候、先代左團次も同じく座蒲團を使用し坊主醫者を伴ひ候なぞ、是も昔の人の勤めし事の由に候、松王が門口にて駕より出で、寺子をあらため候時、五代目菊五郎は刀を内反りに突き居り候を、此頃は外反りに致す事形ち締らぬやうに存候、其外源藏の型は團十郎より菊五郎が優り候爲に多く行はれ、鴈治郎も大体菊五郎系統のやうに存候間爰には略し申候、但し實驗を見詰める間の足工夫あるものに候へ共、記述にてはくわしく盡くし難く候

「忠臣藏九段目」にては力彌が本藏に槍を差つけ候時、本藏は刀へ手を掛け、態と其臂を上げて脇腹を突かせ候段取は誠に理屈に適ひて力彌も突き心よきは勿論なれば、故人も此型を學ぶ者多き次第なれど、昔は力彌の槍に掛る時、殊更に

手先を開きし片腕を立派に高く上げ、サア爰より突けと云はぬ計りに致し候ものにて、斯くてこそ本藏の人情も能く現はれ、一面に歌舞伎芝居の形式候をも發揮仕り候名案乍ら、今の世にては前者の方を好むが一般なるべく候、仁左衛門は此場にて、力彌の二つ巴の紋に一禮をする仕ぐさなぞ、是は珍型の部に屬し候へ共、踏を見てより聲の調子の衰ひ候は、仁左衛門のよき所と存候、次に小浪の役は大定二重の上にてサワリを致し候が常なれども、這は元大阪の型にて、江戸にては戸無瀬が小浪を叱つて下し、小浪は必ず平舞臺の下手寄り計りにてサワリを勤めるに限りたる物にて、其跡へ戸無瀬が下り、鶴の巣籠となるを法と致し候事に候、此頃の小浪はサワリに戸無瀬を通り越して、上手の屋体の傍まで行く人なぞあるはよろしからず、未だ男を持たぬ娘として「太功記十段目一の初菊乃至此小浪等は、相手の男の顔を見ぬ位に勤むるが、昔の女形の心得なりしに候、戸無瀬は彦三郎を手本とする人多きやうに存じられ候

「彦三權現誓助劍」のお園は、女が男姿をして居り候役として、内輪に止つて外輪に極る足の運びにやりまし事の候へ共、御地の雀右衛門の致し候が古風にておもしろく存候儘、敢て申さず、梅幸は瀬川系の型の舞臺にて髮を結直すを見せ髷には刀の下げ緒を結び申し候、六助は團藏の型にては、老母を一間へ入れ候時、立附け悪き障子の開閉に、一寸鴨居へ手を掛けて力量を示す件有之、尚余人と變り居り候は、お園に斬掛けられるを煙草入を投げて防ぎ、更に二枚折屏風にて避け乍ら二重より飛下り、豐通其屏風へ臂を掛け、正面を切つて畵面の見得を致し候所を、皮肉に裏向きに此形ちをなしお園を見上げる極りは大によろしく、又幕外になりて抱きたる子供を下し、禮に差したる梅と椿の新枝を兩手に持たせ、扇を開いてあやし乍ら入り候派手さは、他に類を見ざるやうに候、團十郎は末段の「庭の青石三尺計り」を「三寸」と語らせ候なぞの齟齬も候なれど中車は其折微塵彈正を勤め候故すべてを心得居り候事舞臺の上に現はれ候を御覽被下度候、又今回は斧右衛門に鴈治郎出勤この事に付、昔の型を稍くわしく申述べ候へば、名人仲藏の考案を最上のもの存じ候、其拵へは出額の鬘も、すゝみ胴も用ひず、只ほつと鬘を掛け、眉毛を太くするだけの事にて、至つて若々敷相勤め例の「鹽梅より出來た自慢の團子」の件、「棚からころり」にて丸めて手拭を落し、その平手の人差指だけを出して手拭を指さし其儘の手を裏返すだけの同じ指にて自分を指し、「其氣もころり」と横ギバに落ち「手でてこねたこて」云々の臺詞を言

ひ、「斯うしやき張つた枝骨は」で、拳を振つた兩手を左右へ伸して突張り、「おろさにや」で折かゞみを叩いて兩手を曲げ、「抑へば」と兩手で圓形を造り、これを小刻に丸く開いて棺桶の形ちを示し、「はいるまい」平手で上から押付け首をすくめるやうに肩を動かし一這人こもなき死出の山」は右の手から入れ込んで谷を覗き、左でも同じ事をして、更に右の指で山をさし、一つ廻つてギバをしてすぐに元へ坐り、片手で頭を押へ片手にて泣き、是より「婆樣〳〵」の謌の件はいつもの如く、次に「謌に響き泣く涙」は開いた兩掌を耳のうしろにかざし、片足を擧げて物を聞く形ちを、下手と上手で二度して、廻つて坐つて拜むのは「泣く涙」を「南無阿彌陀佛」に利かせ候工夫に候、「落込む谷に水嵩のいとゞ增りて見ゐぬらん」兩手を揃へて斜に下へ伸す形ちを、右と左と二度にて谷の深さを示し、更に揃つた兩手を今度は上から下へ、水の流れる形ちに下し、べた〳〵と坐つて、控へてゐる仙仲間を指さし、皆さん見て呉れとの心にて其指で母の死體を指し、片手を死骸に掛けて、片手で泣くのが振りの納まりに候事、故人勘五郎より聞傳へ置き候ものに御座候、尙引込みも多くは人形身なぞ致し候を、仲藏は脫げた草履を履直すだけにて、泣き乍ら入り候と申す事に候、外にいろ〳〵の工夫も見へ申し候へゞ、遂に是に及ぶものに出逢ひ不申、名人と呼ばれ候程の人は、役の上に細心の苦勞を重ね候段、其塲限りの間に合せものに比べて、遙に優り候を尊き事に存じ候

「小袖物狂ひ」の本名題は「深山櫻及兼樹振」と洒落たものに候へ共、此頃にては單に「保名」なぞ記され候事も有之嘗て六代目菊五郎の保名狂亂の舞臺裝置を、田中良君が色彩だけにて感じを現はし候時、東京にては評よく候所・これを寶塚の舞臺に再用致し候初日の事、然も或學生が見物致し「今日は初日だから畫を書くのが間に合はなかつたのだ」申候なぞ、斯樣な見當違ひも珍らしく候へゞ、幸四郎は反對にすべてを昔の儘に最初の振附け通り傳はりたる所を踊る主意に候へば、舞臺飾りも古風の好みと存じられ候、團十郎は、上手の小高き草土手の上に、朱塗りの堂を繪心に作らせ櫻の立木の花盛りと、菜の花を數多く並べさせ候事、實に美しかりしを覺ゑ居り候が、其後此式の道具を見たる事無之、又團十郎の保名が、仕掛けにて土手を滑り落ち候仕ぐさなぞも、如何なる文句の所なりしかうろ覺ゑ乍ら、おもしろかりし事だけ記憶に殘り申居り候、

以上認め終り候所、又ぼつ〳〵思ひ出したる事も有之候へ共、餘り長文に相成候間、是にて擱筆仕るべく候、今回の顏見世狂言それ〴〵の嵌り役、當代に於てより以上の物は望まれぬ逸品揃ひに付、大入大繁昌の壽、前以て御祝ひ申上候

頓首　（十一月廿日）

竹田出雲と「寺子屋」

並山拜石

エム・シー・マーカスと云ふ英國人が、一千九百十六年に「松の木」と云ふ題名の著書を出してゐるが、其の内容は「日本劇漫談」と戯曲、「松の木」とである。

今度京都四條南座の顔見世狂言のうちに「寺子屋」が出るさうだが、その「日本劇漫談」の中に「竹田出雲と松の木」と云ふ一章があるから、それに因んでこれを一寸紹介してみようと思ふ。

著者のマーカスと云ふ人は、だうした經歴の人か、全然知らない。唯日本の古今の情況（此處には大ザッパに情況と云つて置く）を正、誤とりどりに傳へる幾多の外國人と同じく「竹田出雲」をも、「菅原」をも、同じ筆法で取り扱つた一人と見做せばいゝと思ふ。で、此處では其の傳へられた正、誤の是非を云々することはお預りとする。

彼は其の「竹田出雲と松の木に」かう云つてゐる——

「日本人は近松門左衛門（一六五三——一七三四）を、その國の最も優れた劇作家と心得てゐる。彼は七十四篇の時代劇と、三十七篇の世話劇とを書いた。彼は日本のソフォクリーズ（アテーナの悲劇作者で、紀元前四九五に生れ、四〇六年に死す）、日本のシエクスピーヤと呼ばれてゐる、かうした比較は應々にして見當違ひなところがある——詩人として卓越せる點に於ては、略等しいところがあると見做され得ないこともないが。併し日本には、一般的に氣受けのよい眞に偉大な劇作家はなかつたのである。實際、ソホクリーズや、シエクスピーヤのやうな無盡藏の花園から出る花のやうに、

永久に新しい花は、近松門左衛門の花園からは見出されないのである。と云ふものゝ、こんな風に云ふ人があるかも知れない――近松の戯曲の練達した結構は、ソホークリーズのそれを想ひ起こし、其の練達の秘訣は、彼の脚色の各に中心點をはらます、あの深刻な手法に歸因すると。更に、道化と悲劇とが、如何にもほどよく塩梅されてゐることや、彼の戯曲の中に、チャリが織り込まれてあることが、シエクスピーヤやソフォクリーズに見出す絶對的完成、優絶級の調和は、この偉大な日本人に求めても到底無駄なことだらう。然も、この斷定は、彼が幾多の後繼者にも亦適用し、得るのである。彼等は皆、すぐれて器用である。彼等は巧に順序を立てゝ自己の計畫を表示する方法を知つてゐる、また、確かと早く觀衆を恍惚たらしむる方法を知つてゐる、尚又、切迫してゐる大團圓に對して、人の感情をそゝる方法をも知つてゐる、だが、彼等の作は、ソフォクリーズやシエクスピーヤのそれのやうに、飽くまで生きたところがない、また兩者のやうに有機的に完全なところがない。近松と同時代の人達と、その後繼者の中から、吾々は、九十篇の戯曲を書いたタケモト。チクゴと、あの有名な戯曲、「一の谷嫩軍記」（一の谷の戰爭で二人の若人が初めて出會ふ回想記）の作者、ナミキ。ソースケ（一千七百四十五年に死す）を數へることが出來る。この優秀な作は、彼の五人の門弟、アサダ・イチヨウーとナミオカ・ケイジとナミキ・ショーザとナンバ・サンソーと、それからタジョッケ・ゼンロクとによつて完成されて、師匠の死後七年、一千七百五十二年に公にせられたのであつた私は又、戯曲、「ウタダイモン」（一七八〇）の作者、チカマツ・ハンジとタケダ・イヅモの名を擧げなければならないこの最後の作者、竹田出雲は、泰西の感情に最も多く訴へるところのある藝術を有する一人であらう。

竹田出雲は一千六百八十八年に生れた。一千七百十三年、彼が二十五歳の折、其の友、近松門左衛門と共同して、操人形芝居を開演したが、其處で演じた脚本に異色のあることゝ、衣裳の派出に麗しいことが、忽ち有名になつて好評を博した。その衣裳はあらゆる劇場で眞似をするに至つた。私は日本人が近松に至大な尊敬を拂つてゐることを既に述べた。彼が技能に秀れた人であることは「家臣の忠義」と云ふ彼の有名な歴史小説で一層よく證明される。その小説は、日本で著名であるのみならず、歐洲語に飜譯されてゐる位である。併し、其の組合の劇的天才は、竹田出雲であるやうに思はれ

る。彼等の最も著名な操人形の脚本のうちの一篇は、「國性爺」（海賊王）であつた。この芝居の成功は、「四十七浪士の仇討」劇には及はなかつたらう。「四十七浪士の仇討」は、近松の死後、一千七百四十八年に初めて上演された。近松は「碁盤太平記」と云ふ悲劇物を、四十七浪士の物談を基として、一千七百六年に作つた。彼が死亡する少し以前彼は操人形芝居の爲めに、同じ一篇の戯曲を書くやうに出雲と慫慂した。二人は一緒にスケッチした。この計畫の下に、竹田出雲は、それを、三好松洛と並木千柳と共に書いた。それが、「忠臣藏」又は「赤穗の忠臣」の藝題で知られてゐる。これは井上十吉氏によつて或る部分散文に英譯されてゐる。

併し竹田出雲は暫時して普通の芝居の爲めに戯曲を書いたそれらのうちで、時代物悲劇、「菅原傳授手習鑑」は最も有名なものであるばかりでなく、あらゆる日本の戯曲中で、恐らく口を極めて賞讃さるべきものであらう。それは竹田出雲と、彼の三人の友、三好松洛（一六九三——一七七三？）と並木千柳（一六九三——一七四九）とそれから小出雲との合作である。それは出雲が世を終はる十年前一千七百四十六年に初めて上演されたのである。

日本の戯曲は、普通十二幕乃至二十幕からなつてゐて、全部演ずるには全一日かゝる、即ち卯の刻から申の刻までかゝるのである（朝六時から夕の六時まで）。「菅原」の長さも恰度そのやうである。だが、それは必ずしも全部演ぜられない。普通この脚本中の唯一幕だけが採用される。竹田出雲が書いた幕は、全幕中の最も光つた部分で、「マツ」（The Pine-tree）と呼ばれてゐる。また「寺小屋」（The Village school）と云ふ題名で知られてゐる。

この一事は確實である——即ち巧に表現された「松の木」は、偶然その所演を見物した歐洲人ですら、必ず心奥深く印象さるゝに相違ないと云ふこと。成程、自己犧牲の行爲が如何にも誇張されてゐるので、吾々の纖細な感情を立腹さす程だが、併しその行爲が、何分悲壯であり、その人物が極めて雄々しくあるだけに、嘆賞せざるを得ないのである。

——スガワラ・ノ・ミチザネは職業的文學者の古い家系に屬してゐた。彼は能筆家であり學者であるこころから、高い尊敬を拂はれてゐた、そしてミカドが課し給ふ題で、巧に詩を作り得るかぎで、總理大臣になることが出來た時代に住んでゐた。然もこれこそ菅原が成功した所以であつた。とは云へ、彼は、經倫の才を奮つて、幾多の難局を切拓くには適してゐなかつた。かてゝ加へて、入り組んだ情況と苦闘しなけ

ればならなかつた。彼は生れの高い、癇癪持ちで傲慢な貴族——藤原家の代表者であるトキヒラの嫉妬に苦しまなければならなかつた。道眞は彼一派の讒誣により、あらぬ罪名を着て、太宰府へ流された。彼の家族と友達とは殺されたり農僕に身を落されたりした。道眞はその翌年死んだ（九百三年）彼の死後、あらゆる不幸が彼の敵手の上に落ちた。迷信は、この不幸を道眞の復讐心の表れと見做した。遂に彼は神の位にのぼされ、腦筆の神「天神」となつた。

この戯曲にては、菅原道眞の家僕中に、シラタユーと云ふ百姓がある。彼を主人は非常に寵愛した。道眞には特に好きな樹が三本あつた——梅、櫻、松。この三本の樹を、百姓白太夫は守育てなければならかつた。

ある日、白太夫三ツ兒の父となつた。大臣はその名親となることを承諾した。彼は愛樹の名に因んで命名した——梅王櫻丸、松王と。

三人の子供が成長すると、最初の二人は命名親に仕へたが程經てサムライにとりたてられた——のに、三番目の松王はこの大臣の强敵手、フジワラ・トキヒラに仕へた、彼はこの戯曲ではシヘイと呼ばれてゐる。

道眞と時平との間に政爭が續いて、道眞の臣下に對して大規模の虐殺が行はれ、道眞自身も流刑に處せられた。併し以前その家臣であつたゲンゾーは、主人の季子、シューサイを助けやうと決心した。彼はある小さい村に若君共々隱栖してその子を自分の子供と詐はつた。大臣からかねて書法を學んでゐたので、源藏は、その村で寺子屋を開く。其處で事件が續く。

梅王は主人に從いて配所へ行つた。櫻丸は主人の大義明分を擁護して、敵に殺された。唯松王のみは、相變らず敵手に仕へてゐた。倒れた道眞は、松王の振舞を非道く苦にして、あの有名な歌——

「梅は飛び櫻はかるゝ世の中になにとて松のつれなかるらん」

に自己の悲哀を舒べた。だが、松の木はつれなくはなかつた後の舞臺では、如何に松王が忠節であつたかゞ示される。

このテーマの選擇には如何にも特質的なところがある。と云ふのは。甚だしき日本人の二心と殘忍性との背後に毅然として君公の爲めに盡す二心なき忠節を、吾々は認めるからだ然もその忠節は、如何に苛酷だらうが、如何に苦澁だらうがその爲めには自己を犧牲にして、はゞからない程のものである。」——かうマーカス氏は述べてゐる。

同じ書物に「松の木」と題する戯曲の載せられてゐることは、この文の冒頭に一言したが、それは則ち「寺子屋」だ。著者は、これに對して、かう云つてゐる——

『「松の木」は自由に改作したものである。それは、よく解らす爲めにさうしたので、飜譯ではない。舞臺上の約束中で、ある箇所は原作には全くないものだ。また、ヂ(地)即ちチョボと呼ばれてゐる歌詞は勿論、不必用だと思はれる他の歌詞も省いた。かうした歌詞は、日本の芝居では、一面詩的な、他面劇的な特質を與へるものであるが、歐洲人には全然不可能なもので、その効果は絶對にないものである。かうした上での「松の木」は泰西で公演し得るものとは私は思ふ。

若しあるマネジャーがあつて、この「松の木」を演出しようと思へば、必ず多大の印象を公衆に與へるに相違ないことを私は確信する。日本劇壇中の第一人者、市川團十郎の松王、それに次ぐ尾上菊五郎の源藏の配役として演ぜられた「松の木」ほどのものはいまだないと云つていゝ」と。

「寺子屋」は大正五年の冬から大正六年の春へかけて、紐育のコメディ座で演ぜられたさうである。(それから以後今日に至るまで再び演ぜれらたかどうか私は知らない)。それは紐育に於ける劇作家や畫家や俳優によつて組織されたワシントン・スケーヤ・プレーヤーズと云つた劇團によつて演ぜられたのである。これに用ゐた脚本はこのマーカス氏の「松の木」で松王の役は佛人ジョセ・ルーバン氏が演じたと云ふことだが、如何にも好演出で、松王の苦衷に對しては、東西の人情にかはりはなく、婦人達の涙をそゝつたとのことである。(完)

「菅原」寺子屋の場　市川中車の松王丸

菅原傳授手習鑑

（車曳の場）

登場人物

一、松王丸　中車
一、梅王丸　幸四郎
一、櫻丸　鷹治郎
一、杉王丸　扇雀
一、時平　吉三郎
一、雑式、仕丁大勢。

〈鳥の子の榮に離れたる、魚陸に上るとは浪人の身のたとへ、草菅相丞の舍人、梅王丸主君流罪なされてより、都の事どもまかない、御臺のお行衛尋れんと笠ふかぶかと深みどり土手の並木にさしかゝれば、向ふより深あみ笠、我れに違はぬその出で立ち、たがひにそれと近くより、

（此の上ゐりにて上下より梅王丸、櫻丸深編み笠、同じなりにて出で來り）

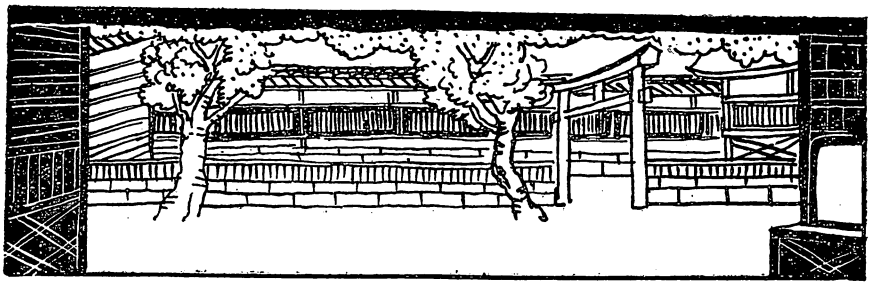
櫻丸。梅王丸か、

梅王丸。櫻丸か、逢いたや咄すことあり、聞く事あり

〈ト兄弟こかげに笠かたぶけ

梅王。扨て先き其ほうには、いつぞや加茂堤より君姫のおたのみしたひ尋れ行きしと、門屋八重がもの語り何とお二方に尋れ出おふたが、

櫻丸。成る程道にておつき奉り菅相丞御流罪と聞くより、體面なさしめんと安居の岸まで御供せしに、御たいめん叶はず、輝國どの丶計らひにて、御歸路の願ひの防げと、お二方の御縁も切れ、姫君より土師の里、伯母君の方へ、御臺君樣には御館へ供し奉まつり、事おさまりしさい丶ながら、おさまらぬは我が身の上、冥加に叶ひお車を引きその有難い事打ち忘れ、いやしい身にて戀の取り持ち、遂には御身の仇となり、君御むほんとざんげんの種にこしらへ、御恩受けたる菅相丞樣、流罪にならせたまひしも、皆此の櫻丸がなすわざと、思へば胸も張りさく如く、今日や切腹、あすや命を捨てよふかと、思ひつめば詰めたれども、佐太におわする一人の親人、今年七



十の賀の祝ひと兄弟三人嫁三人並べて見ると當春から祝ひいさみおはするに我れ一人かけるならば、不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝ふた上とせんなき命けふまでもながらへる面目なさすいりようあれや梅王丸、

〈ト云ふしにぎり、齒をくひしばり先非を悔むそのありさま、梅王丸もことわりとしばし詞むもなかりしぞ

梅王。チ、道理〳〵、我れとても主君流罪に逢ひたまふ上は、都とどまるはづなけれど、御館ぼつらく以後御臺樣のお行衛しれず、先き此の方を尋れよふか、筑紫のはいしようへ行こふかと、取つおいつ心ははやれどその方が、いふごとく、年よつた親人の七十の賀の悅びも此の月、これも心にかゝる故、思はす延行たがひに思ひはしゆみ、大海、是非もなき世のあり樣じやなァ、

〈ト兄弟都で見合してなみだもよふす折からに鐵棒引て先拂ひ、

（トこの時上手より雜式二人出て）

雜式。かたよれ〳〵、

（ト此時梅王前へ出て）

梅王。どなた樣のお通りでござりまする

雜式。本院の左大臣時平公吉田の參籠出しやばつて鐵棒くらふナ、片よれ〳〵、

〈トいひ捨てゝいりにける、

（トこれにて鐵棒引き花道へは入ると、梅王思ひ入れあつて）

梅王。あれを聞いたか櫻丸、ときよの君樣、嘗相丞うき目にあはした時平が大臣、ぞんぶんいはふじやあるまいか、

櫻丸。そうとも〳〵、よい所で出逢はした、梅王ぬかるな、

梅王。合點だ、

〈兄弟道の左右に別れ尻ひつからげ身がまへたり、

（ト此の內兩人花道よき所に行き、キツトなる、是にて前の道具、あづちのなると仕丁大ぜい居並び居る、又兩人舞臺へ歸りて兩人）

兩人。車やらぬ

〈ト立ちふさがり、杉王丸しや〳〵り出で

（これにて上手より杉王仕丁のこしらへで出て）

杉王丸。誰かと思へば松王が兄弟、梅王丸に櫻丸あゝ聞へた、こりや何か主には
なれ、ふちにはなれきがちごうてのらうぜきか、但し又時平公の御車としつてとめたかしらづにか、けいごの役は此の杉王、返答次第で用捨はならぬ、
〈白張りの袖まくり上げつかみひしがんその勢ひ、梅王ふつとふき出し、
梅王。やア、いふな〳〵きも違はれば此の車、見ちがひもせぬ時平が大臣、
櫻。ときよの君樣菅相丞さんげんによつて御ちんらくそのむれんこつづらに徹し出合所が百年め、櫻丸と、
梅。此の梅王牛に手なれし牛おひだけ位じまんで喰ひふとつた時平どののしりこぶら、二ツ、三ツ、四五六百くらはされば、勘忍ならぬ
〈勘忍ならぬとつめよつたり
杉王。やアちよこざいな、その音言、それ打てとれ、
仕丁大ぜい。ハア、
（ト此の時、皆々見構へする、上手の内にて松王丸）
松王丸。待てろうやい、
（トこれにて松王丸上手より白張りの拵へにてツカケの鳴物にて出て）
松王丸。やア何づれもにはおかまへあるナ命しらずのあふれもの、兄弟一つでないといふ忠義のはたらき、御ちんにいれん、こらうやい、松王がひきかけた此車とめられるなら留め見やうやい、
〈はなつなとつて押し出す事
櫻丸。チ、櫻丸や、
梅丸。梅王なくばいざしらず、一寸なりとも、
櫻。五分なりともやらるゝものなら、
梅。やつて見よ、
〈ト兩人ながゐに手をかけて勢ひこんだるあり樣なり、
（ト是には梅王櫻丸ながゐに手をかけると松王もやはり車を押し此内車つぶれる、と中には時平冠裝束のなりにて住む）
〈あらはれ出でたる時平が大臣、
時平。やア牛ぶち喰ふあばいめらながへにとまつて、邪麻ひろがば、あだちにかけて引ころさん、
梅櫻。やア左樣に大臣をひき殺さん、
（ト兩人たがへを持つて時平に打ちかゝる時平がいせいに兩人はかつぱとふして見ゐよく、口惜いこなし、
松王は兩人に向ひ）
松王。何と我が君の御威勢見たか、いで此の上は松王が、まつ二ツに、
（ト松王刀のつかに手をかけると時平。やれまて、松王今日は吉田への社參なり、血あやさば、社參のけがれ。助けにくひやつなれども、下郎にはやわぬ松王が働き、忠義にめんじて命はたすくる、命めうがなうづ虫めが
〈トあたりにらんでつゝたつたり、
松王。やいわいらよい兄弟をもつて仕合物だ、有難いと三拜さらせ、

へト言はれて兩人くわつとせきらい

櫻王。ヱヽおのれにも云分あるやつなれど親爺さまの七十の賀の祝すむまではノウ梅王、

梅王。そうとも〳〵その上で松の枝々切り折て敵の根を立、葉をからしてくれるは、

松王。そりやおれとても同じ事、親父さまの賀の祝ひすんで後、梅も櫻も落花みじん、足元のあかるい内、早くかへれ〳〵。

梅櫻。やアすいさんな、歸るをうぬにならおふか、

松王。なにを、

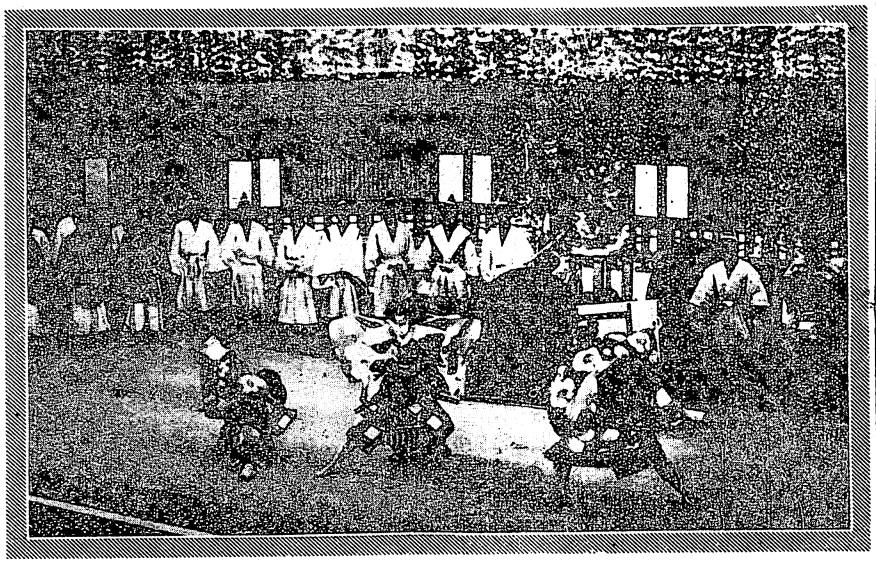
へトつめより〳〵兄弟三人たがひに殘す、意趣意恨。

時平。早く車をとゞろかせやイ。

仕丁。ハア〳〵。

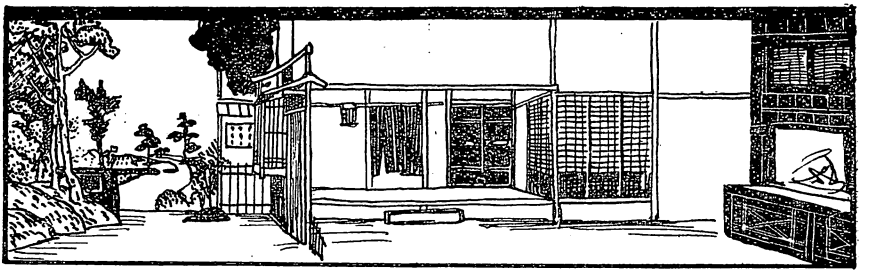
（ト是にて三人烏渡立廻り三人引張の見得、賑かな鳴物にて拍子）

——幕——



菅原傳授手習鑑　——車曳の場——

幸四郎の梅王丸・中車の松王丸・鶴治郎の櫻丸・吉三郎の時平



「菅原傳授手習鑑」

寺子屋漫話

油屋久二

〈武部源蔵夫婦の者、いたはり傳き我子ぞと人目に見せて片山家、芹生の里へ所變へ子供集めて讀書の器用不器用淸書を額に書子と手に書くも、人形書子は天窓かく敎へる人は取分て世話をかくとぞ見にけり。

この「寺子屋」の舞臺面を立體的に構成さす名文句です。涎くりの與太郎（霞仙）を中心に寺子達が喧嘩をしてゐる時に

〈主の女房奥より立出で……

これから愈々悲劇の葛藤が始まります。その時あたらしい「運命」が花道へ――と場幕から出て來ます。

〈男の肩に塀重、文庫、机を荷なはせて……舍人松王丸の女房千代（梅幸）が一子小太郎（章景）を連て弟子入りに參ります。戸浪（魁車）との「愛」に愛持つ女同志の對話があつて、やがて千代は隣村まで行くとてその子を托し心を跡に引かれながら立去ります。とやかくする中に

〈立ち歸る主の源藏、常にかわりて色靑ざめ主人の源藏（鴈治郎）が歸つて來ます。「成駒屋ア――」と大向ふが出るところです。

「いづれを見ても山家育ち……」とよろしく

〈思ひあり氣に見へければ心ならず女房戸浪立ち出で……

戸浪に引合された小太郎を見て「さては器量勝れてけだかい生れつき、公家高家の御子息といふても、おそらく恥かしからず……」と雁治郎の源藏は思ひ入れがあります。あとで「……玉簾の中の誕生と孤垂の中で育つとは似ても似つかず、所詮御運の末なるか、いたはしや、淺ましやと屠所の歩みで返りしが、天道のひかへつよきいや」といふ白の腹です。

〈かゝる處へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸……

と、愈々首實驗の序曲に這入ります。

〈駕より出るも刀を杖――

松王丸（中車）の病鉢巻も惱ましく、黒裝束の手に持つた松の清絲、羽織の紐が金茶、刀の柄に冴ゐる紫色と立派な扮裝です。

「やかまし、蠅虫奴ら、うぬらの餓鬼のことまで身共が知らうや、勝手次第に連れ歸れ！」と玄蕃（市藏）の赤脛の細い扮裝が長松を無慈悲に扱ふ件は愈よお芝居となつて來ます。

源藏は奥にて小太郎の首を斬り首實驗と山になります。

〈忍びの鍔元くつろげて虛と云はば斬りつけん、實と云はゞ助けんと實にと云はずとも觀客は自然と堅唾を呑み控へるところです。

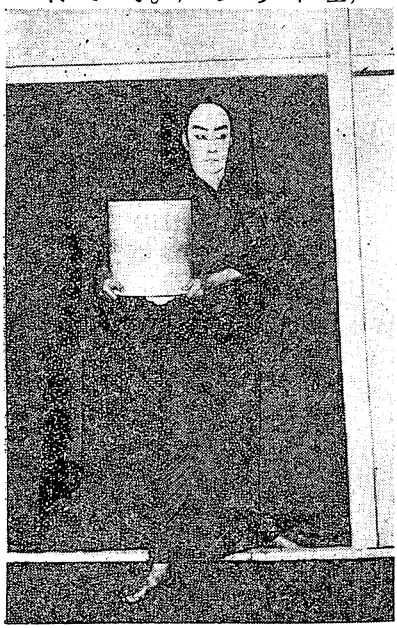
「とく實檢」といふ一言も命がけ、後は十手、向ふは曲者玄蕃です。その瞬間は「時」の歩みが一時に止まつたやうな感じです。

松王丸は駕籠にて玄蕃は首を持つて引上げます。

〈有難や尊やと喜び勇む折からに葛籐は葛籐を生んで、小太郎の母千代がいきせきと迎ひに來ます。醉うた振してやり過し、斬らんとすれば我子の文庫でうけとめて「得心なりやこそ經帷子に六文字」と何人の御内證を聞く時、松王丸は忍び姿にて出で、扇子を投げ込みます。

「梅はとび櫻はかるゝ世の中になにとて松のつれなかるらん」と源藏が讀んでゐるとき松王丸は「女房喜べ忰はお役に立つたやい――」とお芝居を片附けて終ひます。

これから御臺所（莚女）などが現れて野邊送りになります。源藏夫婦が「野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、われ〳〵夫婦が變らん」と云ふを、松王丸は「いや〳〵それは我子にあらず、菅秀才の亡骸をお供申す……」といふ小さな理屈はちよつと涙をさそはせます。



鷹治郎の武部源藏

〈御臺若君諸共に、しやくり上たる御涙、冥土の旅へ寺入りの師匠は彌陀佛釋迦無二佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろはかくり、子はあへなくも、ちりぬる命是非もなや、……

――幕――

この名文句と三絃の哀調の中に幕が閉されます。歌舞伎の世界に「身代り」や「首實檢」の芝居は澤山とありますが、歌舞伎劇の舞臺構成の總ゆる要素をもつてゐるのはこの寺子屋であらうかと思ひます。

顔見世と芝居興行

落合浪雄

京都南座の顔見世興行は芝居の方の年中行事こいふより京都の民衆生活の年中行事の最大の一つであらう。

都踊に行くより葵祭を見るより、此芝居一つの爲めにごれ程多くの人々が慰められ勵まされ而して騷がせられる事であらう、丁度一年の仕事を終つてこれから冬籠りこいふ、一年での休養の爲めの時でもあるし、一年に唯一度の大芝居である爲め、顔見世から次の顔見世までそればかりを樂しみにして居る人々の數が非常に多いこ聞いて居る。

俳優は誰々に限らない、狂言は何々に限らない、如何なる人も一年に一度であるばかりでなく顔見世こいふ憧憬なり尊敬に引込まれて、吾から芝居國の中に降服して經つて而して架空の事實、虛誕な結構、夢幻の世界に同化して、而して泣きつ笑ひつ一年の樂みを貪るのではあるまいか。

京都南座が斯の如き條件の下に顔見世興行こして東西の名優こ名狂言を蒐めるのであるから、興行の日數が悉く割れ返へる程の滿員を見る事は殆ご當然である、のみならず、東京に居てさゑ京都の顔見世こ聞くこ何にも知らずに一種の憧憬を感じ、何か違つた氣分が味へるかの樣に感じられるのである。

芝居の興行は斯く行き度い、必ず多くの觀客を集め得て經濟的に相當の收益を見得るこなるこ、仕込にも十分の奮發が出來るそれで又更に興行の實質が價値づけられ、觀集は更に多きを增す。

處が道頓堀でも、東京の各座でも全く左樣は行き兼ねる

しい、それを何故かこいへば、一言にして一年一度の顔見世と定打の毎月芝居とは違ふ、それに違ない、それだのに少しも違つた興行法を用ゐて居ないのは如何いふ譯であるか、鴈治郎なり幸四郎なり梅幸なりが集まれば何時だつてこの顔見世と同じやり方ではないか。

顔見世は忘年會の御馳走であらう、照燒もいゝ、口取も好い、極く舊式の狂言でも見古した所作のあるのも好い、口取照燒にもお極まりのお椀にも一年に一度の御馳走であるから興味も感じられる食味もそゝられる、けれども毎月毎日の興行にそれをお膳立が同じでは困るではないか。

私は切に思ふ、どうか芝居を毎日食べる米の飯にして貰ひ度い、大阪中の人、東京中の人が芝居をその實生活の一つの要素となる樣、變り目毎に是非芝居を見る樣にして貰ひ度いどうしても見ずには居られない樣にして貰ひ度い。

待ちこがれて羽織袴で行く忘年會でなく、一寸這入る食堂の樣に、通り懸りでも、散歩の歸り途にでも、ちよつと這入らずには居られぬ樣にして貰ひ度い。

それは何人もが是非喰べ度い御馳走、そして手輕な料金、換言すればもつと各人の生活に卽した狂言、或は各人の渴望する興味、煩悶する問題を、要求する慰藉を解決し若くは提供し、各人と共に笑ひ、共に泣く狂言を見せる事だと思ふ。

戻橋も結構、寺子屋も結構であるが、それに私達がどれ程の感興を持ち得るかといふ事である、誰のより誰の松王が好いとか戻り橋はこの二人より外にはないとかいふ事の外に何等の興味が起らない狂言を、米の飯には出來ない。

顔見世は忘年會の御馳走である、これで結構である、が私は平常の米の飯にもつと喰い度いものを出して貰ひ度い、芝居は骨董品でなく生活必要品でありたいと思ふからである。

羽衣

常盤津連中
長唄連中

楳茂都陸平氏振附

天津乙女　中村福助
漁師伯了　中村魁車
船頭　三保松　中村政治郎
松竹樂劇部女生徒共演

〈風早の三保の浦を漕ぐ舟の浦人さわぐ涙路かな。空晴渡る朝風の日和長閑と浦人が、ト切つて落すと正面の舟に伯了と三保松がのつて居る。

〈波路はるかに見渡せば四方の景色も遠ちこちの漁し戻りの磯づたひ。

春の海原氣も晴れ渡り眺め吉野の花にもまさる富士の高嶺につもる雪とけて根方へ流れの夫が清きいさごの清見潟釣せでかへり行く船に靜けき波に三保の松。

〈見やるあなたの松が枝に香薫じてうるわしき伯了ふしん晴れやらず。

伯了。ウム、この松が枝に美くしい物がかゝつてゐる。三保松一體これは何んであらふな。

三保松。成程これは妙ぢや。鳳凰とやら言ふ鳥の羽がへに似てゐるな。

伯了。大方これは唐から飛んで來たのであらふ。

三保松。なんであらふとけふの獲物ぢや。

伯了。イザ取りて我家へかへらん。

〈松も昔の友なりとよつて綠のこぼれ葉や。ト伯了指圖して三保松よつて取つて持つて行かふとする。

乙女。のう〳〵その衣はわらわの物ぞや、かへさせ給へ〳〵何とて召され候ぞ。

〈吹く春風にさそひ　る姿な三保の松原や露に裾をかゝせどもまた白妙の富士の都。

ト乙女前ジテの拵へにて花道より出る。

伯了。そんなら、こなたが、この羽衣の樣な物を松へ掛けたか、一體そなたは。

三保松。如何なる人ぞ。

乙女。妾こそ

〈雲井に遊ぶ天乙女たゞしき身には神かけて

誠の外に岩波のよせるをいとひ歸へる波。

乙女。それは天人の羽衣ぞて。たやすく人間に與ふべき物にあらず、元の如くに置き給へ。

伯了。そんならこなたは天人か、さもあらばあれ來世の奇特にとゞめ置き、國の寶にする心。

乙女。のう悲しやなあ、羽衣なくては飛行の道も絶ゑ、天上に歸へる事も叶ふまじ

〈今はさながら天人も羽根なき鳥のかひ

〈あがらんとすれば翅なく。

〈地にまだ住めば下界なり。

〈力及ばず泡方も涙の露の玉かつら。

〈かざしの花もしほ〳〵と五襄の姿月の光に見ゑて憂身の淺ましや露の玉ちるばかりなり。

伯了。イヤこれは氣の毒、それでは返して進ぜる程に、かれて聞及ぶ天人の舞をやらを、見せて下さい。

乙女。アラ嬉しや扨は天上へ歸らん事を得たり、さりながら衣無うては叶ふまじ

伯了。イヤ〳〵此衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに。

三保松。天上へ登るのであらう。

乙女。イヤ疑ひは人間にあり、天に儘はり無きものを。

〈アラ恥かしやさらばとて羽衣返し與ふれば。

伯了。それでは返してやる程に。

三保松。早く舞曲を見せて下され。

乙女。此處で支度も恥かしや、幸ひこれなる松かげへ。

〈イデヤ急がん仕度をと此方へこそ入りにける。(ト下手へ這入る)

伯了なんと三保松、此うらゝかな晴模樣。

三保松。ほんに天人ならぬおら達も。

〈今日の追手に出船の仕度あげた白帆はそよ〳〵風がいつか變つて難風によせる高浪山程上る浮世は風まかせ

〈浪にゆられて群れ入る島は沖のかもめかむら千鳥むすぶ愛さへよいおゝたれゆきて戻るか戻るは憂ゝね。

ト是にて子供大勢出る。

〈三保の浦邊による。女浪男浪の音ドウ〳〵と大波小波風よ吹け〳〵松吹く風に落葉ひら〳〵ひら〳〵。

〈青い松葉に砂しろ〳〵と富士のお山が遠さにうつる寫す景色も眞帆片帆ヤレサ目出度やな。

ト踊り狂ふて三保松と共に子供皆々は入る天人出る。

〈思ひは胸に打よする河の皷のそれならで虛空のひゞき音樂に。

〈しばし止めん羽衣の妙なる神に浦人がすがる甲斐なき三保が原。

伯了。ヤア〳〵〳〵羽衣を返したので、もふ人間の手に戻らぬか。

〈折しもおこるはやてにつれさつ〳〵どふ〳〵物すごし。

伯了。ヤア〳〵こりや長居してはこつちも空へ舞上らふ。

長居は恐れと伯了はあきれあわてゝ。

トよろしき合方にて伯了面白き振りあつて這入る洋樂になり。

〈折しも五色の雲起りむかふる天津乙女の群。

〈衣をかへし袖を振り花があらぬかひら〳〵〳〵〳〵。

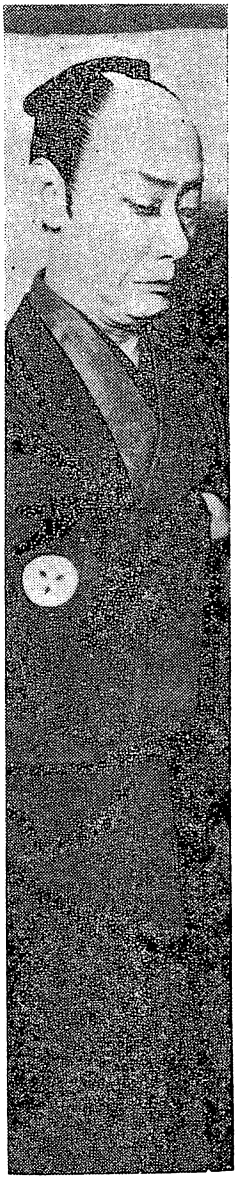
と迎ひ天人大勢にて舞ふ。舞臺は空の背景となり天人宙乘りになりて舞ふ。

〈松に其名や殘すらん。

ト一同よろしく舞ひながら。(幕)

毛谷村について

高原慶三



「曽原」寺子屋
藏源郎武の原治

「彦山權現誓助劍」は天明六年十月十八日、竹本千太郎座に上演された十一段物、作者は梅野下風、近松保藏、初演の主なる語場は、序の切住吉社頭の場が咲太夫、五ッ目吉岡一味齋の場が麓太夫、七ッ目小栗栖の場が政太夫、九ッ目毛谷村六助内の場が内匠太夫である。

當今では、人形でも歌舞伎でもほとんど、この九ッ目毛谷村の場だけが、度々上演されるに止つてゐるから、丸本全体の筋を知つてゐる人は尠からうと思ふ老婆心から大体の筋をお話し申さう。

もと〳〵宮本武藏が佐々木巖柳の仇討を仕組むだものだから場所も豐後にとつてあるのだが、丸本の上では豐太閤の朝鮮征伐（但し淨瑠璃式に眞柴久吉の三韓征伐となつてゐる）を時代的背景にして毛利元就が郡音成となつたり、加藤清正の正清や、京極内匠が明智光秀の遺孤となつてゐるやうなのは例によつて淨瑠璃作者の定式である。

中國の大主郡音成家では三韓出陣の大役を仰付かつて祝宴の中、郡家の武道師範吉岡一味齋の娘である腰元お菊に戀をしてゐるのが京極内匠、だがお菊は近習衣川彌三郎と戀中なのたから諾いわぬ。その上御前試合の遺恨も加はつて内匠は一味齋を暗討にした。それがために吉岡家は斷絶したが、お園お菊の姉妹は父の仇討のお許しが出た。そ

のうちにお菊は返り討になり、お園は辻君や虚無僧姿にやつして、母とお菊の片身の彌三松を抱いて諸國を流浪するうちに、彦山の麓毛谷村で途つた六助こそ一味齋より八重垣流の奥儀を許され、お園の許婚となる人なのであつた。ところが一味齋の敵こそ、六助が先程、孝行と見せて憐を請ふたがために御前試合で勝を讓つて小倉の高浪家に五百石で仕官させた微塵彈正なのである。そこで再試合の後、天晴れ譽を得た六助は久吉御前の相摸で卅人を薙倒して目出度くお園と彌三松の助太刀して一味齋の仇を討つといふのが本筋で、その間に挿話として、明智の遺臣四方田但馬が三韓人木曾官に化け込むで久吉に仇を報ひやうとして事就らず、亦内匠が小栗栖で光秀が陣歿した池畔で小田家の寶劍蛙丸を目つけ出すといふやうな筋もからんでゐる。主人公の六助が天下無類の劍客なら、女主人公のお園もこれに劣らぬ女武道、

こりや盗人めと、つかみかゝるを寄つけず、振廻したる尺八のたけた手利にぶうぶう共、眉間肩先脇骨脊骨、ぶちのめされてちりぐに、我われ先きに逃歸る。

と、女に稀な武勇傳を發揮してゐる。今日の大向ふなら「女澤正！」と來るところだ。

この梅野下風といふ作者についてはわづかにこの他に「比良岳雪見陣立」「比良御陣雪升形」「安德天皇兵器賣」「廊景色雪茶會」の四作にしか作者名を署名してゐないが、その四作が今日傳はらず甚だ朦朧たるものであるが、それらの題名について見ると、どうも武道物、軍記物を得意とした人らしい。この時代、天明五、六、七年に前後して「伽羅先代萩」や「碁盤太平記白石噺」のやうな女武道や、女敵討物が東西に續出してゐるが、或は女をむやみに强くして見るやうな變態的な思潮が當時の作者輩の頭を、世紀末的に支配したのではあるまいか。

なるほど、虚無僧姿で押かけ嫁に來るところは、加古川本藏がやはり虚無僧姿で娘の小浪を大星に押賣りに來るのと、同巧異曲なのだが、「忠臣藏九段目」は調子が高い點は桁ちがひ末期の作者の及ぶところでない。、がお園の方は

テモまア天晴よい殿御、まあ何より落ついた、イヤ〳〵まだ落つかれぬことがあるわいの、いやお前さまは女房さまがござりますかい……ないかへ〳〵、ヲヽ嬉しや、それでほんまに落ついた、コレイナアお前の女房は私ぢやぞい、サア女房ぢや〳〵

と、余程、露骨でゆき過ぎてゐる。それでゐて

二十の上を越しながら、眉をそのまゝいかるを、鐵漿も含まぬ恥しさ

と、おぼこ娘らしさをいつてゐる。一寸の氣味のわるい、類

のない女性である。この變態なこころが、人形ではモウ一つポンと打込めない、そこでこの變態的な興味のために當時の歌舞伎役者が如何にこのお園にぞつこん打込むだこことだらうか。

それに天明以後、寛政享和時代となると、人形が歌舞伎に壓倒されて、上方では七世片岡仁左衛門、二世嵐吉三郎、三世中村歌右衛門の三名優鼎立時代の黄金期で勢何がな人形淨瑠璃の滋養分を歌舞伎に攝取して自分の血と化し肉と化した時代なのだから、このお園は當時にあつて歌舞伎役者が演出上の好適のモチーフとならざるを得ない。そのうちでもお園によつて後世に範を垂れる傑作を殘したのが、三世中村歌右衛門なのであつた。

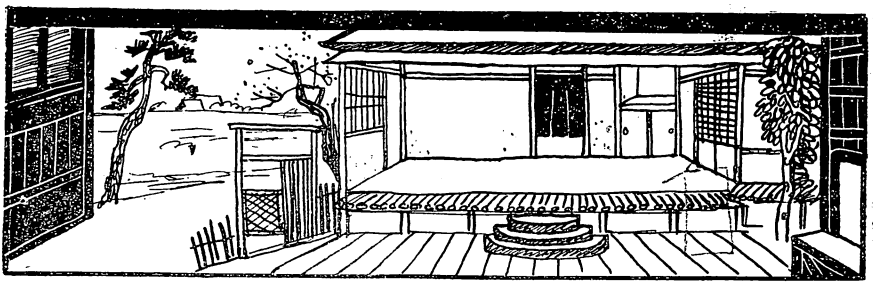
今日口傳、記錄に殘された歌右衛門のお園の型の特殊なものとして、六助に見惚れる間に、庭にある米搗臼に突當つて片手で取りのけるやうなシグサはお園の大力を說明してゐるのである。亦七代目團十郎の六助、二世中村富十郎のお園もすつかり歌右衛門に據つたのだそうだが、その富十郎のお園を「役者大全」の似顔繪で見ると、茶筌のやうに下げた髪を後に束ねて、島田に結つてゐるが、茶筌は虛無僧姿に囚はれた變痴奇論だが、これを更に島田に結つたのは凝つては思案に能はぬ類で、虛無僧姿に島田なればこそ、そこに歌舞伎味の色氣も出てくるもの、今の梅幸もこの髪に結つたと故杉膺阿彌老はいつてゐる。

上方で、富十郎に次ぐ天保期の女形中山南枝は勝山に結つたそうだが、遊女めいて大不評、その上にこの人、根が色氣タップリの人なので當時の評判記にも「女の情に深いゆゑ、かゝる役はぢやらつき」て「惡し」といふことであつた。

梅枝の中村歌六はサワリの間にも、シツコク忍びの侍二人をからませて立廻りをやつたといふことだが、これは少し珍型で御免を蒙りたいものである。

こにもかくにも、當時の女形たちが如何にこのお園に對して演出上の野心をそゝつたか、これらの口傳記錄に明かであらう

こんごの顔見世では誰がどんな演出でやるか、それが何よりの見物である。



物語芝居

彦山權現誓助劍

黎夢生

長州藩の武藝師範に吉岡一味齋といふ人があつたが、試合の遺恨から同藩の微塵流の達人で京極内匠といふ者に或夜闇討に會つて、殺された。それが不覺となつて、お家は改易、一家は敵を尋ねて行方定めぬ旅路を放浪する事になつた。一味齋にはお園、お雪と呼ぶ二人の娘がある、お園は豐前毛谷村に居る、六助といふ者と許婚、お雪は他に嫁いで彌之松といふ子供がある、その内に姉妹は敵にめぐり合つたが、殘念にもお雪は返り討に合ひ、お園も彌之松を見失つて一人になつてしまつた。

一方京極内匠は吉岡一味齋を討つて鄕里を逐轉なし、其後お園お雪に出合つて、又お雪をば返り討ちにしたが、此儘では何時自分の身が危いかも知れないので、變名でもして何處かへ仕官なせば、結句日本國中を逃げ廻らなくともその方が安隱だと、やつて來たのが豐前の小倉の城下。此處では何かいゝ仕官の道もがなと城下を彼方此方とほつゝき廻る内、ふと建てられてある高札が目についた、見れば武術一藝に達したものは五百石を以て召抱へるといふ事、並にそれには八重垣流の達人で毛谷村六助と立合ひなし、勝たればならぬといふ事、城主の御言達である、聞けばその六助といふのは非常に孝心厚く、且仁俠に富んだ男だといふので内匠は我事なれりとばかり喜んだ。

生來狡猾な彼は微塵彈正と變名して早速その足で毛谷村の六助の住居を訪れたのである。自分は一人の老母に孝養を盡したいが祿に離れ誠に難澁しております、聞けば貴殿は御仁惠の厚き方と承り是非自分の方に勝を讓つて頂き度い、武士たる者が此の樣な不甲斐ない事を申すも、皆これ孝養を盡したい爲、何卒この儀御聞き入れ下さいと、口から出鱈目、頭をぺこ〳〵

下げてひたすら頼みこんだ。で、正直な六助はこれを眞實に受けて、遂に勝を讓つてやる事になつた。それなれば試合の場所も城内でなしに、私の家でやりませうといふ事になつて、見分の役には曾平太、軍八といふ二人の武士がやつて來た。

愈々立合つた六助はやがて、彈正の方に態と勝を讓つた。それればかりでなく彈正は卑怯にも六助の額に傷をつける、曾平太や軍八の罵言の内に彈正はあくまでも沈着に、「いやなに、たとへ拙者に負たればとて、決して力を落されな、尙これからが修業の所、隨分油斷なく出精致すがよい——」なんと圖々しい奴もあつたもの、そのまゝ意氣陽々と六助の家を引き上げて行く。

あとに六助は「あゝ誰しも差行はしたいもの、見ず知らずの人なれ共、親御を大切に思ふて、武士たる者の云ひ難い事を打あけて賴ましやつたその實心に對して負て進ぜた今日の立合ひあゝ心であのやうに禮を云ふて歸らしやつた、是れ、決して禮には及ばぬぞや、母御の存命の内に、隨分差行にさんせや、俺がやうに死別れてといふものは、何をしたとて何んにもならぬ必ず大切にさつしやれや」と人の好い六助は、蔭で赤い舌を出してゐるとも知らずにしきりに彈正の事を感心してゐる。

六助が試合に負たといふ事がパット知れ渡るといふと、村人達が納まらない、早速五六人どや〳〵とやつて來た、「六助どん内にゐるか、へしやげたわい〳〵」「これ六助どん、わしらの鼻をようへしやげてくれたのふ」と喚き立てた、「六助どんお前が試合に負たによつて、奴共が高札を引き拔いて行つたぞや」「ハ——そりやあつちが勝手に持つていんだものであらうそれがどうぞしたかへ」「いやそればかりではないわい、その奴共めが、アー六助といふ奴はほげたとはきつい違いちや、ぶたれた時のあの態のいじらしい事といふたら、大方今頃は骨がくだけてゐるであらう」「まだこんな事を吐しおつた、大方今頃は泣き〳〵頭のかげでもさがしてゐる事だらうと！——六助どん、ほんとかいのう〳〵」と村人達が口々に六助を口說き立てる。「いやそりや嘘ぢや、殿樣の御意故、勝負せうといふて來たが、此處で立合ふては晴立たぬ、殿樣の云ひつけなら御前がよい、小倉から御召しになつたら何時でも行つて勝負しませうといふて追ひ返したが、大方それを腹立てゝ惡ふ云ふたものであらうぞい」と六助は村人達に事實を明かさない、「フウそうかいの、それにまたその額の疵はな」と指差されて「是は……是はアーそれ、……」「どうじやいのふ〳〵」村人達の追究は仲々鋭い「おゝそうぢや、コリヤアー着物を裏に干しに出た時アレアー入口の石につまづいて思はず知らず竹垣ですり破つてのけたのじや」苦しい嘘も血に染みし額をおさへて云ひくるめる六助の詞に「そんならこなさん負やせんかの」「おゝ負やせぬ〳〵」「負ればよいわい、どうやらこれでおちついた」とやつとそれを信じた村人達はいそ〳〵として歸つて行く。あと見

送つて六助が「たとへ一ト手でも教へてやれば師匠ぢやと思ふてあのやうに案じてくれる、だが、たとへあの人達に愛想つかされようとも人の爲にならいとひはせぬ、併し得心づくでとは云ひながら、負たと思ふと急にかつくりとして、どうやら腹まで力なくなつて來た、おゝそうでや、昨日庄屋どのから貰ふたぼた餅皇が引かずば矢ッ張りそのまゝあるであらう、ドレ孤子どのにも早ふ戻らしやれ、怪俄せまいぞや、崖へなぞおちまいぞや、これは又何處に行かれた、孤子どのや。おゝそうぢや折角戻つた所であのぼた餅がなくば手持無沙汰、ドレあるか無いか見ておきませう。」

と納戸へは入つて行く。

此時旅の形りで一人の老母六助の住居の門口まで來て、ふと干されてある四ッ身の小袖に目をつけて、何か頻りに考へてゐるが、何思つたか、「ハイどなたぞ、お願ひ申します」と案内を乞ふと、その聲に納戸より出て來た六助「おゝ見ればお年寄りの旅のお女中何ぞ用事で厶んすかい」と聞けば「イヤ、わしらは諸國の大社へ、一七日づゝ參籠いたす旅のもの、通りがかつて此の家の軒、今宵一ッ宿、おやどの御無心」「なるほど、留めて進ぜたいが、獨り旅は所の法度、暫しの御休息なら御勝手しだい……」「左樣ならば御めんなされて下さりませ」とちりを拂うて彼の老婆、上にあがつてゐろりの側に進む、六助はそばをゐろりにくべてもてなす。稍して老母は「時に御亭主、見れば御内室も見ぬず、獨り暮しのやうで御座るの」變な事を聞く人だと思つたが「少々仔細あつて獨り住まい、又一人の母もありましたが、近頃相果てられまして今ではほんのやもめ暮し、」「それはまア〳〵不自由に、御座らう、何とものは相談とやら、いつそ、この婆と親子になりやらぬか」六助は何んだか氣味が悪くなつて來た。「ハ……座興も旅の憂さ晴し、テモ氣の輕いお年寄りではあるわいのふ」と冗談にして受け流してゐると「いや座興じや御座らぬ、眞實親子になりまする」とあくまで眞面目にいふから「そりや又、どういふ譯で」と問ひ返せば「さればいのふ、私も子といふものはなし、人そうなによつて、親にならない、親に持つて下さらぬか」愈々六助は驚いた、「めつそうな事をいふ人ぢや、今始めて逢ふて、まだ氣も知れぬお人、應といふて約束もしられまいわい」「サアそこが相談、得心の親子となれば」「胸の底意を打明けてといふ事か」とキッぱり云へば「どうなと、當座の手土産に母が一ト品エイッ」トや庭に老母は六助目がけて金包みを投げつける、ハッシと六助は受け留めて「ハテなア……何か樣子は知らねども仔細を聞いても犯さぬ魂、大事は云はぬ口は壁に、耳を揃へて此のまゝ返濟」と又その金包みを打返す、老母もそれをパッと受留め「受け戻したは修業者の我が手の内を試して」子「よりも親の軍學に勝れしためしも昔より、親とあがむか子と呼ばれるか、二ッ返事は後方までに見苦しけれども奥の一ト間で、

ゆるりと休息、旅の御老母、サアお出でなされませ」と互ひに心の奥底をさぐり合ひながら老母は破れ障子を引き立て奥へ這入つてしまふ。

跡、六助佛壇に向ひ、

「申し母者人、如才ぢやムんせぬぞや、必ずおこつて下さるなや」と位牌に合掌する、そして一心不亂に鉦を打ち鳴らす、その音に誘はれるやうに歸つて來る稚子が、亡き母を慕ふ如く、道ばたの小石をば拾ひては積み上げる、それが崩れると泣き出す今目前に褰の河原を見るやうに思つた六助はたまりかねてそのまゝ馳りおりて行つて稚子を抱き上げ、

「やア孤子どの戻らしやつたか」と頬ずりすれば「これおぢさま、かゝさまは、なぜござらぬぞいのふ、母さまがほしい、たづれて下されやーー」と又泣き出す「おゝ尤もぢやゝ、どうぞして逢はしてやりたけれど、そなたをあづけて死なしやつたお人は只の一言も得云はず、ほいない最後。俺は何處の誰の悴かは知られどもいたいげにしほらしい、おぢさまゝと俺を追ひ廻すもの、憎まうとて、これがまアどふ憎まれるものかおゝ可愛やゝ」と抱きしめゝして、太皷を取り出し、遊ばせやうとすれば、「イヤゝ太皷はいやじやゝわしはもうれむたいわいのふ」とむづかる「そんならおぢが寢さしてやらう」と二枚屏風のうちらへ寢かしてやる。

瞥竹音もさへて、吹きくらくなる、虚無僧が今六助の住居の表てに佇んだ。そして梅の枝にかけある、以前の小袖を見て「ハテ合點の行かぬ、爰にほしてある此の小袖、たしかに見覺へのある……」と考へ込む時に彈正の手先に使はれる端下共、三四人、虚無僧のうしろに窺ひよる、今しも手をさしのべてそれをとらんとすると矢庭に虚無僧に摑みかゝつた、今まで男と思つた虚無僧は男にあらず、これは一味齋の息女お園である。荒くれ男三四人を譯もなく手玉にとつて投げ飛ばした、物音にさき程より此の有樣を見てゐた六助「見れば賣僧の贋虚無僧、余ッ程味をやりおるわい」そのなじる詞を聞きとがめてお園は「ナニ僞虚無僧の賣僧とは」と「ハテ捉に違ふた身の廻り、第一宗門の姿で喧嘩口論ならぬはず、又常人が理不盡を云ひかけても隨分如法に濟ませよと本山からの戒めではないか、其上尺八の本手は吹かず、今時はやるざつな手を吹きあるくからは、贋物と云つたが誤りか、山賤はしてゐてもそれ程の事は知つてゐる、何うでムんす梵論字どの」云ふ詞に一くせあると知つたお園は「チゝその返答してくれよう」とずうとはいるなり仕込みし短刀拔き放し、「家來の敵、覺悟しや」と矢庭に切つてかかつた、「何に敵と呼ばるる覺はないぞ」とグソト引摑んだ手を突き放せば、「ヤア覺ないとは卑怯ぞや、杉坂の邊で五十有余の侍を手にかけ路金は勿論妹が忘れがたみの稚子まで、奪ひ取つたる山賊め」と尚も鋭く突き掛る、此時寢てゐる稚子が飛び出して來て、

「やアおばさまか」と抱ついたのでお園も不審に思ひだん〳〵譯を聞いて見れば、自分が凝つたは誤り、その譯は六助が母親の墓參りからの歸り途、杉坂の所で五十斗りの侍を二三人の盜人が寄つてなぶり殺し見るに見かれて片ッぱしから打ちのめし、侍を介抱すれど物は得云はず側にゐた稚子を指さし伏し拜んだまゝ絶命、詮方なしにその子を連れ戻り、子供の衣類を門口につるして居けば又其内にはその由緣を知るまいものでもないと思ふた事が通じたか」と語る六助の言葉にお園も不審は晴れ名を聞けば毛谷村の六助ちやといふ、聞いたお園は二度恟り「にゝそんなら私やお前の女房でムんす」と突然こんな事を聞いた六助は合點行かず、「ハイ〳〵女房ちや〳〵〳〵女房でムんす……」と獨りほだ〳〵喜ぶお園、六助は「さんと譯が判らぬ今日程けぶな日はない、見ず知らずの人から親にならうの女房ちやのと、一体こなさんは誰じや」と問はれて俄かに行儀改めたお園「ホゝゝ私とした事が、云ふべき事もあとやさき……」とこれからお園は父一味齋の横死の事から、生前毛谷村六助と自分との許婚の事を細々と物語つたので、六助も不意の出來事に只呆然とする外なかつた。「それにしても敵京極内匠の有所は知れずハテ困つた……」と困じ果てゝゐる所へ以前の老母が出て來れば、それがお園の母親、一味齋の内室と判り、こゝに完全に三人は夫婦親子の堅めをしたのである。

急に表が騷がしくなつたので見ると、村人達が戸板に老母の死體を乘せ擔ぎ込んで來た、聞けば廿三日の事仙の斧右衛門といふ者の姿が行衛知れずになつた、その後村中總出で搜すうちやう〳〵杉坂の大橋の下で見つけたけれどこのやうに絹づくめの着物を着せられむごう殺されてゐたといふのである、それをじいつと聞いてゐる六助はふと思ひ當る事があるらしく村人達に敵を討つてやる事を約して歸らし、「さては仙が母をたぶらかし己れが母と僞りて孝行こかし、六助を深い所へやりおつたな、チエッ思へば〳〵腹立しや、卑怯みじん京極内匠おのれこのまゝおくべきか……」ハッタと睨んだその眼は怒りに燃へてゐる。

側から老母も「イヤ〳〵聟どの、待つてたもれ、こなたが腹立てさつしやる相手の苗字はみじんとや……」「いかにも己が流儀をそのまゝに氏となしたる微塵彈正」「フウナニその流儀の名がみじんとな……。して〳〵その者の年配は……」「さよう年頃は卅二三、至極の骨柄――」と彈正の人相を話せば「さてこそ〳〵」と懷中より取り出したる繪姿「妹に尋れて國を出立の其の砌り書かせておいたこの繪姿……」とお園が言葉に老母も「まだその上に娘が死がひの傍にありしとて、小栗柄村にて友平が後日の證據と渉したる、此の臍の緒、永祿九年の產れとある月日くれば三十四才」「親の敵、妹の仇、恨みを晴らすは今此時……」と母娘が喜び勇んで馳け出さんとする。六助止めて、「二人とも待つた、慥に夫れと知れたれば六助の爲

にも師匠の仇、コレ氣づかいせまい、敵は討たすが眞劍勝負、その先きに木太刀で試合の意趣返し、打つて〳〵打のめし、申受けての敵討、お袋、女房、イザそれ……」と共に馳け出さんとする時に稚子ん「これおちさん、坊やにも敵討をさしてヤア」と取縋る。「おゝ出來した、流石一味齋どの、初孫、かしこい〳〵おゝ強い〳〵、どりや行かうか」とひらりと庭へ一足とび老母は「コレ〳〵聟殿、輕き相手とあなどつて必ず不覺を取るまいぞ」「そうとも〳〵だますに手なし、油斷めさるな、こちの人」と氣遣へば「なにさ〳〵氣遣ひ無用、僞孝行にたぶらかし負てやつたるうじ虫め、たばかり取つた五百石、抱へられた我が情、却つてこれを繼しはもつけの幸び、塞翁が味ふ出合ふた妻姑、恨は共に六助が、天地に走る義の一字たとへ鬼神となればとて、おのれ京極我が見る目からは一トつまみ、併して御知行頂く内は、殿の御家人、理不盡には討取りがたし、微塵彈正と試合を願ひ、勝つた上は直に仇討御免の祈願して首押へてお、討たす〳〵こりや坊にも討たしてやるぞよ。……」

實にも鋭き魂と見極めおいた吉岡一味齋の眼力違わず、その男らしき振舞にお園も勇み立ち、咲き亂れたる紅梅の花一枝を折り取り、「のう〳〵我つま、梶原源太景季は平家の陣へ切り入つて譽を上し籠の梅、是は敵の京極に勝色見する此花の可愛い殿御へことぶきを、」とその一枝を六助に渡せば母親も椿の枝を折りとりて本望とげしその上で、直に八千代の玉椿、變らぬ色の花聟どの、祝ふて母が參らうぞ」と一枝を渡す、「ハヽッ此上は片時も早くイザ……」と此處に三人は勇ましく門出をしたのである。

やがて小倉の城下で六助の助太刀でお園は目出度く仇討本懷を遂げ、稚子彌三松は小倉城へ、しかして六助とお園は幾千代かけて……。

終

◇彦山權現誓助劍に就て

この毛谷村六助の仇討物語は脚色したのは、天明六年十月大阪竹本千太郎座に上演の操淨瑠璃「彦山權現誓助劍」である。作者は梅野下風、近松保藏で、これは「鎭西御軍記」などの實錄本に據つたものであるが、あの一説によると毛谷村六助のことは宮本武藏の物語から趣向した全く虛構の物語りであると云はれてゐる。江戸の劇場に始めて上演されたのは寛政八年夏、都座で毛谷村六助(八百藏)お園(のしほ)京極内匠(仁左衛門)奴友平(仲藏)。その秋に河原崎座でも上演、六助(簑助)内匠(高麗藏)。同時に桐座でも上演六助(宗十郎)お園(菊之丞)内匠(新藏)で各れも大當りであつたと傳へられてゐる。

この度の上演は幾年振りで、幸四郎の六助、梅幸のお園で兩人の出し物である。特に鴈治郎が斧右衛門といふ輕い役所で氣を吐いてゐる。

鴈治郎と新作品

附『あじろ舟』のこと

山上貞一

戻橋

綱渡の邸四幸

新作品の上演に際して問題視されることは何れにしても興行上反響があり、時には民衆心理に對する誘引の宣傳ともなつて、興行主なり俳優なり作家に執つてはいることには違ひないが、多くの場合、その問題には一上一下善惡があつて少くとも愉快な問題であるのだが、大阪に於ける鴈治郎の新作上演の場合は批評が常に同じことであつて、はては劇評家の人達は「鴈治郎に新作を封じやう」とさへ言つてゐる。それにも拘らず鴈治郎はあの老體をいとはず新研究に苦心を重ねて次々と新作を上演してゐる。一般觀客は新作の善惡を批判することほど狹心なものではないらしくその前後に配在された所謂玩辭樓十二曲の繰返しに十二分に滿足をしてゐるものの如くである。

それほど鴈治郎の藝術にはリアリズムを超越した偉大な傳統的な藝術がある。何を苦しんで新作品に手を染めるのか。

そこには時代に遲れまいとする努力がある。ゆくとして可ならざるなき彼の藝術慾が他の動きを座視さしては置かない。そこで新作上演となる。作家は今日まで主に渡邊霞亭、大森痴雪、高安月郊の諸氏であつた。そして此の人達は言ひ合したやうに玩辭樓十二曲や其他在來鴈治郎が當つて來た歌舞伎劇の主人公の零圍氣や情緒を取入れて新作をされた二番目物が多かつたやうだ。

それを見た觀客達は時には治兵衛であり、忠兵衛である鴈治郎に拍手を送り、劇評家達は愈新作物を封じやうと言つた。鴈治郎のあの熱心なそして徹底的に合點しなければすまされない努力の演出が斯うした矛盾を何故招くのか、今に氷解されないやうだか、愚按するに新作品だからと言つて二番目物に限つたことはないと思ふ。一番目物の時代劇の新作品たとへば、「栗山大膳」あゝしたもので鴈治郎の新作上演の拓けゆくべき道をなぜこうじやうとしないのだらうか。

「あじろ舟」は高安月郊氏の新作である。私は思ふ、最近の鴈治郎の新作上演中では大森痴雪氏の「九十九折」と此の「あじろ舟」は傑作であると。鴈治郎は姿容の優れた人である。その人に理屈を言はせたり、長臺詞を言はせたりすることは無駄だ。「河庄」のあの花道の出が至寶である如く「九十九折」では四條河原の細かい橋上での出逢ひが實にいゝ。「あじろ舟」では最後の幕切に女房には身投をされ、愛する藝妓には自害されたのを見て、衷神した人のやうに花道にかつて、短刀でグザッと立腹を切る。そしてふら〳〵とあてもなく歩み行く姿容は實に鴈治郎にのみ味ふことの出來る至高な藝術である。

鴈治郎は常に情致の人であつて、一種の英雄崇拜主義的なことを演じて、長所を發揮する人である。そこには多分の義俠的行動がなくてはならないし、少からぬ犧牲も拂はねばならぬ。此の演技の最高點を洩れなく取入れられた點でも「あじろ舟」は鴈治郎にとつて絶好の新作品である。

十津川事件といふ、時代も事件も大阪人には——少くとも鴈治郎の觀客である人達には——記憶の明瞭な出來事を背景として、大阪町人が勤王の爲めに獻金をする。中山侍從とか吉村寅太郎といつた歴史上の偉人が一町人の金力に助はれるその愉快さは鴈治郎が演出をすると實によく出る。そうした場合に決して輕薄に流れないのは彼の熱心な演出に據る。新作の意義は此の點だけでも存在する。鴈治郎の得意である純二枚目だけではなく、「あじろ舟」の主人公網代屋津之助には、如上の腹がいる。その腹には大阪町人の誇があり、自我

がいつしかに擡頭しつゝある。此の辛抱役の勝利こいつた愉快さが鴈治郎の演出にのみ求められる點である。

鴈治郎には福助と魁車の名女形が二人まである。それが爲に鴈治郎の新作はどうしても類型的になる恐れはまゝあるがその場合の妻妾に就ては、「あじろ舟」に於ける如く、女房おたねは福助に、藝妓浪江は魁車にと扮してゐる時の方がいかにも自然でよい。これは「心中天の網島」のおさん、小春に於けるよい例がある。

鴈治郎の新作上演は現代流行のリアリズムを追ひつゝも、いつかそれを超越した鴈治郎獨得の傳統的な藝術で成功してゐる場合が多い。吉右衛門の「風鈴蕎麥屋」（岡本綺堂先生作）は役者が作者に喰はれてゐるといふ評に一致してゐたやうだが、それも俳優の立場からいへば上乘なものではない。鴈治郎の場合はそれと反對らしいが、永年の舞臺經驗からいつて決して型にはまつた人でない鴈治郎のためにリアリズムを超越した、卽ち傳統的な名演出を隨所隨時に發揮し得る自由な新作品の現れることを期待して止まない。

本誌の姉妹雜誌

「歌舞伎」毎月定期發刊（一部三十錢）

をせひ御愛讀願ひます

御芝居の事なら

東京は「歌舞伎」

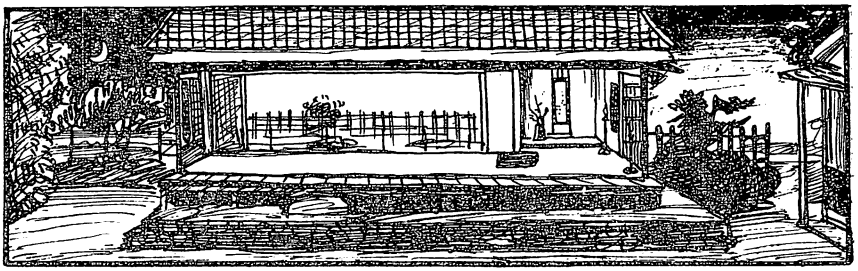
大阪は「中座」

どお決め下さいまし

發行所

歌舞伎は 東京市京橋區木挽町 歌舞伎座內發行所

中座は 大阪南區久左衛門町八 松竹合名社內 中座編輯部



小芝居説

あじろ舟

朝生順三

徳川三百年の幕政に飽いた國民こ、勤王の大義を稱へる憂國の志士こ、日毎に膨湃たる氣分を作つてゆき、密雲漠々こして空を蔽ひ、悲風慘雨まさに到らんこして風樓に滿つるの觀は、幕末を形容するに最も相應しいものであつた

其の侃諤の士の中でも殊に急進派を以て目されてゐる天誅組……。吉村寅太郎、松本憲三郎なぢの一味はいよ〳〵幕府の無爲無策を叱咤し、糾合して將になす所あらんこするが悲しい哉軍資に事を缺いでは何事も意の如く搬ばぬに心を碎いて居る、大阪の地に根據を置いて密々徵發先を物色してゐるうちその白羽の矢を立てられたのは、浪花の長者網代屋津之助であつた。

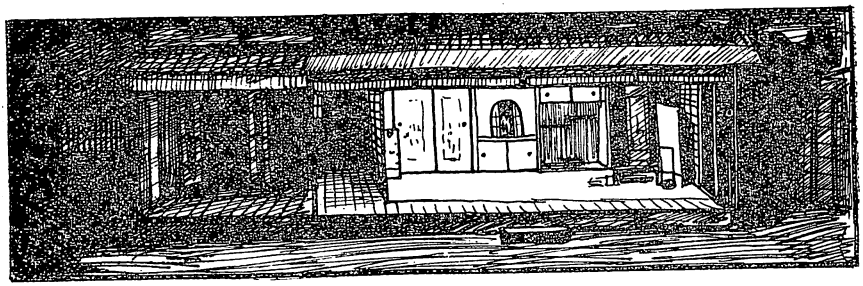
新淸水の浮瀨で津之助を待づ間、名物七人猟々の盃で酒宴が始まつてゐる、身邊の疑視を受けてゐる連中の事こて騷ぎさへ心にあらぬ他愛の限りを盡すのでした。

津之助の狎妓浪江を喚び揃へて待つ吉村等の心根は表面の有樣丈けを眺めては到底おしはかる事も出來ず、寧ろ涙ぐましい迄に感ぜさせられるものがある。

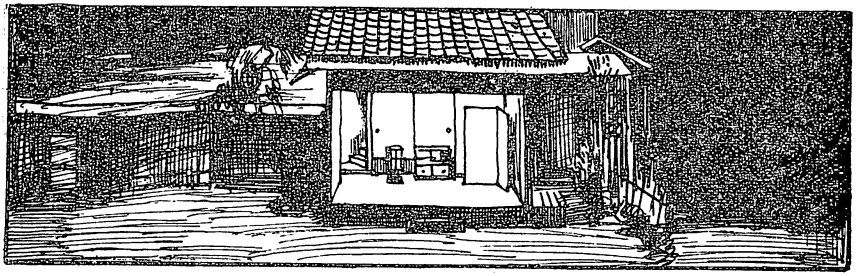
網代屋が來た、吉村は人を拂つてさて向き直り『マアこれを見てくれい』こ出した一幅、こうした懸合には不得手な武骨物、眞向ふからも切り出し兼ねたこ見ゆる。

『是は楠公が御最後の圖、藤本鐵石の筆、題字は中山侍從ぢや』松本は續けて

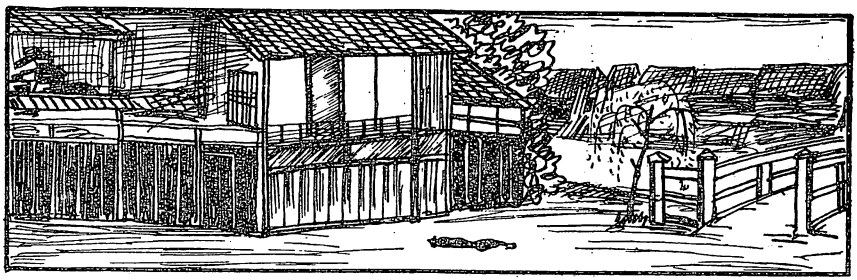
『網代屋なんこ、それを買取つては下さらんか』



『へイ戴いてもよろしうムいますが、お値段の所は、ごの位でムります』
吉村は思ひ入つて
『千兩ぢや』
『エッ千兩！』
『高いと思はれるかも知れんが畫題が楠公、筆者が鐵石、賛が中山ちよつと手に入らぬものぢや』
松本は足らぬ處を償ふつもりか
『千兩は高いやうぢやが、今に二千兩になるのは我等がうけ合ふ、どうぢや思ひ切つて買ひ取つてはくれぬか』
ときつとなる。
津之助は町人ながらも天下の形勢を知つて居る、吉村のさうした申込振りが氣に入らぬのでした。
『吉村樣松本樣お二人とは長い間のおなじみ、侍と町人との差別もない位のおつき合、御心持も知つてゐれば、私の氣性も御存知、なぜもつと有りの儘に打明て下さりません』
とうらみ顔に詰寄るを二人は顔見合せて一言もない。
『二千兩になるからと慾で釣らるゝは餘り見下げたおつしやりよう、算盤の上なら御免を蒙ります、こんなものには十兩も出せませぬ、そんな金錢づくより、お心の底を打ち明けて下さりましたら千兩でも二千兩でも出すまいものでもムりません』
あながちに酒がまわつて來た斗りでもない、大阪町人の金と情とに亡び易い心持を如實に持つてゐる網代屋津之助……青表紙も覗いた男、親代々の商賣では納まらぬ若さ……。



『サア仰有つて下さりませ、此の畫のつゞきをお描きなさるのでムりませうがな』
と圖星をさゝれて兩人は武士も及はぬ此健氣な言葉に寧ろ氣恥しく感じるのでした。
鎌倉以來幾百年爛熟し切つた文華は、三河武士の遺風を消散してしまひ、刀は伊達に佩び、華美の風は滔々として浸潤して來た。あまつさへ結托して廟堂の上に跋扈し、惡政に沒頭して國を危くする臺府の大罪を座視するに不忍いよ〳〵此度大君大和へ御幸を機として中山侍從以下五條に旗を揚げ、京洛には三條中納言、長州では眞木和泉又大阪の地には御駐輦を願つて攘夷を名として討幕せんと勤王の士蹴然として起つた。
『其軍用金の一端に資したい』
と心根見屆けて打明され津之助は眼輝かせつゝ、眉宇に溢れ、
『イヤこりや目のさめるやうなお話、ようお明かし下さりました。千兩でも二千兩でも御用立ていたしませう、町人の分相應、刀の代りに金で投げ出す私の魂が御役に立てば結構此畫はいただくには及びませぬ』
と喜んで徵發に應じるので吉村等は非常に津之助を德とした。
退いた同志も一座して又一トしきり騷がしい、吉村は猩々の謠の一くさりをさも心地よげに
へこの友に逢ふぞうれしき
と時につけての盃をのみほす。始終を立聞いて居つたと見ゆる浪江は皆の立去るを待つてにじり出で
『ゐらい事をお引受けなされましたなあ』
津之助は驚いたが浪江であつた事がせめての幸然し大事を聞かれた以上、心も極めて置かねばならなかつた。



女ながらも大丈夫、戀しい者の志と同化せぬ筈はない。

こうした津之助の留守、網代屋方の離れ座敷では幕府から二千兩の用達を命じて來た爲に隱居の久齋、手代の久八が色々と心を痛めて居る。

津之助とは違つて昔ながらの幕政に馴た久齋は、奉行所からの達しとあらば、何者にもかへ難い大事として居るのは是非もない事であらう。

『津之助は何處へ行つた』

と尋ねられて困る妻や手代にかぶせて

『此頃は附合ひがあぶない近年は浪人共が騷ぎ立てゝ御所の御公卿さんまで乘せる模樣こわい事〳〵町人には何より禁物、御法度を大切に守らにやならぬ』

とかたくな一方、妻は氣もそゞろにこうした時に逢はせてはと

『父さん今夜はもう遲いによつて、お會ひになるのは明日の事になされたらばごうで御座ります』

と云へど、まだ帳面調べて是非會ふて歸るつもりらしい。

幸か不幸か津之助は相當に醉ひしれて戻つて來た。

『吉村とか云ふ人に呼ばれた相ぢやが、よもや土佐の吉村寅太郎ではあるまいな』

『ハ……それは大きな間違ひ、卯平といふ大和の大百姓でございます』

『そうして用事は』

『山をかたに金を貸してほしいとのたつての話』

『イヤ金を貸してはならぬ、こつちに入用があります』

津之助はギックリと驚く。それも幕府からの用命と聞けばごうしても父との間が圓滑に濟まぬ事

を豫知せねばならなかつた。

父が歸つてからはいよ〳〵立つても居ても居られぬ。

『此方も金、彼方も金、江戸へ出さうか、京へ出さうか、明日はごちらの世になるやら、我身さへも……』

こいよ〳〵命の瀬戸を感ずるのです。時は來た、牒し合せた時刻には津之助恩愛をしりぞけて約を果した。

が不運、妻に見こがめられて遂に浪江の爲に貢ぐものこ一時を免れたのでしたがこの一言が後に益々己れを苦しむる種にならう事は神ならぬ身の知り得ない事です。

妻のおたねは大阪の御寮人、つゝまし心の持主でありながらも、こうあつかはれては平靜にもなり兼る、又の日聞き知つた島の内浪江がうちへ訪うて來たのでした。

心そぐはねば言葉も刺々しう女同志が思ひ〳〵の涙ながして……。津之助は來て居らぬこ云はれてしよんぼりおたねは歸つて仕舞つた。

津之助は幕府の用金について家に居られず、此處に身を隱してゐたのでした。

妻の恨みつらみの言葉から、父久齋は家運のこと、妻は夫の日夜の外出からひいて夫婦仲の大事、手代共は金才覺に關して、思ひ〳〵の心配は津之助自身が投じた大きな石の渦紋加ふるに先刻買ふた讀賣版の樣子では悲しい哉十津川の戰は利あらず、もう駄目だこ觀念の眼をこぢた。

手代が再度迎へに來た時にはもう家へは歸らぬこ決心して仕舞ひ、父や妻に宛た手紙を持たせて歸す、無論死を覺悟して居つたのです。

松本から聞けば吉村は悼ましいかな屍を原頭に曝して怨みを千載に殘したこいふ。

樣子を察した浪江も共に死なうこ云ひ出したが家人へ對して面當てがましう情死も出來ず。手紙を見た妻も駈つけて來た、譯がわかつて仕舞へば一圖に夫につかうこする。

『浪江こも別れて仕舞ふた。死ぬる生きるもたゞ一人』

こ聞いておたね咄嗟に決心して川瀬に身を投げる、驚く間もなく。

『あれッ姐さんがッ！』

こ云ふ叫び聲が聞ゆる。……津之助はうつこりこして二階を見上げ、中山侍從より賜つた短刀を月に翳すのでした。

今日の文明を基礎づけられた一重下には幾多のこうした悲しい出來事が敷きこめられて居る事は忘れられない事です。

（をはり）

×

新派は行詰つた。そして今はどん底の苦境に喘いでゐる、そこから吾等は何か新しい道を求めて拓いて行かうとする――とは十一月大阪角座に旗擧げした喜多村緑郎がその最初のステートメント(?)に語つた抱負である。「新派行詰り」の言葉は今更でない、十年程以前から云ひ來つた忌むべき言葉である、その忌むべき「新派行詰り」の自己撞着が今日の苦境を招いたものであることを新派俳優は自覺せよ！

×

劔の鳴る師走の道頓堀、劔劇是非を唱へるものまた野暮の骨頂かなである。見よ！劔劇は黄金時代だ。

×

劔劇なんて嫌なひびきを持つた言葉だなア、これは僕がかつて或劔劇の大立者の口から聞いて言葉である。嫌なひびきと云へば嫌なものにも聞えるが、その種の劇團の特稱としては止むを得ない名稱ではないか、「新派行詰り」の忌むべき自己撞着を繰り返すな。

×

京の顔見世・傳統の顔見世「寒おすえなア」の顔見世が開いた……。

×

鷹治郎の櫻丸、幸四郎の梅王丸、中車の松王丸の「車曳」その舞臺顔の花やかさ、けだし最後の錦繪美でなからうか。

×

鷹治郎の新作世話物はいつの場合も色男役である。しかし「あじろ舟」の鷹治郎は色男役ではあるが、義の爲めに勤王志士に助力する勤王商人を表現する、イヤ御苦勞。

×

大阪の若い劇作家某が、自作の辯解に「これは興行本位」と逃げた。興行本位と逃げた口で興行價値滿点の作だと云ふたさうである。「興行」といふ言葉を愚作の逃げ場所に使ふ不心得者の作家に興行價値とは事務能率であるといふ事を教へておかう。その点で客を呼ばない狂言がしかも藝術的にもゼロであつた場合は少し困るれェ……。（或る先輩の獨語である）

×

闇は光りを求める。この論理を敢て引張り出さずとも、世の中が不景氣になればなる程、多數の見物心理として涙つぽい悲劇より無上に笑へる喜劇が望ましいのである。曾我廼家五郎も幸福な時代に棹をさしてゐる。道義を教へずに大いに民衆を笑はせてくれ。

×

新聲劇にも行友李風作、同志劇にも行友李風作、第二新國劇にも行友李風作、師走の大阪劇壇に行友氏の作品が三座に出る。修羅八羅のこの勢力に馳出し作家影うすし。――

×

大正十六年一月から雜誌「中座」が「道頓堀」と改題される。道頓堀は大阪の唯一の歡樂境であり、世界的の芝居街である。そこに深甚な研究と大々的宣傳の意義をもつて本誌が生れるのである……と編輯者が僕に告げてくれる。

大阪の顔見世

南木萍水

歌舞伎年中行事の中で、一番華やかで、情緒のあるのは顔見世興行である。その俤は僅かに京都にのみ殘されて（外觀だけではあるが）今では京の歳事史の一つとして取扱はれてゐる。が、その昔の大阪では顔見世は無かつたかといふに京都よりも寧ろ盛んであつたらしい事蹟が諸書によつて窺はれるのである。

顔見世とは一年中の座組の交代時期で、新しく拘へた役者を紹介し、一座の顔觸れを改めて目見得さす宣傳興行である霜月朔日吉例を以て開場したものだが、こても今時の華やかさでなく、劇界の空氣はいやが上に沸騰して、役者の品定めに町々での評判、さては川竹雀の囀りに、道頓堀の賑やかさ人氣は鼎の湧き立つ有樣であつたらしい。

寛政十二年に版行された「戯場樂屋圖繪」にはその當時の大阪顔見世の光景や狀態が委しく記されてゐる。以下少し當時の繁榮を追想する爲めに抄錄して見やうこ思ふ。

毎年十月吉日を撰んで、新參の役者衆の名を書きたる看板を出すこ往來の人、これを見て來春の芝居、顔見世の評判をなし、又新しき顔あれば、一日も早く初日を待兼ねるが故に招き看板こ名付く。

昔は十一月が顔見世月こ稱したもので、早や十月には竹矢來を組み招き看板を上げて人氣を呼んだものである。

それより廿日頃になれば顔見世の番附を出す、朝暗きうちより賣出す事なり。島の内道頓堀邊りの茶屋には、この番附を持ちて夜の明くるを遲しこ諸方の客先へ送るこ華やかにも、又いさまし。

こ記されてゐる。この頃から顔見世氣分がだん〳〵濃厚にな

つて來る。

十月に座本が極まるとその座本を駕に乘せて、銀主の手代表方、金剛、狹箱持に至るまで打揃ひ、大連中をはじめ、堂島、ざこば諸々の濱々へ目見へまたは賴みの進物を持つて廻る事至つて嚴重なり、これを每年の式禮なり。

中々運動に務めたものらしいが、その行列のさまを想像するこ、こても今時の世知辛さでなく、ゆつたりした町中の氣分情趣が浮んで來る。さて初日もいよ〳〵迫つて來るこ、劇場前の飾り付け積物に早や春は一度に押寄せたが如き光景が織出されるのである。『新撰古今役者大全』には

先づ芝居の兩側に座本の紋を付けたる高提灯數しれず點し立て、いろは茶屋には家〳〵の印の行燈、提灯の光り、仲居の前だれに照りそひ、木戸にはひいき連中よりの進物の幟風に飜り、絹、卷物、樽、肴、軒こ等しく積上げ、井籠は檜幕にこゞき、俵物は梵天に屆く、遠方の見物は屋形船を急がせ道頓堀に乘捨し舟はさしもの大川を埋む、顏見世の繁昌他國にまさり取分け夜の景色、芝居の賑ひ詞に述べがたし。

こ情景目の邊り浮ぶが如く形容されてゐる。さてそれからいよ〳〵乘込みこなる。

十月の末に京、江戸よりの新參の俳優が來て、一先づ宿に落着く、そして乘込み日になるこ晝の頃より駕に乘り、東横堀九之助橋まで行き、それより舟に乘つて芝居の濱先まで來るこ、太皷持の連中は小舟に乘り思ひ〳〵の衣裳を着け、女や老人に變裝して、しころ打ちに合せて踊り歡迎する。役者舟より上つて大木戸より入り、花道を通つて、舞臺に至る。舞臺には古參の役者嚴重に連り、新參の役者を出迎ふ、それより頭取、役者、作者の名を呼び出す。何れも座本に盃をする。これが舞臺盃こいふ。太皷持は舟より上り銘々店の印を書いた提灯を持ちて、舞臺の前に並び拍子木を打つて囃す。盃すみて後、娘方出て祝儀の舞二三番ありて、その夜の儀式を納める。

この舞臺盃がすむこ、今度は大連中が座本や一座の俳優こ打交り酒宴を開くのである。

この時の座並び方が恰度大判の形に似てゐる處から大判成こ劇道では稱してゐた。頭取が出て一座の役者衆へほめ言葉を呈上する。萬事目出度し〳〵こ壽きて、盃を納めるのである。さて大連中は茶屋へ戻る、役者衆はそのまゝ川竹の茶屋、役者の宅へ互に禮に廻る事、殆ど正月の元日の如しこ記されてある。處でその頃の開場時間は今こ違つて暮過ぎてか

ら夜明けまで、つまり夜通し興行をやつたものゝ見へ、左の如く記されてゐる

扨顔見世は晝夜廿日間なりしに近年夜十日に限る。暮六つ時より一番太皷を打出し、初夜に打切り、それより三番を九ツ時に打切り、それより三番叟始まる。次に座附の引合になる。是をすみて三社いでゝ舞納めるなり。次で顔見世狂言上中下、三幕あつて、明六ツに果ての太皷を打つなり

又『古今役者大全』に

おしてるや難波の顔見世初日より七日が間は暮過ぎより始め明方に終る。

と記されてゐる。いよ〳〵初日當日となるとその混雜、賑やかさは到底想像以上のやうである。

役者の家々では正月元日の如くに粧ひ、早天より上下袴、羽織を着し、一座ことゞく芝居に集まり、舞臺に着くなり。此時本式の三番叟を舞ひ納め子供三人、出て見物にいふ如くの口上を述べる。此朝顔見世興行の町觸れ太皷を出す。さて役者衆中は我家に歸るなり。その日暮てから雜煮を祝ふて、二番の太皷を待つなり。この太皷を打つを合圖に上下を着して、芝居樂屋口より入る。役者互に目出度し〳〵と壽を述べ舞臺に至りて矢倉舞臺を三度拜して、我樂屋に座する。それより三番太皷を打切れば棧敷には座元のあんごう、茶屋の軒づり天井舞臺の提灯、何れも火を點ずなり。手打の連中はそろへの衣裳を着し、舞臺の前に座るなり。三番叟を終りて座つき引合にかゝれば、贔屓の連中は舞臺に進物を積む事山の如し、それより座本はじめ太夫子役、若衆、娘形、若女形、立役ことだん〳〵引合すなり此時手打連中は銘々頭巾をかづき役者衆中に殘らず進物を送り、其時〳〵の歌に打合せて拍子木を打ち、その外さま〴〵諸藝ありて、人の耳を驚かす事筆紙につくし難し。

こ手打の光景が詳細に記されてゐる。この手打連の圖は本誌の表紙繪にある如く、大阪では笹瀨連、大手連、藤石連、花王連の外大連中こいふに堂島があり、其他ざこばの大連もあつたが、眞の芝居好きであつたのは多くこの笹瀨、大手の兩連に集まつて、芝居道に對する後援者たり權威者たる資格を持つて居たのである

笹瀨連大手連

笹瀨連中は享保五年、笹屋小兵衛、瀨戸物屋傳兵衛の兩人これを初む故に笹瀨の名ありとする。大手連の元は大手筋にて河内屋孫兵衛、大和屋八郎兵衛等これを初む、享保二十年に起ると記されてある。さてこの手打連の唱歌は左の如きも

ので、『戯場樂屋圖繪拾遺』に拍子の打方まで掲げられてある。

里の花

まつ初春の顔見世や、歩行をはこぶ人々のからりころり〳〵ヤアからりころりと下駄の音、道頓堀の賑しさチキチヨ〳〵チキ〳〵〳〵チヨ〳〵〳〵チョンシシシャサ晝かとおもふ大ちやうちん、なにおふざこばの大連中ひいき〳〵の積ものは山の如くにめざましく、向ふに建てし連釣はさゝ瀬、藤石、さくら　詞大木戸口はエイヤ〳〵押合チヨチキチツチキへし合チヨチキチツチキ　舞臺をずつと見渡せば虹の如くの提灯はコリヤゆるがぬ北の大連中、場賣りの聲もいさましく　詞出よ割よ〳〵矢倉大鼓の打切はヤアから〳〵ヤチヨン〳〵大返し〳〵こん〳〵から〳〵ヤンチヨン〳〵サア打切初める三番叟ヤアおんはシチヨチヨチヨン〳〵エイ〳〵〳〵〳〵〳〵こ大評判をわつさり祝ふて打ましよしやん〳〵も一つせいしやん〳〵祝ふて三度、おしやしやんのしやん年の爲ヨイ

手打の歌はまだ外にいろ〳〵の趣向があり、時によつて變化があつたらしい。

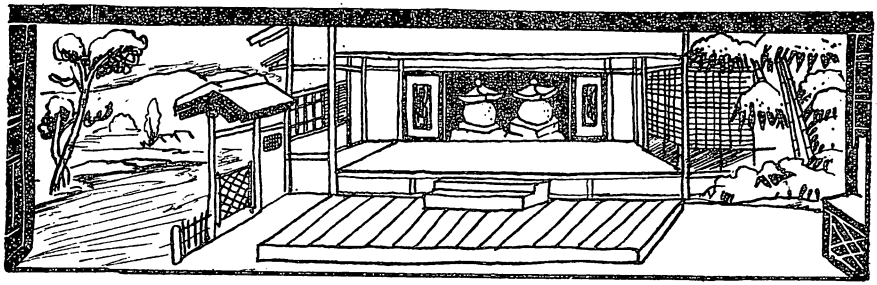
棧敷相場

この當時は棧敷相場といふものが立つて毎日々々値段が人氣によつて高下したなごは頗る注目すべき事で、如何に大阪人が芝居を禮讃したかゞ窺へるのである。

上下の棧敷は初日より十日〳〵を切として茶屋中より買切り、狂言當りたるときは棧敷値段高下ある事にして、分けて顔見世十日間は一間にて八貫拾何貫と高下あり。此相場を立る場所は太左衛門橋南詰少し西の濱側に番小屋の如きものを立て年中此所にあり。

こ樂屋圖繪に記されてゐる。

「あじろ舟」　原治郎の津之助と鶴助のおたね



京都顔見世
故中村梅玉追善狂言

山科の隠れ家

蓼雨

石摺の襖をはめた簡素質朴なる大星由良之助の佗住居、竹本の

上へ……尋れて爰へ來る人は、加古川本藏行

國が女房戸無瀬……

の淨瑠璃につれて、片はづしの鬘の角隅し、赤の着物、織物の襠其上から淺黄合羽を着た戸無瀬（福助）が乘物舁つがせ折柄の大雪を厭はず尋れ來て案内を乞ふ、木綿縞に襷掛の下女おりん（箱登羅）が取次に出て滑稽な科白をいふて這入る「娘、是れへ

〈谷の戸開けて驚の梅見附たる微笑顔、

眞深に着たる帽子の内

白綸子、嫁入姿の娘小涙（扇雀）が乘物より出で、綿帽子の下から入口を覗き

「力彌さんのお屋敷はもう爰かへ、わしや」

〈恥かしいと媚めかす

おりんの案内で二人は座敷へ通る、由良之助の女房お石（梅幸）煙草盆携て出で、餘所々々敷き挨拶に小涙は接き穂が無い。戸無瀬は打解けて居られず、許婚の娘小涙を力彌殿に添はしてと、押掛嫁入の一條を述べる。

お石は、釣り合はぬは不縁の基と劍もほろゝ、小涙の顔には紅が潮した。お石は尙も、本藏主從を追從武士さまで罵りて爭ひを挑發する、思ひ設けぬ一言に母は顔色をかへ「樣子に依つては聞捨られぬと意氣込むだが止める小涙の顔を見ては又氣も折れ、最後に約束を楯に取つて動かぬ、女同志の詰め開きは遂に子供の喧嘩のやうに昂じて來た「婚許あるからは天下晴れての力彌が女房」「フム、面白い、女房ならば夫が

離る、力彌に代つて此母が離つた々々々」
襖を建切つては入る。
戸無瀬は取つく嶋が無い、小涙はモウ恥かし想に許り仕て居られず「妾しや離らるゝ覺ゐは無い詫言して祝言させて下され」と邪氣なく母の襠に縋つた「慾しがる處は山々、外へ嫁入する氣は無いか」奥へ聞ゐるやう面當がましく叫ぶが娘は泣いじやくり仕て絶對に諾かぬ。
「あの母樣の胴慾な事有仰ります、國を出る折父樣の仰有つたは、涙人しても大星力彌、行儀といひ器量といひ、仕合せな婿を取つた。

へ貞女兩夫にまみへず、例令夫に別れても、又の夫を設けなよ……

案じやうかとて隱さずと、懷姙になつたら早速に知らしてくれと仰有つたな妾しや能う覺ゐて居る……」
小涙は猾く自分の意見は棚へ上て、唯、父樣が斯う仰有つたと、父の教訓を楯にして「力彌さんより餘の殿御は、わしやいやいや」と泣くのみ、母は愁嘆遣る方なく、生さぬ仲の義理故に自仰仕やうとする、娘は止めた。夫に嫌はれた妾こそ死す可き筈と健氣の覺悟、娘を殺して母も跡を追う可く襠脱いで其上へ座はらした
晴れと着飾つた小袖が今は悲しい死出の白無垢となつたのである。
表に鶴の巣籠りの尺八の音、茶の切繼の上から袈裟かげた加古川本藏（中車）が出て伺がふ。
娘は白い手を合して觀念の眼を閉ぢた、母は刀スラリと振上た、今や打下ろさうとする機みに御無用の聲、尺八は止む、母もタジ〳〵と退るが、未練と笑はれまじ覺悟はよいかと振翳す「南無阿彌陀佛」小涙の島田髷に指た花櫛は再び搖つた。又尺八、重れて「御無用ッ」「フム、また御無用と止めたは、修行者の手の内か、但し又、斯う振揚げた手の内か」「お刀の手の内御無用悴力彌に祝言させう」謠の聲と共に黒い着物を着たお石が白木の三寶目八分に決死の覺悟で出た、母娘は狼狽て、襠を取り遮へる、お石は悲痛の面もちで口を切る。
主人鹽冶判官意趣ありて高師直へ斬り附けた時本藏に抱き留められ本望を遂げず怨みを殘して自刎した、其怨恨啻ならぬ本藏の娘を判官の家來たる力彌が迎ゐねばならぬものなら本藏殿の白髮首を此三寶に乘せよと理詰の談判、一難去つて亦一難、母親は途方に暮た。
「加古川本藏が首進上申す」

へお請取なされよ……

本藏内へ入り立騷ぐ妻子をたしなめ、天蓋袈裟を娘へ渡し、太刀を右手に眞ン中へ突立つた儘、お石を睨め附ける
「其許が由良之助殿の御内方お石殿よな、……主人の仇を報はむといふ所存も無く、遊興に耽り、大酒に性根を亂す、日本一の阿呆の鏡」戸無瀬が袖を引いて廢せと止める程聲が大きくなる、「親に劣らぬ力彌めが大白痴め」小涙が袂に縋つて止める娘と知つて大事無いと優しい聲「此方から

婿に取らぬ、猪古才な女めッ」

遂に三寶を踏み破つて、フチが離れたと喧に大星の浪人を諷して徹頭徹尾喧嘩を賣つた。

お石我慢が能きず長押の鎗取つて繰出したが、苦も無く組敷かれる。

〈堀出る大星力彌捨てたる鎗を取る手も見せず……

崩黄尉斗目に袴、まだ前髪の力彌(政治郎)が走り出て鎗を取つて突かゝる、本藏其穗先を掴み力彌の顔見つゝ己れの右手の肋へ指通す、力彌は止め刺す可く小刀抜いて身構へる。

「ヤレ待て力彌、早まるな」

鼠無地の着附に二ツ巴の定紋、袴姿の由良之助(鴈治郎)が出て本藏へ腹帶を與へる。

「一別以來珍らしく本藏殿、御計略の念願屆き、婿力彌が手に罹り、嘸本望でござらう喃」と澄ました顔

〈星をさしたる大星が詞に本藏眼を見開き

本藏腹帶を締めつゝ、高師直に恥しめられし爲め、主人若狹之助は師直を討留む決心家の大事と秘かに贈賄して主人の一命を購ひしため、相手代つて鹽冶殿が恥辱を受けて刃傷、師直の一命だにあらば切腹の科はあるまじと抱き留めたは思ひ過した本藏が一生の誤り、と虫の息にて身の懺悔「約束の通り此娘、力彌殿に添はせて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ忠義ならでは捨ぬ命、子故に死ぬる親心、推量あれ由良之助殿」

聞く一同は悲嘆の涙、由良之助は手負の耳近く

「イヤ何本藏殿、君子は其罪を憎くむで其人を憎くまず」と底意を示す可く障子を開けば雪の庭に五輪の塔二基、卽ち二君に仕へず消ゆるの謎、手負は紫帛紗に包みし師直屋敷の見取圖を婿引出に差出す、大星淵子は展いて床の絲にのり討入の策戦に餘念なし、

「障子は皆尻さし」と手負が注意、由良之助ぬからず、雨戸を外す工夫は是れ、と力彌へ目配せ、前栽の雪持笹の撓んだのを鴨居へ鋏め雪を拂はす、障子バタ〳〵と仆れる、本藏嬉しく「智謀さいひ義心さいひ、斯程の家來を持ち乍ら、了簡もある可きに

〈淺きたくみの鹽冶殿

今の忠義を戰場の」

「御馬先にて本藏殿」顔見合せてホロリ、敵地の案内手に入る上は と力彌は發足を急き立つ、由良之助たしなめて

「人數集めば人目あり、一と先づ堺へ下りて後發足せむ、其方は、母、嫁、戸無瀨殿諸共に後片附して夜船に乘れよ、ナ、今宵一夜は嫁御寮と見が情の纏墓流し」と骨肉の愛。

〈豫而覺悟のお石が歎き

お石は涙ながらに本藏の袈裟を借りて夫へ着せ變裝さす。

〈哀れはかなき

本藏落入、一同合掌、由良之助は天蓋にて面を包み、唯獨り東の旅にのぼる。

『保名』と『春調娘七種』

鯰之助

〈戀よ戀、われ中空になすな戀――

阿部の保名は二世かけた愛人の榊の前が自害してから悲歎のあまり正氣を失ひ、形見の小袖を抱きしめて、その移り香を慕ひつゝ菜種の畑に翼を交す胡蝶を逐ひ、春の野邊の陽炎、若草を素袍袴に踏みしだいてそこをも知れず狂ひまわる。――

この上の卷「保名狂亂」は

戀しくば尋れ來て見よ和泉なる
信田の森のうらみ葛の葉

の歌で有名な「蘆屋道滿大内鑑」のうち阿部保名の物狂の件を清元の所作として獨立させたものである。初演は文政元年三月江戸都座で、「深山櫻及兼樹振」といふ三代目菊五郎の七變化所作事のうち春の部「小袖物狂ひ」清元延壽太夫連中、作者は四世鶴屋南北、作曲は清澤萬吉である。

下の卷「春調娘七種」は初春の七草の吉例を所作事として、曾我の世界に脚色されたもので、今日も尙長唄に傳はる「娘七草」である。

天明四年の古きを直して新しき「春調娘七種」と伊坂梅雪氏の補作である。

所作舞臺で工藤祐經館の場

十郎。芽出度き御代に白馬の今日の節會の御祝儀に、引出されし兄弟は、五ッや三ッの頃よりも、脚並揃ふ諸手綱、名も立髮の本望を遂げる時節を松囃し。

五郎。新玉の、千里を歸る寅の歳、石に立ツ矢は弓取りの、稚な遊びの破魔弓も、念力通す手柄弓、十八年の天津風、今吹き返す時を得て、當り外さぬ弓始め。

喜瀨川。浮き川竹の傾城も、心は清き川水は、丁度今年の御題にて大内山の古事は女手業の飯事に、儘にならぬ五月暗。

朝比奈。果報は寢て待つ初夢に一富士三鷹茄子眉、宜き中村の仕來りを、茲に映した猿隈は、三本足らぬ猿智惠で、一寸眞似して三ッ雀。

梶原。鎌倉海老の威かめしく、魚族の中の鎧武者、ピンと蹴れたる角髭も、折れて和ぐ屠蘇氣嫌、赤いが吉例敵役。

十郎。未だ室咲きの花の兄

五郎。ホウ法華經との口眞似に

喜瀨川。唐土の鳥か、くだかけの

朝比奈。渡らぬ先きに打てや～～

梶原。打てとは何を。

喜瀨川。あゝもし――

〈わかな摘むとて袖引きつれて……。

南座顔見世興行上演脚本（禁無斷興行）

時 寛永二十年霜月

處 島原の廓。近江國愛知川の畔

人

法純　福助
島民部　魁車
露の五郎兵衛（矢野五郎太夫）　吉三郎
青木主計　錦四郎
花澤三四郎　霞仙
金井半兵衛　右左治
吉田初右衛門　市昇
別木裝左衛門　扇冠之助
高坂左門　成笑
梅小路主水　箱登羅
神谷七郎右衛門　莚平
和田茂馬　三四郎
歌川　鴈之助
千代野　延太郎
琴浦　鐘造
八ッ橋　雀
梅之亟
いよ　富三郎

明　石　福萬壽
八　千　代　扇　雀
井伊直滋　市　藏
扇屋三郎兵衛　鰕十郎
その他仲居、遊女、捕手、法師、警固の武士、直滋の家來大勢。

第一幕　菱屋の奥座敷（第一場）

平舞臺、次の間附きの座敷、上手側面に床、正面は障子、下手は花道から續く廊下、その正面に欄干越しに庭園の一部が見える、廊下は丁字形に下手側面へも通じゐる、座敷には六曲屏風が圍ひある、夜の體。

下手から和田茂馬が出て室内の様子を窺ふ、揚幕から神谷七郎右衛門が出る。

二人は花道のよき所に落合ふて囁き合ふ

人の氣勢に茂馬は素早く廊下の正面から去る、揚幕から仲居のいよが出る、神谷は醉ふた體を裝ふ。

いよ　まあ鈴様のお手の悪い、私達を出しぬいてこんな所に忍びの体こはこりや唯事ぢやござんせぬな。

神谷　なにさ、實はちと醉過ぎて……こいふのもごうやう古いやつか、おいね、そちぢやから打明くるが實の所はお敵の心を試さう爲めの計略よ、惚れ過ぎては兎角野暮にも愚痴にもなる。笑ふなよ、これ太夫はごうして居る。

いよ　ごうした所ぢやござんせぬ、鈴様のお姿が見ねぬとて太夫様は狂亂の体、皆が四方八方に手分して、まあ早ふお座敷へお歸りなされませ。

下手から遊女明石と新造の歌川が出る。

明石　鈴様、いつの間に座敷を抜けしやんした、お前は甲賀衆こやら伊賀衆やら忍びの達人でござんすな。

神谷　ゐゝ人聞きの悪いこと云ふてくりやるな、したが太夫自からの御出馬は男冥利ぢや、この心祝ひて座敷をかへて賑やかに飲みかけう。

いよ　ほんにそれがようござります。

明石　さ、鈴様（手を取る）

神谷　ごうぢや、似合ふたか〳〵

いよ　歌川　よう〳〵お二人様〳〵。

揚幕から香箱を持つた禿の梅の丞と島民部出る。

四人は行違ふて向ふへ去る。

同時に下手から新造の千代野が出る。

千代野　民部様、お久しうござりましたな

民部　暫らく旅へ參つておつた、千代野今のあの客は

千代野　里の名を鈴様こ云ふ海道筋のお武家こやらでござります。

民部　ふう、舊い馴染か

千代野　いゐ〳〵、ついこの間から八千代様の妹分の扇屋の明石様を揚詰のお大盡でござります。

民部　左様か、して純様は。

千代野　あの（座敷を指さす）

民部　そつこ、な

千代野　あい

千代野こ梅の丞は座敷へ入る。

千代野　太夫様、民部様がお越しでござりますが、ごう申上げませう。

長き間、
屏風の内から八千代の聲が聞ける。

八千代　屏風をのけてたも

千代野　あい

二人して屏風をのける法純は脇息に凭り、八千代は机に向つて習字をして居る。

法純　民部、待かねたそこれへ

民部　御免蒙りまする（座を進める）

八千代　今も今てあなたのお噂でござりました、さながら戀人を待つ思ひぢやこ仰しやりまして。

民部　はて、戀人はお傍離れずござるものを。

八千代　いゐ〳〵私は唯純様の手習子でござります、この通り懐紙や色紙短冊こ戀歌の數々は書き盡しても、ついに一度の返し歌も、なあ純様

法純　いや追つけ嬉しい返し歌を見る時もあらう、なふ民部そちも定めしよい返し歌を……

民部　はッ（そつこ懐を押へて見せる）

八千代　それ見やしやんせ、こなたのこゝゝ喜ばせて置いてやつぱり心は外山の花へ、ぞれ私達は御遠慮を。

法純こ眼顔で喋し合う法純は新造等も伴ひ行けこ命じる
八千代立上る

法純　あちらの席へ參つたら、そこ民部が歸京致したことを

八千代　（首肯いて見せる）千代野、梅之丞も來や

廊下の奥へ去る。

法純　民部、まそつこ近ふよれ、

民部　はつ（進む）

法純　形勢はごうであつた

民部　豫て打合せの通り、江戸參府の途中大阪に於て毛利公

に伺候し御消息をお手渡し申上げましたる上暗に御内意のほどを言上致しました所、一々御同意し首肯かれ、即ち御返書を下されてござりまする（懐中の書面を渡す）

法純　大膳太夫直筆ぢやな（讀んで滿足の体）追つて重臣のものをして委曲言上せしむべくこあるが。

民部　機を見て家老の一人を都に上す約定にござります。

法純　毛利は關ヶ原以來内心德川に恨みを抱、大々名、誰よりも頼もしい、して阿波の蜂須賀は

民部　阿波は入國難かしく、是も大阪藏屋敷に於いて國老益田豐後に面會を遂げましてござりまする。

法純　先には島津黑田鍋島に近づき今また毛利、蜂須賀を說いた、そちの働き過分に思ふぞ

民郎　お言葉恐れ入つてござりまする

法純　思へば先年の島原騷動相呼應して近畿に旗を擧げて居つたなら

民部　いや、あれは吉利支丹の邪宗門でござります。

法純　民部、そちはこの法純を心から佛門に歸依し居るものこ思ふてゐるやるか

民部　はッ、然しながら大僧正の御位に

法純　それは、誰の圖らひか、家康は俺を猶子にした秀忠は強ゐて髪をおろさせた、家光はあの寺を建つて大僧正にまつり上げた、じたいあの寺を見よ恐れ多くも禁裏を眼下に見下す山地を撰み、結構さなからの城廓何所に寺らしい面影があるか、一朝事ある時は三井寺こ相俟つて都を制し北條足利が徹をふまんず下心はあり〳〵こ見にすき居る、先年家光が上洛した折の如き盛んに黄白を蒔き散らして公卿堂上の面々を籠絡せんこし、君臣水魚の交はりなごこ稱して自からを大海に比し、お上をうろくずの無刀にたこへた、言語同斷、逆賊國賊こは正に彼奴の謂てなくて何であらう。

民部　もし

何か物音を聞つけた體で椽の障子を開く。

寒い月光が椽を照す椽から小姓の花澤三四郎が出る。

三四郎殿か。

三四郎　御部屋近い木蔭に人らしい影のうごめくを見つけ引捕へんこ思ふ間に煙の如く消に去つてござりまする。

民部　ふう、若し犬では

法純　このやうな手狹な庭ぢや、三四郎のそら目であらう、捨置けく。

下手から新造の琴浦こ八ッ橋が出る。

琴浦　あちらのお座敷の金井樣はじめ皆さまがこれへ參つてもよいか問ふて來いと仰しやつてゞござります

法純　直に參れと申してくれ。

琴浦　あい、八ッ橋さん

八橋　よふござんす

この前金井半兵衛、吉田初右衛門、別木裝左衛門、高坂左門、梅小路主水下手から出る。

おゝ皆さん。

金井　おゆるしがあつたか

八ッ橋　あい。

皆座敷へ通る。

金井　民部殿、太儀でござつたな、して首尾は。

民部　二ッながら先づ上首尾。

金井　それは何よりぢや。

民部　委しい事はいづれ後に

金井　御方も嘸御滿足でござりませう。

法純　おゝ、今から心祝ひの酒宴を催さう、女連をこれへ呼べ。

八ッ橋　あい

八ッ橋下手へ去る。

金井　御方、お見覺にはござりませぬか、これなるは烏丸家の梅小路主水殿にござりまする。

法純　おゝ、見忘れて居つた、主水いつ參つた。

梅小路　先刻伺ひましたが、お寢みと承り、方々と別席に控へ居りましてござります、これは主人光廣卿よりの消息にござります。

書面を渡す、

讀み了つて不安の面色、手紙を民部に讀ませ顏見合す。

法純　光廣卿には江戸へ下向おしやるのか。

梅小路　幕府よりの沙汰によりまして、それにつき發足前密かに御面談申上げたいとのことでござりまするが。

法純　卿との面會は寺での方がよくはあるまいか、なふ民部

民部　御意の通り却つて人目立ちませいで。

法純　では明日、方丈にて待つと傳へてくりやれ。

主水　畏まつてござります、ではこれにてお暇を、いづれも一揖して向ふへ去る。

法純　（チッと考へて）民部、近衛關白にはそちよふ御存じであつたなア。

民部　鷹山公には一兩度お目通り致して居りまする。

法純　今宵はまた關次郎の名で、例の揚屋にわせらるゝと先

刻八千代の話に聞いた、大儀ながら其方使者に參つてくれぬか。

民部　易いことでござりまする、して御口上は、乃至御消息でも

法純　明日光廣卿入來の仔細を申して是非とも同刻參會あるやうにと。

民部　委細心得てござります、では早速只今から（立らかけて）各々今宵は何こやら氣にかゝる節もござるで、暮々も……。

金井　承知致した。

民部は一揖して揚幕へ去る。

女達が酒肴を運んで下手から出る。

同時に遊女、新造、禿、唄法師など大勢出で、直ぐ酒宴になる。

法純　三四郎、座興ぢや、何なりと今樣振りを踊つて見せい

三四郎　は、では不重寶ながら、東おごりを。

琴浦と八ツ橋をさし招き立上る。

法師の三味に合せて女達も唄ふ。

〈朝の六ツからずんと出かけた、ずんずと踏み出す八文字、鬢附きころり人柄で、伊勢町舟町のだて姿、酒屋の娘店のびまよりちらと見た、見そめた、晩に逢ふぞや語ろぞや、さし足そろ〳〵、くゞりをちつくら、くら〳〵ちつくらばつたり、くら〳〵がりちつくら、ばつたりくら暗がり、くら〳〵がりの暗くとも、開けてお待ちやれ遲くも〳〵月の出るまで、東おごりをのう東踊りをひと踊り。

三四郎の踊りに琴浦と八ツ橋搦む。

皆やんやと囃す、廊下から八千代と露の五郎兵衛が出る囃き合ふて八千代だけ座敷へ入る。

法純　おゝ八千代、三四郎の踊りが面白かつたに、いづこの空に雲隱れしてゐやつたぞ。

八千代　あい、好きなお人と差向ひで。

法純　や、その好きな人とは。

五郎兵衛　にへん。これは祇園の北林に太平記讀みの大名人でおりやる。（座敷へ通る）

法純　おゝ、露の五郎兵衛か、よい所へ參つたな。

五郎兵衛　は、は今宵歷々の御年會、かうも御座らうかと太平記の尻切れに讀みさいてそゞろ心に馳せつけてござります。

八千代　その讀みさいた太平記の續きが聞きたうござんす

なァ純樣。

法純　何さまそれも一興であらう、露、所望するぞ。

五郎兵衛　御所望ごござりますれば、讀んでお聞きに達しませう、方々もよく心してお聞きなされ（本を取り出す）抑も大塔宮と申し奉るは、後醍醐帝の三の皇子にましまして御母は阿野中將公廉卿の息女三位殿の局と申し上げまする、宮にはいとけなくして御剃髮、比叡山延曆寺の貫主卽ち天臺座主として傳敎大師が法燈を御繼ぎあらせられ、本來なれば偸伽三密の法を極め、戒行いみじくましますべきの所、宮には行も學も共に捨てゝかへり見たまはず、あけくれ遊ばす所は唯武勇の御嗜みばかり、されば早業は江都が勁捷にも越ゐたれば、七尺の屛風未だ必ずしも高しとせず、打物は子房が兵法を得給へば、一卷の秘書盡さずといふことなし、天臺座主始まつてこのかた一百余代未だかゝる不思議の門主はおはしまさずと、人々あやしみ合ひたるも道理かな、宮には唯一念に關東の暴逆無道を憎ませ給ひ、機會を待つて父帝の御爲め國の爲め、關東の逆賊を征伐せんとの御下心とは、後にぞ思ひ合はされける、時に元徒二年八月八日御帝には南都東大寺に御幸あり、續いて四月二十七日には比叡山に行幸あつて關東調伏朝敵御征伐の御祈願を込めさせ給ふ然るに事は洩れ易く、調伏の法、行はれしことゞも一々關東に聞ゐたれば、北條相摸入道高時大に怒つて、所詮君をば承久の例にならふて遠國に移し奉り、大塔宮をば死罪に行ふべきなりと命を含めて二階堂下野判官長井遠江守を都にさしのぼす。

法純　待て、大塔宮の南部落ちは時に取つて不吉ぢや、同じくば北條滅亡の鎌倉合戰を聞かう。

五郎兵衛　勝つことを知つて負くることを思はぬものは眞に大將軍とは申されませぬぞ。

この以前和田茂馬は廊下の奥から出て立ち聞く、この時下手に人の氣勢がする。

茂馬は向ふへ避けやうとする。

揚幕から島民部が出る、茂馬は急に醉ふた體を粧ひ、座敷へ入る。

民部は驚いて部屋の入口から窺ふ、下手から新造の歌川が出て、此の體を見て引返して去る。

金井　何者ぢや。

茂馬　やァ、太平記の面白さに釣込まれてこの体、御無禮ながら招伴ぢや、さ、太平記讀み續けいく。

金井　さてはおのれ最前から立ち聞き致し居つたのぢやな。

法純　無禮者を追つ立てい。
　金井、吉田等立ちかゝる。
茂馬　無禮ゆゑ詫て居るではないか、や、お身は法体ぢやな面白い、坊主の分際で廓通ひ名を聞かう〳〵。
　法純にかからふとする、民部は座敷へ入つて茂馬を遮ぎる。
　茂馬は脇差しを抜く、民部はそれを奪い法純を庇護はうとし誤つて茂馬を斬る。
五郎兵衛　や、民部。
民部　怪我ぢや、我れこ我がでにこの刃に。
茂馬　いや、俺を刺たはあの法師ぢやァ。
民部　にゝおのれ。
五郎兵衛　待て。
　刺殺さうとするのを五郎兵衛が止める、
　下手から神谷七郎右衛門が出る。
　後に歌川が隨ふ。
　仕濟ましたといふ思ひ入れ。座敷に入つて突如に茂馬を打つ、
神谷　こな醉狂者め、おの〳〵平に〳〵御宥免を、此奴は拙者の家來、それがしは鈴こ申す田舍武士、何事も御穩便に、こりゃ女、早う〳〵此奴をあちらへ。
　歌川は逐らふ。
茂馬　それがしを斬つたのはあの法師でござるぞ。
神谷　にゝ、こつこゝ行き居れッ
　引立て、室外へ出る。
　いづれも改めてお詫に罷出でまする。平に〳〵御穩便にゝゝおのれは場所柄もわきまへず、主人に恥辱を與へる不屈き者、その分では濟まさうか、來おれ。
　引立て、下手へ去る。
　歌川も去る。
　民部は思ひ當つた體で追はふとするを、五郎兵衛は遮ぎる。
五郎兵衛　何こおしやる。
民部　彼奴はまさしふ間諜ぢや。
　皆意氣込む。
五郎兵衛　たとへ間諜にもせよ、大事の前の小事、捨て置かれい〳〵。
　下手から青木主計が急いだ體で去る。
　法純は腹立たしけに大盃を傾ける、
民部　おゝ諸太夫ぞの。

主計　民部殿、御方に急ぎ御歸山をおすゝめ申さねばなりませぬぞ。

民部　ね、何として。

主計　唯今これへ參る折から、廓内に所司代の役人組子大勢立入り、盜賊吟味の爲めと申して、揚屋〳〵を詮索致し居つた。御名を質されては一大事、御方とく〳〵お立ち下さりませ。

法純　高が所司代の小役人、何憚る所がある、これへ參らば追ひ還すまでぢや。

民部　いや、唯今の怪しい奴と申し、旁御名聞が大切でござりますれば。

法純　戻れといふのか。

五郎兵衛は八千代に目まぜする。

八千代　風吹けば沖津白浪立田山の古歌がこの身に偲ばれまする、純樣、あすの御見はきぬ〴〵の鐘を枕に聞くやうに。

法純　おゝ、ゆるり致さうぞ。

酔ひがはげしく出た體よろめき乍ら立ち上る拍子に、以前の毛利の消息を取落す。

千代　おゝ、これは。

民部　いや、それがしかと。

手早く拾ふて懷中する賑やかな絃歌の聲

――廻る――

第一幕　島原の門前（第二場）

平舞臺、正面板塀、堀を廻し、上手に大門、さらば垣に沿ふて柳の立木、下手は藪壘み、夜更けの體、下弦の月が柳の梢にかゝつてゐる。

おろせの鶴、編笠の若衆、琵琶法師、寛閑めいた侍、髭奴、歌比丘尼などが通り過ぎる

廓内からは夜警の太鼓に搦んでしめやかな絃歌が聞へる

法純が八千代に手をひかれ、青木主計と花澤三四郎新造琴浦、八ツ橋、禿梅の丞、仲居等後に引添ふて門から出る。

八千代　純樣そんなら爰で。

法純　おゝ、爰はもう、さらば垣であつたな。

八千代　明日の御見には、私が願ひをなア純樣ア。

法純　はて願ひとは。

八千代　あれ、もうお忘れでござんすか、てもお臭ひ方樣なア。

法純　さうぢや、思ひ出した何の忘れやう新規な手本した

めくれいであつたのう。

八千代　あい、吃度でござんすぞへ。

法純　思ひ浮んだ戀歌の數々書きしるして持參せう、ではさらばぢや。

八千代　ごうぞお早い御入らせを。

女連は御機嫌よろしうと見送る、法純が行きかけるとき下手から神谷七郎右衛門が出て此方に立閉がる、同時に上手下手から覆面せる大勢の組子出て遠卷に圍む主計と三四郎も身構へる。

神谷　暫らくお待ち下され。

主計　何者ぢや。

神谷　所司代板倉周防守家來神谷七郎右衛門ご申す、先刻菱屋に於いて所司代和田茂馬に刃傷に及ばれたは如何なる意趣によつてか承はりたい。

主計　左樣なことは御主人御存知ないことぢや。

神谷　御存知ない、然らば下手人は他にあろう、廓内殘らず吟味して一味のやから一人殘さず召捕るまで、それッ。

組子は門内へ向ふとする。

法純　待て、彼奴は言語同斷の無禮を働き、あまつさへ理不盡の拔刀にまで及ぶによつて、それがし手づから無禮討に致した。

神谷　確かこお身樣が。

主計　もし、庇護ひ立ても事によりまする。

法純　ひゝ捨ておけ、如何にもそれがしが手を負はしたに相違ない。

神谷　役目の手前御姓名を承はりたい。

主計　いや、御姓名なぞこ。

法純　よいわ、それがしは德川家康の猶子東山の法純ぢや。

神谷　はつ、確かに承はつてござりまする。

皆平伏する、門から民部が出る、捕手を見て身構へる法純は目顏でとめる、八千代は漸う安堵した體、さらば垣に延上る

八千代　明日は必ず。

法純　おゝ。

神谷はちつと窺ふ

法純は民部を促して揚幕を去る、組子は跡をつけやうとする、門から金井其他が立て意氣込むを五郎兵衛が遮ぎり止める、

鐘の音、しめやかな法歌の聲。

——幕——

第二幕　愛知川堤（大詰）

平舞臺、中央より上手奥へ一條の街道が通じ、路の兩側には松その他の並木が洞のやうに茂つて居る、路の後は葦の簇生した河畔の體、遙かに愛知神崎兩郡の連峰を望む。
寛永二十年の冬、雪もよひの日の午後。
揚幕から荷物を背負ふた旅商人姿の金井半兵衛高坂甚内が出る、四邊を物色し、並木の松の根方に赤き幣の立つてあるのを認める。

金井　待て高坂
幣を取つて讀む。
南無八幡大菩薩。

高坂　相圖ぢや。

金井　近江路の地の利に精しい五郎兵衛殿が、差配、並木ごいひ葦原ごいひ身を忍ばすには究竟ぢや。
上手から別木裝左衛門が急ぎ足に出る。

別木　お乘物が武佐を過ぎて老蘇の森にかゝつたを見極めて來た。

金井　ではもう半時餘りであの愛知川を渡られる。

別木　川を渡つて警圖の列のゝ、のはぬ虚に付入れば、萬々一つ仕損じはあるまい。

金井　けふこそ一期の腕の試し時ぢや。
鷹笛と勢子の聲が聞ゐる、

高坂　や、鷹野らしいぞ。

金井　ゐゝ、折の惡い、忍んでやり通せ。
三人は上手の木蔭に忍ぶ、やがて數名の勢子が下手から揚幕へ走り過ぎる、中央の葦原から民部が出る、その後から大勢の同志が頭を現はすのを民部が制して忍ばせる、下手の葦間からは五郎兵衛が出る。上手からは以前の三人が出る。

別木　民部殿、時は迫り申したぞ。

民部　豫ての手筈をあやまらるゝな、一番手は半兵衛ごの、二番手は初右衛門殿、三番手はそれがし、又五郎兵衛殿は遊軍として隨所に働かるゝ。

五郎兵衛　太平記讀みの露の五郎兵衛も、けふこそは長曾我部の旗奉行、矢部五郎太夫の昔に歸つて大阪陣この方の腕をふるひ申さうわ。
下手の葦間から花澤三四郎が出る。

三四郎　弱輩ながら決して方々の足手纏ひにはなりませぬ、花澤三四郎は唯御方の爲めに一番がけの斬り死をしてお

目にかけます。

民部　おゝ少年にして猶この健氣さ、それにつけてもそれがしは……

ヂッとなる

五郎兵衛　またしても述懷か。

民部　述懷もしたうならいでか、あの和田なにがしを斬つたは島民部が一生のあやまち、その爲めにむざ〳〵御方をけふの仕誼に墜さし參らせた。

五郎兵衛　家來一人を香餌にして所司代めがかけおつた罠にむざとかゝつたも時の運、何の御方を取返し、比叡山の日明ヶ嶽に烽火を擧ぐれば同じことぢや。

上手から漁夫の姿に身を窶した青木主計が出る、

民部　主計殿、船の手筈は。

主計　安土の山蔭に五丁艪立てゝ御方の御乘船を待つばかり手筈萬端ぬかりはござらぬ。

民部　この上は唯弓矢八幡の擁護をたのんで命をこの劍に委ねるばかりぢや。

五郎兵衛　おの〳〵。

上手を見て注意する、

皆葦原または下手に忍ぶ、

長き間

上手から法純を乘せた乘物を神谷七郎右衛門その他の大勢の武士、小者等が警固して出る。

法純　乘物を立てい。

神谷　御用にござりまするか。

法純　今越にたは愛知川であらふな。

神谷　御意の通りにござりまする。

法純　歌にのみその名を聞く近江の愛知川、名殘に眺めて參りたい、扉を開けい。

神谷　ハッ、然しながら宵の宿りは高宮まだ大分の里程にござりますれば……

法純　いや、苦しうない開けい。

神谷は不性無性酔下の者に目配せして、扉を開かせる。

法純は靜かに降りて今渡つた河の方を眺める、

名にし負ふ老蘇の森も、それと告ぐるものもなければ現に過ぎ、水を渡つて愛知川の流れと知る、何といふ蕭條たる眺めであらうか、誰ぞ料紙を。

侍は乘物から料紙と矢立を取出し、よき所に圓座を設ける。

法純はそれに坐して歌を案じる體。

上手から旅姿の八千代と抱主扇屋三郎兵衛が出る。

三郎兵衛　お役人様へお願ひ申上げまする。

侍一　何者ぢや。

三郎兵衛　私は都、島原の亡八扇屋の亭主三郎兵衛こ申すものでござりまする、また、これに居りまするは八千代こ申す私の抱へ子にござりまするが、恐れ乍ら和尚様に唯一目お目通りのおゆるしが願ひたいのでござりまする、ごうぞお慈悲に寛大の思召を持ちまして。

神谷　いや道中に於いて自儘の御對面は相成らぬ、殊に沙門の御方に廓の女なご猶以て叶はぬことぢや。

法純　七郎右衛門。

神谷　はつ。

法純　彼の者はそれがしが筆道の教へ子ぢや、師弟のよしみを思ふて遙々慕ひ參つたものを無氣に追ひ返すは餘りに不愍ぢや。

神谷　いや掟にござりまするによつて

法純　ふう、法度ぢやこいふか、壽永の昔、宗盛は遠州に熊野こ再會し、重衡は鎌倉に千手こ語らうた、これ然しながら武門の情、德川氏の政道は情も知らず、暴戾我慢の振舞ひは、この一事を以ても知ることが出來る、七郎右衛門、かう申すがあやまりか、そちの辨疏を聞かう。

神谷　はッ……唯御身分高き御方へ下賤のものゝお目通りは如何かこ存じまして。

法純　それなれば苦しうない。

神谷　では兎も角、御意のまゝに。

八千代、三郎兵衛これへ。

二人は傍に進む。

八千代　方様。

法純　二人ながらよふ參つた懐かしう思ふぞ。

三郎兵衛　責めて一目のお名殘をこ、八千代の嘆くが不愍さに、お跡を慕ふて都を出ましたれご、表立つて御旅舘へも參られず、けふ始めて途中にてお乘物をお降り遊ばしましたを幸こ、おしてお目通りを願ひましたのでござりまするが、昨日に變るこの御樣子、何こ申上げる言葉もござりませぬ

八千代　私風情がお傍近ふ、狎れ仕づいたばつかりに、今度の仕誼、何こお詫を申したら……方樣ごうぞおゆるし下さりませ。

神谷　御方、所司代より申上げましたる通り言說のお愼みを願ひまする。

法純は激昂せる體で神谷を睨む。

氣を變へて料紙に歌を書きしるす。

法純　八千代島原の大門口に明日を契つて別れたことも仇ごなり、法純はそのまゝ寺に押籠められあの折聞いた太平記を我身に偲ぶけふの有樣、この一首は法純が心の聲、これを都に持歸り遍ねく人々へ傳へてくれい。

八千代　はい、お忝なふでござりまする

料紙を受取つて讀む。

愛知川を渡れど千鳥啼かぬなり。

三郎兵衛　誰かなき名を人におはする。

法純　今一度。

八千代　愛知川を渡れど千鳥啼かぬなり。

法純　誰かなき名を人に負はする、誰かなき名を人におはする（悲憤の体）

神谷は八千代の手から歌を奪ふ。

神谷　斯樣な歌を都に流布することは斷じて相成りませぬ。

法純　なに、ならぬこ。

神谷　それのみならず今後御歌遊ばすことは堅く御法度でござります。

法純　法度ぢやこ。

神谷　豫め江戸より御沙汰書が參つて居りまする

懷中の沙汰書を法純に渡す。

法純　（讀んで）流罪の上に剩へ鬼神をも感ぜしむる敷島の道までもこの法純から奪うこいふか。

沙汰書を引裂き捨る。

八千代　方樣。

三郎兵衛　世は末でござりまする（泣く）

法純　八千代、對面もこれまでぢや。こう都へ戻つてくれ。

八千代　はい、傳へ聞きます甲斐の國は寒さもきびしい雪國こやら、嘸明暮れが御難儀でござりませう、お傍に仕へて御介抱が申上げたうござりますが、それさへかなはぬ果敢ない、身が口惜しうござります。

三郎共衛　左樣なれば御方樣。

法純　二人が志し長く忘れまいぞ。

二人は一揖して泣く〳〵立上ろうとする。

待て。

料紙にまた歌を書く神谷は立かゝつて見る、

思ふこと云はでぞたゞにやみぬべき我れこ同じき人しなければ（高らかに詠む）

神谷　法度に背き重ねて歌をよまるゝこは言語同斷の御振舞ひ。

法純　いや法純歌はよまぬ、こりや在原が業平の伊勢物語の古歌、七郎右衛門は文武兩道に優れた武士と思ひきや、世にも名代の伊勢物語をさへ存ぜぬとは、は……

神谷は赤面する、

如何に無道の輩たりとも古歌までも法度とはよもいふまい、法純今後天目山に謫居の生涯を古歌に托してこの心を述ぶるまで、八千代、これを遺物にとらするぞ

八千代　はい、この御筆を方様と明暮お仕へ申まする。

神谷は配下に去らせろと命じる。

侍の一　早お立ちぢや、行け。

二人は上手へ去る。

お乘物へ

法純は乘物に入る。

神谷　思はぬことに暇どつた、急げ。

侍の一　はッ。

乘物を舁上げやうとする。下手から金井半兵衛を先登に花澤三四郎その他數名い浪士が出る。

半兵衛　法純僧正の御迎へぢや、尋常に乘物を渡せ。

神谷　や、狼籍者め。

亂闘。半兵衛等はわざと受太刀になり大勢の警固の武士と斬合ひながら揚幕へ去る。

雪が降り出す。

上手の葦原から吉田初右衛門その他數名が出て斬つてかゝる。

これも受太刀になつて上手へ去る。

中央から民部の組下手から露の五郎兵衛青木主計、花澤三四郎等の組出で斬り合ふ。

三四郎は斬死する。

皆上手下手へ入り、民部と神谷とが殘つて斬り合ひ、神谷は斬り仆される、乘物から法純が出る。

法純　民部か。

民部　おゝ、天道まだ地に墜ち給はず、御無事の御見參この上の喜びはござりませぬ。

法純　屍を草莽に埋むるもいとはぬ勇士等の働き過分なるぞ

民部　いざ御方、安土の濱にはお迎ひの船が控へて居ります る、琵琶湖を横斷つて堅田に御着船相成れば叡山横河の法師原が御迎へ申上ぐる手筈、地侍なぞの駈集まらぬうちにちつとも早く民部御供仕りまする。

法純　民部、そち達の忠節は嬉しいぞ、さり乍ら、法純は叡山へは參らぬぞ……

民部　こはまたなぜでござりまする。

法純　徒らに山野に身を忍んで機會を待たんより、進んで天目山に流罪の身となり艱苦の限りを盡せば盡すほど、一しほ德川の暴戾無道を天下に知らしむるよすがとなる。

民部　いや、大事の御身、邊土の謫居なぞ思ひもよりませぬ

法純　いゝや、法純はなまじいに生きんよりは、死して邦家の犧牲となるが本懷ぢや、そち達は、それがしが心を帶して生き存らへ、再舉を謀つて御國に盡くせ、重ねて止むるな、法純の心は決したぞ。

民部は落膽の體、血刀を腹に突立てる。

や民部。

民部　御方をこの破目に落し參らせた罪のお詫平に〳〵。

上手から八千代と三郎兵衛が出る。

八千代　方樣御無事でござりましたか。

三郎兵衛　どうなることかと存じました。

五郎兵衛其他が引返し

五郎兵衛　や民部殿。

民部　御心は牢として動かすべからず　事はすべて　志　とたがふた、民部、方々は一先づ爰を退散して再擧を〳〵。

五郎兵衛　では御方には、

法純　法純は天下の志士を奮起せしむる爲めに喜んで流罪にあう、そち達は生存らへて尊王報國の大義を天下に唱ひい。

民部　この場は民部一人の仕業にしても事はすむ、いづれもは、御掟を守つて早く〳〵、西するものは長州に走つて國老福原氏を、東せんとするものは豫て御方の御内意を傳へある江戸の由井正雪をたよられい。

向ふに大勢の走り來る氣勢がする。

五郎兵衛　おゝ、寄手が。

金井　引受けて一泡吹かしてくれよう。

法純　それがしが心に背くのか。

五郎兵衛　民部殿御犬死はさせられぬ。いづれも。

法純　とう退散せい。

五郎兵衛　ハッ、お暇仕りまする。

思ひ切つた體。

涙士等は上手へ走り去る。

八千代　（延び上つて見送る）葦間隱れにもう後影も。

三郎兵衛　皆樣御無事であればよいが。

法純　民部こいひ、弱年の三四郎まで、（ヂッと見る）

揚幕から狩立扮裝の井伊直滋が大勢の家臣、勢子を隨へて出る。

法純　何者ぢや、それがしは東山の法純ぢや。

直滋　はッ、これは領主井伊掃部頭の伜直滋と申すもの、狩鞍の途中法純和尚御大事と聞いて駈つけましてござりまする、それ曲者を追へ。

民部　待たれい、御方を奪ひ返さんと謀つた張本はかく云ふ民部、味方は殘らず斬死し、それがしは御方の教化に罪を悔いてかくの通り、この上の詮索は御無用でござりませうぞ。

直滋　なにさま、御方さへ御無事に御座ある上は。

法純　それがしは唯幕命に從つて、天目山へ參るまでぢや。

民部　佛陀の御加護によつて無事の御歸洛を冥土から。

直滋　不肖ながら直滋、萬事御警固申上げまする。それお乘物を。

家來が乘物を舁き寄せる。

法純　民部、そちが冥福を祈るであらふぞ。

民部落ち入る。

法純、八千代等拜む。

——幕——

月刊雜誌・新春號

道頓堀

大正十六年一月一日發行

雜誌「中座」改題豫告

愛讀者諸賢の御聲援に依つて稀有の發展をして來たる本誌「中座」も、愈々新春より月刊雜誌『道頓堀』と改題をして組織的に内容充實を計り一大飛躍を試みるべく、啻に歌舞伎研究に止まらず廣く新劇方面にも渉り諸名家の健筆と相俟つて劇壇唯一の權威ある演劇雜誌として目見得る新春號に絶大なる御期待を切望す。

道頓堀各座師走興行一覽

中座

□十二月一日初日
□毎日午後四時開幕
曾我廼家五郎劇御目見得

第一　陰と陽　四場
第二　約束手形　二場
第三　命の衝立　三場
第四　雪の夜の街　三場
第五　夕ぎり伊左衛門　廓文章　二場

◇特等　貳圓八拾錢　一等　貳圓七拾錢（落物卅錢）
二等　壹圓五拾錢　三等　壹圓
四等　五拾錢

浪花座

□十二月一日初日
□毎日晝夜二回開演
新聲劇一派お名殘
「劇と評論」所載
北村喜八氏作
第一　山の喜劇　一幕
行友李風氏作
第二　高砂心中　二幕五場
川村花菱氏作
第三　卷頭　清水一角　三幕五場

角座

□十二月一日初日
□毎日晝夜二回開演
新潮座御目見得
「苦樂」十二月號所載
鶴田英太郎氏作
川口松太郎氏演出
一番目　閃刄悲話　全五場
津村京村氏作
二番目　幽靈　一幕
大森痴雪氏作
三番目　權八の生涯　五幕七場

辨天座

□十二月一日初日
□毎日晝夜二回開演
同志劇一派上演
川本賢市氏
栗島狹衣氏合作
阪本龍馬　五幕

雜誌「中座」の御發刊を御祝ひ申上ます同誌御愛讀の諸兄姉樣、私は當地歌舞伎座出版部の歌舞伎研究會々員で又雜誌「歌舞伎」の愛讀者でありまして、去る九月「中座」發刊の事を承はりましてから、早速愛讀者の一人として、大阪の皆樣のお仲間入りをさして頂いた者で御座います。どうぞ行く末永くお交り下さいます樣お願ひ申上ます。さて、當地歌舞伎座十一月興行は貴地より鴈治郎丈、福助丈一座を迎へて東西合同で、一番目敵討襤褸錦大曇寺堤の塲では、鴈治郎丈の春藤治郎右衛門――立寄る者の鼻の先ずばと拔ひたる刄の光り――で「青江下阪二ツ胴、敷腕、親重代で御座る」……ムハヽヽヽ。よつく斬れますずんど斬れます……のあたりは同優獨特の至藝として他の追隨を許さぬ所を見せ、二番目の戀飛脚大和往來封印切の塲では、鴈丈の忠兵衛と福助丈の梅川とは莚女の井筒屋おねんと相俟つて各優の妙技は、純浪花風の歌舞伎氣分を味ふに充分でございました。大喜利は「葛の葉」で福助優の早替りで「戀しくば……」の歌の口書で童子に對する愛着は眞實の母性愛にも勝る、超人間的生別の悲しみを遺憾なく現はして居りました。（東京　秀榮）

◇吉右衛門劇を見て

吉右衛門の藝や三津五郎の舞踊に就いては世間に定評のある事であるから吾々田舍住居の者が今更駄評をするまでもないが唯一言したいのは優の藝は相手のワキ方やツレ方の藝たり所作を殺さぬと云ふ點でありますこゝが他の役者に見られぬエライ所だと思います。あの熱情の籠つたハチ切れさうな緊張味のある藝風でありながら相手方をどこまでも仕生かす所は實に見上たものです現に石切梶原で九藏の大庭では吉右の梶原の前へ出しては貧弱で到底見られまいと思つたのでしたがあの貧弱な九藏の大庭を立派に仕生かして居ます若しそれが鴈治郎の梶原だと大庭が幸四郎か中車なら兎に角九藏級の人であつたら（無論成駒屋なら相當の役者に大庭をさせませうが）其れとも相手を殺してしまつて成駒屋の獨舞臺になつてしまいませう。

友右衛門の六郎太夫も中々確かり演りますが若し鴈治郎相手ならさぞ仕憎いだらうと思ひます鴈治郎だと六郎太夫には故梅玉にでもさせないとあの一齣は梶原の芝居になつてしまいます然らば吉右の梶原のワキやツレに梅玉や幸四郎や中車を持つて來たらどうだ（但だしこんな役割の石切梶原は未だ見た事は有りませぬが）其れは恐らく此等の優のワキやツレに押されてしまうやうな吉右ではないと信じます兎に角吉右衛門と云ふ人は劇と云ふものは獨で出來るも

のではないと云ふ精神から相手方を尊重して之れを對等の位置において而して自己の藝を鍛練して行く人だと思います。佐倉宗吾の船渡場でも住居の場でも風鈴蕎麥屋の又七家の場でも此美はしい情緒が現はれて居る樣に思はれます然しこれが或は此優の舞臺が小さいと云ふ所以かも知れませぬ。

其れから私は昨年五月東京本郷座で此一座の芝居を見ましたが其の時は一番目花吹雪佐倉双紙として今度中座の佐倉義民傳と同じ場面と同じ役割りでした但だし本郷座では子役が又五郎、正太郎、綠丸の三人で將軍家綱が三升であつただけで他は悉く同役割でした從つて未だ記憶が新しいので今度の佐倉義民傳も非常な興味を以て見ました吉右の宗吾は今更申すまでもない事ですが私の感心したのは時藏の女房おさん藝の進歩の著しい事です本郷座でのおさんは、どうも物足らぬ所があつて大阪の魁車か雀右衛門にでもさせたらと思ひましたが今のおさんは僅一年餘りで其の進歩は非度常なもので殊に良人が歸宅して「旦那樣」かと走寄る所離緣狀を突返す所又宗吾が出立せんとする時二重舞臺の框に長男彦七が立ち其の後の押入れの前に二人の子供を抱へて立つて良人を見送る姿卽ち三段の繪面の見にとでも云ふ所の如き實に何んとも云ひやうのない悲哀の情が現はれて申分ありませんでした吉右衛門も實に良い弟を持つて仕合せです大に前途を祝福する次第です。

又話は吉右衛門の事に戻りますが昨年本郷座の二番目に堀川が出て吉右衛門の與次郎でしたが仁左衛門や訥子のを見馴た私の目には此種のものは吉右には向ぬやうに思はれましたが今度の風鈴蕎麥屋の又七を見て私の目の違つてゐた事が分りました又七家の場で金助に娘を殺した物語りや出刃庖丁で金助を脅迫するあたりは實にうまいものですあの調子なら彌作の鎌腹なぞ演らせたら卯三郎なぞとは又變つた妙味があらうと思ひます三津五郎の舞は實に達者なものですが文屋の如き烏帽子狩衣のおどりは裝束が眞面目すぎて舞踊として調和が甚だ惡いやうに思はれますこんなものは井上春子の能がかつた畠のものにしたら良からうと思ひます然し喜撰の如きものは三津五郎の右に出る者は恐らくありますまい。

（但馬　村岡理喜）

◇投稿募應◇

愛讀者諸兄姉の眞摯なる劇評、通信を左の規定によつて募集致します。

奮つて御投稿あらむことを切望を致します。

□原稿　一行十八字詰二十行以內

□締切　毎月十五日限

□宛名　大阪市南區久左衛門町八（松竹合名社內）雜誌「道頓堀」編輯部御中

姥谷生

◇當寅歳顔見世興行と書かれた南座の表看板や竹矢來は忙しい現實の生活と美の假象界の境を京の初冬の空に劃つて、師走の氣分を濃厚にしてゐます。

顔見世やいにしへぶりの看板の
堪亭流をもなつか　きかな

先輩森繁夫さんの歌集の中に、こんな私の好きな歌がございます。

◇この古い歴史と懐かしい色彩をもつた顔見世の古式を尊重し、また劇壇の年中行事の一つとしての大顔合せを因んで、こんど本誌は京南座のために第四輯を「顔見世號」として臨時増刊を發行することに致しました。

◇こんどは南座「顔見世號」とあつて京都からは藤井紫影氏成瀬無極氏林久男氏山本修二氏竹内勝太郎氏堂本寒星氏の諸氏が執筆され、東京からは川尻清潭氏、落合浪雄氏、楠田敏郎氏、それに最近引越して行かれた高安月郊氏からは自作「あじろ舟」に就て興味ある原稿を寄せられました。當地では毎號健筆を揮はれてゐる高安吸江氏木谷蓬吟氏、食滿南北氏石割松太郎氏、高原慶三氏、富田泰彦氏並山拜石氏、南木滓水氏、その他諸氏の眞面目な研究や感想を頂き、特に事務多忙の中を割いて書かれた白井社長の挨拶と、大森痴雪氏新作「東山物語」の上演脚本を掲載することが出來たのは何よりでした。

◇併せて「各優の印象と感想」は各方面の諸家五十餘氏に達し、加ふるに内容豐富な雜誌になつたことを悦んで居ります。

◇別項のやうに、本誌は新春號より愈々月刊「道頓堀」(未定)と改題して、更に一大飛躍を試みます。勿論歌舞伎を主として新劇や映畫の方面にも廣く渉りたいと思つてゐます。何卒執筆者及愛讀者諸賢の御聲援をお希ひ申上ます。

大正十五年十二月一日發行
臨時増刊『顔見世號』雜誌「中座」第四輯

□誌代は前金お拂込に願ひます。
□郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

特價。金參拾錢

大正十五年十一月三十日印刷
大正十五年十二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社内
編輯者　姥谷久一
發行者　成山桂三
大阪市東區南農人町二丁目五
印刷者　小西胖
大阪市東區南農人町二丁目五
印刷所　中安製版印刷所

雜誌「中座」發行所　松竹合名社
大阪市南區久左衛門町八番地
電南　一二四〇　六六六五　番

御贈答には

白木屋の商品券

左記各店に共通

共通店

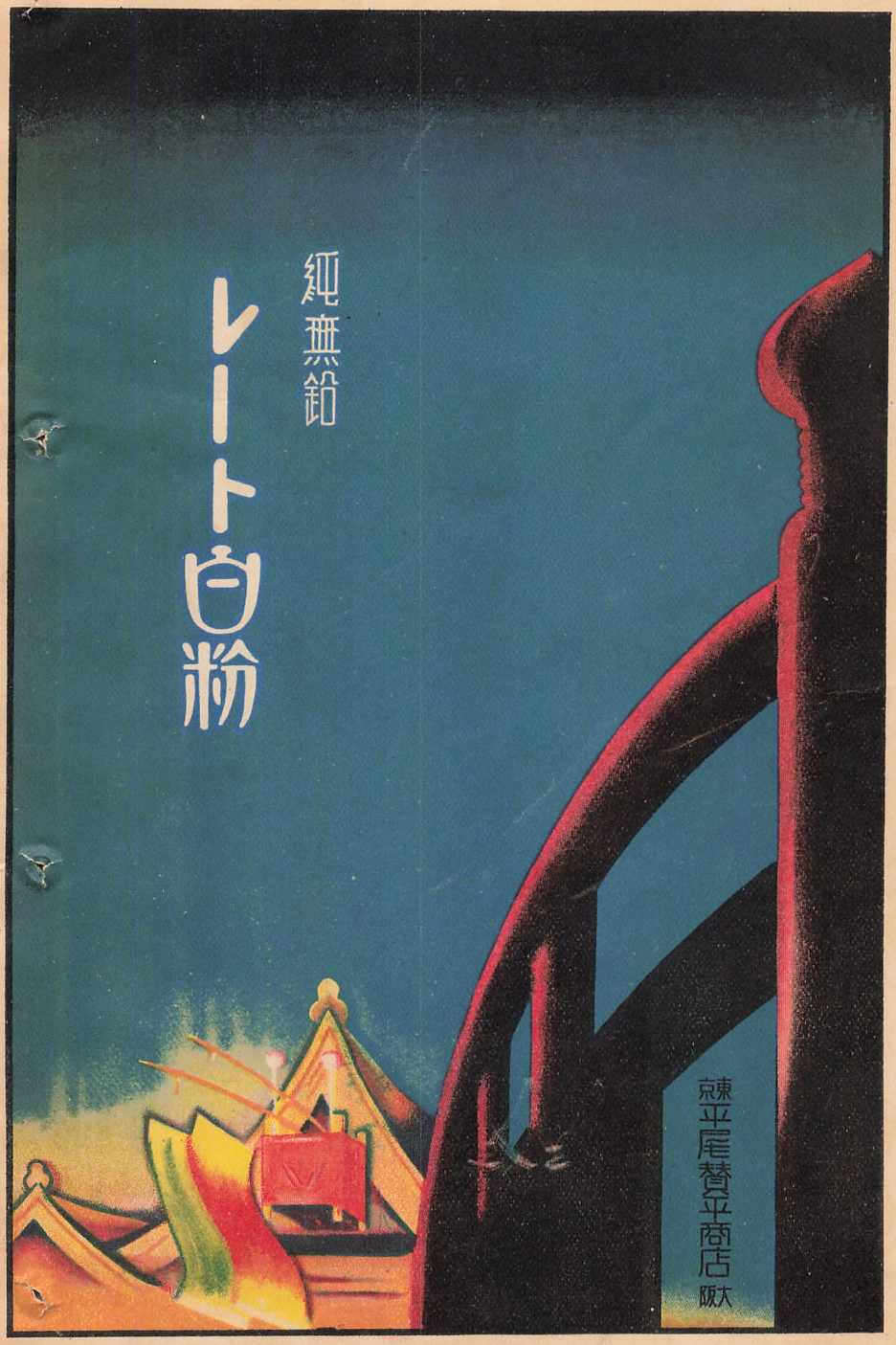
東京本店　日本橋東京
丸ビル出張店　東京丸ノ内
丸ノ内家具店　東京丸ノ内
大阪支店　大阪堺筋
京阪出張店　大阪天満橋
阪神出張店　阪神梅田駅
神戸出張店　神戸湊川

一圓以上は美麗箱入調進

安く賣る店
買ひよき店

白木屋

大阪堺筋
電話代表本町三〇番


純無鉛
レート白粉
東京
平尾賛平商店
大阪